

Z32-B88

金の星

国立国会
8. 3. 26
図書館

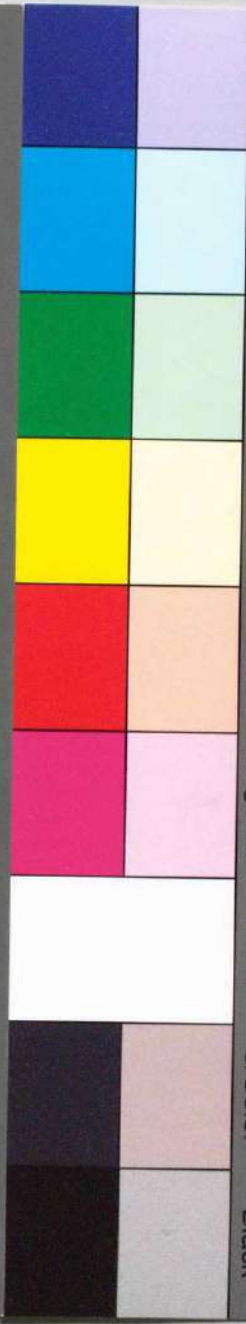
十月号

第十九号
卷



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19





あ
る
き
太
郎

お
も
ち
や
箱

二色版一、三色版二、単色版五九
各冊一・三〇 送料各〇・〇八
三色版七枚 凸版九〇葉

通て
ふ形
面白



童話作家協會

初山滋嬰頓
岡本時一
川上四郎
村山知義
初山滋
武井武雄
挿繪

日本童話選集

輯一第

現代著名の諸先生
三十四名の方々が
各々その作品中の
傑作の選集挿圖も
亦傑れたもの許り
です。



小川未明著

武井武雄裝幀
初山滋挿繪

未明童話集

卷

吹載四九篇一篇々々
未明氏特異の光
輝き放つ

バーネット夫人原著、モーゼス脚色
久保田万太郎譯 布日敏行裝
兒童劇小公

四六判一七〇頁
色刷四枚
定價一・三〇
送料〇・一二

澄水の底にある砂金にも譬ふべき兒童劇小公女の完結

北澤樂大序及序圖 保積稻天著

第判 オフセツ

お伽漫
畫集
1

素盞鳴尊

定價 一・五〇
送料 〇・二八

を商品化したもの

東 京 日 本 橋 通
丸 善 株 式 會 社
大 阪 神 戶 京 都 名 古 屋
橫 濱 福 岡 仙 臺 札 幌
丸 善 株 式 會 社 京 東 三 田 早 稲 川 丸 比 呂



秋の空高く	岡本歸一
月夜の歌	寺内萬治郎
オシツク	野口雨情
同作	藤井清水
起上り小法師	水島爾保布
航海中の出来事	大田 卯
お月様に叱られた狐	新井紀一
秋の歌	達崎 龍
一王國を争ふ	小島政二郎
大石主税	三島霜川
狐の負け	野口雨情選
おたまじやくし	鳴海 要吉
山雀の行衛	



「吉衛門」頼智ばなし	佐藤 猛夫
大發明家エヂソン	廣瀬龍太郎
山門の仁王	西川 喜平
田圃の月	野口雨情選
或る日の池	岩井信實
和尚さんと鼻かけ地藏	
頼光の四天王	川崎 春二
かみなり智	立石 美和
魔法くらべ	高橋里江
魔の祭	野口雨情選
宮本武藏にほめられた男	小城庄一
秋の研究	三木露風
世界の童話欄	
蛙の花嫁	
白い象の話	



歌 の 夜 月



畫 郎 治 萬 內 寺



少年文學名著選集 (i)
家 な き 娘

佛國マローロ原著
三井信術先生譯述
岩間とも枝女史畫

四六判箱入美本
内容三七〇頁
定價金壹圓廿錢
送料十錢

父母を失ひ、廣い世界にたゞ一人投げ出されたこの孤兒は、如何にして自分の運命を切り開いて行つたでせうか。本書は哲さんに如何に深い感激を與へるかを知らせません。少年少女の哲さんに、是非御一讀をおすゝめします。

少年文學名著選集 各冊
▽定價壹圓廿錢
▽送料十錢

1 十五少年漂流記

十五人の少年が絶海の孤島に漂流した大冒險生活のお話です。

2 家なき兒

名家に生れながら旅藝人に賣られ旅から旅を歩、孤兒のあはれな物語です。

3 黒馬物語

黒馬が自分の一生を物語つたお話です。人間のお話より遙かに遙かに面白い。行方不明の父と母と共に尋ねて遂に滿洲の森でめぐり遇ふ話。

4 父戀し

不思議な運命を持つたアーサー王と王に仕へた騎士達の哀れにしてゆかしい物語

5 アーサー王騎士物語

濱田廣介先生著 初山滋先生畫

菊判各定價壹圓八十錢
美裝送料十錢

◁ 評 好 大 ▷

ひろすけ童話讀本

第一集・第二集・第三集（以上全三冊）

島崎藤村先生曰く——（前略）どんな好いお話がこの本の中から出てくるでせう。眺めても眺めても飽きない青い蟬のやうな子供の世界のことが、もつとお知りになりたくば、濱田小父さんのお話へお出てください。

中村墨湖先生曰く——今の童話作家のうちで、誰のが一番すぐれてゐるかと問はれたなら、躊躇なく答へる、それは濱田廣介君の童話だと。彼の童話を讀めば解る。（中略）あの寫實的で同時に象徴的な廣介童話のうまさと美しさ、廣介君の童話のやうなのは、普通の小説なみに、といふよりは、普通の小説以上に、世間が取扱ふことを希望する。

東京牛込赤坂
達元町
株式會社
文教書院
振四
替三
口五
座三
東番

日本歴史實傳物語叢書

三島霜川先生著・羽鳥古山先生生
◇ 定價各冊金壹圓 送料十錢 ◇

1 源 義 經

2 曾 我 兄 弟

3 赤 穂 四 十 七 士

4 小 楠 公

5 信 玄 と 謙 信 (川中島戰)

6 維新 彰義隊と白虎隊

源義經のお話は誰が讀んでもたまらなく面白いお話です。この本は、でたための義經の物語とは違つて、歴史によつて義經の生ひ立ちから最後までを書いたものであります。さうに立派な本です。

あはれにして勇ましい曾我兄弟の物語は、日本の物語として永く傳へられるべきお話です。三島先生の苦心の結晶になつたこの「曾我兄弟」はこの物語と共に永遠に傳へられるべき名著です。

三島先生が最もお得意の研究だけに、でたためな講談など違ひ、眞に迫つてゐます。大石蔵之助をはじめ四十七士が、血の涙を流して主君の仇を討つたその當時の有様が手に取るやうに分ります。

楠正行のお話で本になつてゐるものが少い中に、この本だけは勇壯な正行の一生を傳へてゐる得難い著述です。父正成の死後、正行はどんなに勇壯な一生を送つたか本書を御覽下さい。

信玄と謙信の幼い頃のお話からはじまつて、この二人の偉い大將が川中島で大合戦をする有様までくわしく書いてあります。一々史蹟をさぐつて書いてあるこんな面白い本は外にありません。

徳川幕府が倒れ王政復古となつた明治維新の物語の中で、有名な彰義隊と、白虎隊のお話を面白く書いたのが本書です。少年諸君はこの本によつてどんなに深い喜びを見出されるでしょうか。



日本歴史實傳物語叢書 (6)

維新 彰義隊と白虎隊

三島霜川先生著・羽鳥古山先生書

定價金壹圓・送料十錢



彰義隊と白虎隊。その名を聞いただけで少年諸君は胸がなごりませう。倒れやうとする徳川三百年の幕府のために孤軍奮闘したその勇ましい勇士達の物語を、誰か涙なしに讀む事が出来ませう。この本の前半は勝安房や西郷南洲等の大活躍をする江戸城、脱しから上野の彰義隊の大奮戦の物語であり、後半は食津路、城、白虎隊の勇壯な最後をいつてあります。是非御一讀下さい。

青い目の人形

野口雨情先生著
定價金壹圓廿錢
送料十錢

有名な「青い目の人形」をはじめ野口雨情先生の傑作集です。童話研究家の賞賛も、現代は名作の傑作集として出版され、海外でも高く評価されています。

日本の児童と藝術教育

沖野岩三郎先生著
定價金壹圓八十錢
送料十錢

本書は沖野先生が苦心の結晶の著述で、童話論、児童教育論、児童心理論、児童教育の諸問題を論じています。研究者、児童教育者、児童の親などに読んでほしい書です。

労働の少年

沖野岩三郎先生著
定價金壹圓廿錢
送料十錢

この本は立派な立派な小説です。鐵道の職夫の子として生れた二人の少年が、山の中の暴動の爲めに、親を殺され、行く経路を書いた、實話に基づいた少年小説です。

平家物語

少年名著大系 卅三
定價金九十錢
送料十錢

おごる平家は久しからず、さしに榮えた平氏が、源氏の爲めに、平家の源氏の合戦で滅亡させられて、平氏は少年少女向きにわかりやすく書かれています。

フランダースの少年

少年名著大系 卅四
定價金九十錢
送料十錢

世界の名著で、考夫とあつた孤兒を主人公にした物語です。生れた少年が、孤兒を救ひ、少年の、藝術に最後は少年と大さの死の断絶さ。

ジグフリード王子物語

少年名著大系 卅五
定價金九十錢
送料十錢

ドイツのニイベルンンの傳説として世界に有名なジグフリード王子の物語です。日本にも、活動寫眞になつて來て大評判でした。男壯者にジグフリードの悲劇の一生は偉大な力をもつて讀者に迫ります。

トルストイ童話集

少年名著大系 卅六
定價金九十錢
送料十錢

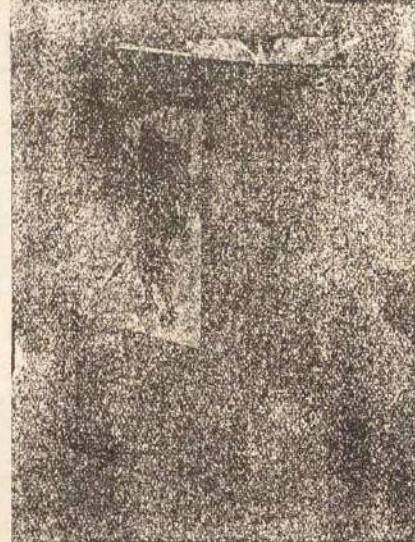
トルストイの童話は、深い教訓のこもつたもので、成るほど大トルストイの作だと思はせる立派なものです。本書には有名な「馬鹿のイラン」をはじめ名作を集めました。

ナポレオン

少年名著大系 卅七
定價金九十錢
送料十錢

ナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた少年ナポレオンが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征するまでの一生の物語です。

世界の代表的名作を三種づゝ一冊に収め、装幀は寺内萬治郎先生が苦心に苦心をこらした結果出来上つたものだけに、立派な事は何に比類がありません。



金の星家庭文庫

内容 ロビンソン漂流記
アラビヤの夜
ガリバー旅行記
(刊新) (1)

四六判五〇〇頁 各冊 定價金貳圓
天金箱入美本 送料十二錢

金の星家庭文庫

内容 アンデルセン童話
青い目の人形
イッタン物語
(刊新) (2)

安價を以て誇つてゐる全集本も、本書に比べたら遙かに見劣りがします。まして、世界の傑作ばかりを集めた、本書が内容に於て如何に優れてゐるか書店にて御覽下さい。

圖書東京四二〇〇番

金蘭社の大叢書

世界童話叢書第十編
仲木貞一編 池上浩装幀
アメリカ童話集

世界名篇物語叢書第十五編
加治亮介編 高坂元三装幀
モントクリスト伯爵
(岩 窟 王)

少年少女文藝講談叢書第十編
加治亮介編 池上浩装幀
大久保彦左衛門

少年少女科學太系第七編
松平道夫著 池上浩装幀
兒童植物學

藤末
新勳王志士物語叢書第二編
川名芳朗編 池上浩装幀
櫻田門の變
(井伊大老の死)

四六判箱入美本
本文三〇〇頁
原色版四枚
凸版刷挿圖二十枚
定価金一圓五十錢
送料十二錢

四六判箱入美本
本文一六九頁
原色版二枚
凸版刷挿圖十枚
定価金九十錢
送料十二錢

四六判總タロース
原色版カダア附
挿圖三色版外十頁
本文一七六頁
定価金一圓
送料十二錢

四六判總タロース
Dイッ式裝幀
本文一七〇頁
定価金一圓
送料十二錢

四六判箱入美本
本文一六九頁
原色版二枚
凸版刷挿圖十枚
定価金一圓
送料十二錢

アメリカには童話がないなど、今まで思はれてゐたのは大きな誤りであります。幾つに於て現代文化の先驅となすアメリカにはアメリカ人でなければ到底、創造する事の出来ない、全く獨特な童話を持つてゐます。
次刊「スペイン童話集」

子供が讀んでも大人が讀んでも、世界中で一番面白い小説は、このモントクリスト伯爵です。ユーゴのミゼラブルが優める魂の淨化、あるならば、デュマのモントクリスト伯爵は、優める魂のための勇果と満足な與へる強心劑と云へるでせう。(次刊「ナポレオン」を捕へる)

徳川幕府三百年を築きあげたのは一つには大久保彦左衛門あつたればこそ云ひ得ます。ともすれば龜裂の入らうとするその土台を固めに固めて來た彦左衛門の努力は、全く涙が溢る程です。生ひながら大往生まで奇傑彦左衛門の眞生一代記です。(次刊「會昌利新左衛門」)

大は米國セコリア國立公園のゼネラル・シアーマン・リィから、小は瀧地生じる蘇音類のやうなものに到るまで、あらゆる植物の種類、その性質を詳しく述べ説いた本書は、皆さんの學校に於ける理科課外讀本として、絶好の書と云へます。(次刊「兒童植物學」)

榮大に受けた徳川幕府も、時勢の力には如何する事も出来ず次第に衰えてゆく、其中にあつて必死になつて幕府の爲を計つた井伊掃部頭も、遂に水戸浪士の爲に櫻田門の裏中にたふれて了りました。其前後に續く勤王と佐幕との戦ひは、國運を定めたもの。次刊「新撰」

金の星

十月 號



(通巻第九拾五號)

東京市外 金蘭社 振替東京一〇七番 電話小石川五六番

情雨口野 齋作

作曲 藤井清水

、 逃がしも臨時に拘留せ

Handwritten musical score for "The Swan" by Maurice Strakosky. The score is written on ten systems of staves, featuring vocal lines and piano accompaniment. The lyrics are in Japanese. The score includes dynamic markings such as *mp*, *mf*, and *rit.* The handwriting is in ink on aged paper.

オシーツク〜

野口雨情

オシーツク〜

ツクンヨ〜

お星さまから

こぼれ水貰ろた

お星さま水持ちだ



ツクンヨ〜

オシーツク〜

こぼれ水貰ろた

お日さま知らない

ツクンヨ〜

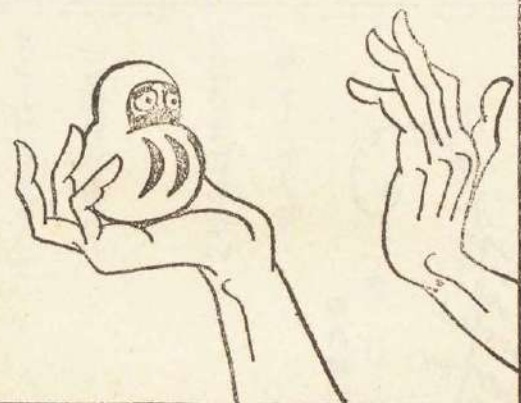
寺内萬治郎齋



起あきが小法師

水島爾保布

同 畫



「まことにお氣の毒でございますが、ああひにくと、御先者のお客様で、どのお座敷も一杯になつて居ります。まことにどうも……。」

と、宿屋の主人は揉み手とお辭儀とをかはるがはるに、かうことほりを述べて居ります。

お客といふのは四十ばかりの坊さん、

「御覽の通り一人旅の坊主ぢや。それに身なりも悪い。迷惑なことは元より御察ししては居るが、そこを何とか都合しては貰へまいか。若しまた迂論と思ふならば、はたご錢は些少なから茶代ともに前錢でお渡し致さう。只一晚手足を延ばさせて貰ひさへすればそれでよろしい。この店先でも俺の方は一向に構ひませぬ。尙若し店先が差し支へるならば納屋物置でも結構ぢや。」

と、坊さんは直ぐと財布を取り出して、その紐をほどきかけました。

「うま、うま。」

ました。

「さうさなア、わたしもさう思はぬではないが、何しろあすこは、あの通りなわけで……。」

と、主人は少し迷惑ありげな口ぶりを見せました。

「離れが明いて居るといはれるのかな。それは又何よりぢや。」

「明いて居るには居りますが、ちとその、なんなん御座います。實は長い間閉ぢ切りにしておきましたので、ゴミだらけになつて居りますし、その上、……。」

と、主人は、次の言葉を、しきりと口の中舌の上でとつといつ持て餘してでもゐるやうな顔つきをして居りました。

「いいえ、それは大丈夫で御座いますよ。殊に對手は御出家のことではあり、もともとあの離れの化物と申したところで、……。」

と、番頭は云ひかけて思はず自分で自分の口を片

と、主人は慌て、遮りながら、

「決して、お疑ひ申すなどと、そんな事は毛頭御座いませぬ。全く表裏ともにお客様が立て込んで居ります次第で……。」

さういふ間にも遠い近い座敷からは、しきりなしに手を叩く音や、女中を呼ぶ聲が聞えて來ました。

「いや、俺もとんだ廻り氣を出して済まなかつた。悪く思はないで下さい。何しろ今朝から歩きついで、この足はまるで棒のやうになつて了つてゐる。

この看板を見かけてやれやれとばかり飛び込んだ次第で、どうもはや我ながら意久地がなく草疲れたものだ。」

と、坊さんは上りがさちへ腰をかけて、両手で兩脚を撫でさすつて居りました。

「では、旦那さま、如何で御座います。あの離れの方へお通し申しては……。」

と、側に帳合をしてゐた番頭が、かう口をはさみ

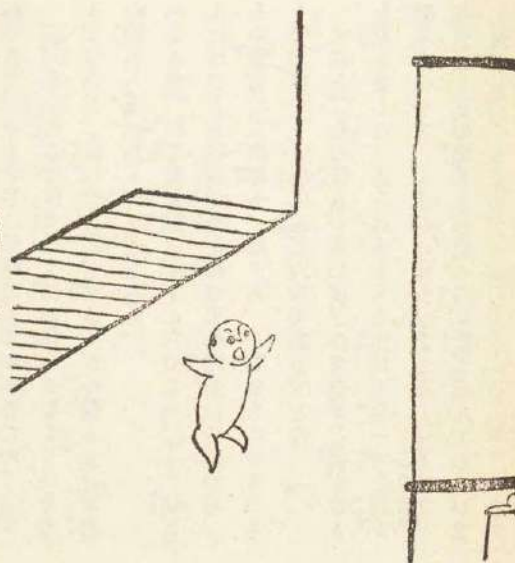


手でふさぎました。
「は、ア、その離れには何か怪しい事でもあると見えまするな。いや、それも苦しいは御座らぬ。何も旅の氣散じ、殊に一人は退屈なものや。化物の對手も時にとつていい慰みにもなりませう。」
と、坊さんは一向氣にもかけぬ様子で、さつさと草鞋の紐をほどき出しました。

離れといふのは板屋葺き四疊半の數奇屋作りでありました。母屋からは飛石の數五十餘りも隔てた庭の片隅、池の縁に臨んで建て、ありました。

「いやこれは思ひもよらぬ結構な構へぢや。なる程長い間明けてあつたさうで大分微臭くもあれば埃臭くもあるが、物置き小屋や辻堂の板敷へ寝ることを思へば何でもない。」

と、坊さんはその離れのまん中にすつかり寛いだ風で、兩足を長々と投げ出して、こんな一人言をい



ひながら、あたりを見廻して居りました。
後ろは床の間、前は竹の溜れ縁を越して池、長い蘭草が縁の上へ迄まるで垣根でも結つたやうに延び上つてゐるのが、薄い行燈の灯を映して右へ左へさ

わさわと揺れ動いてゐました。

「先刻主人と番頭の話の模様では、何か怪しいものでも出るさうなが、なる程、さもありさうな様子だ。大方この古池の中からも現はれて来る何かの化生でももあるんだらうが、まアまア何でもい。どうで出るものならなる丈早いところを見せて貰ひたいものだ。折角いゝ心持に寝込んだのを起されるなどは困るからな。だが、さういつて出るか出ぬかも判らぬ化物を待つてもゐられない。では、そろゝ寝支度をしようかな。」

と、坊さんはさういひながら、上の黒い衣を脱ぎかけました。と、不意に、側の疊の下の方で、ぶつぶつと、まるで湯の沸るやうな音が聞えて來ました。と同時に、その疊の隅つこが、下から棒か何かで突き上げるやうに、もくもくもりと持ち上つて來て、その間から、長さ五寸ばかりの、縫ひぐるみの這ひ這ひ人形のやうな恰好をした白いものが、するする

と這ひ出して來ました。

「おやあや、化物といふのはこれか。うやどうも、とんだとぼけた姿をしてゐる。こりやこりや、お前は一體何だね。」と、坊さんは案に相違したといつた顔つきで、いく分呆れ氣味でかう訊きました。

が、その小さな怪人は、何の答へもなく、いきなり、ついと、蛙のやうに、坊さんが今脱ぎかけた衣の袖へと飛びかゝつて來ました。

「こりや、粗忽な真似をするんぢやない。」と、坊さんはばつとその衣の袖を拂つて今度飛びついたら、その飛びつく出端へ、喝！と、一聲食らはせるつもりで、びたりと座り直したのでありました。

すると、その怪しいものは、ツツツと後ずさりを初めました。あと退去りする度に五分一寸と體が縮んで行つて、しまひには一寸あるなしの豆人形になつて、その儘もとの疊の目に潜り込んでしまひました。

の小人達は、まるで豆の弾けるやうに、ボン／＼と坊さんめがけて飛びついて來ました。

「こりや／＼、お前方はこの俺をどうしようといふのぢや。どうもくすぐつたくていけない。」

と、右へ左へと拂ひのけると袖にあふられて、小人達は、まるで豆を撒くやうに、バラ／＼と轉がつて了ひました。

「何といふ齒痒い事だ。云ひ甲斐もない奴等め、もつと手厳しく攻め立てろ。」と、興の中の小人は躍氣になつて下知をして居ります。

「は、ア、これが大將だな。あや、おや、お前さんは達摩大師の姿をしてゐるぢやないか。小さくとも俺のお仲間ぢや。そんな窮屈な興の中にゐるよりは、愚僧の掌のうちへ來なさい。惡戯をやめて些と話でもしてはどうかね。」

と、坊さんはさういひながら、興の中へ指を入れて、その大將をちよいとつまみ出しました。見ると

「何の事だ。頼と他愛もない化物だ。」と、坊さんは思はず仰向いて聲を出して笑ひ出しました。

その笑ふ聲の下から、たつた今消えて無くなつた這ひ這ひ人形を先導に、何百何十とも數へもならない程澤山な、泥人形とも芥子人形とも何ともえないの知れない小人の群が、まるで蟻でも這ひ出して來るやうに、そこらの疊の引き合せ目からぞろ／＼と現はれて來ました。見るとその大勢のものゝ真ん中には、お神興のやうに飾り立てた小さなお興が一つ、中には赤い衣を頭からすつかりかぶつた、身の丈一寸ばかりの小人が、丸くなつて座つて居りました。それを皆なして代る代るにかつきながら、わんわんといつて、坊さんの前へ迄押し寄せて來たのであります。

「いやア、出たわ出たわ。まるでオモチャ箱でも引くり返へしたやうな有様ぢや。」

さういひながら、何をするのかと見てゐると、そ

張子の起き上り小法師でありました。

「これはいゝ思ひが出來た。」

と、坊さんは、それを側の小机の上へころ／＼と投げ出しました。

びつくりしたのは小人連中でありました。

「和尚さん。和尚さん。もう私達はわるさはしません。どうか、私達の王様をかへして下さい。」

小人達は、坊さんの前へベタ／＼と座つて口々に嘆願をはじめました。

「いや、これは私のおもちやには手ごろだ。返へすことは出來ないよ。」

坊さんはニコ／＼笑ひながらいひました。

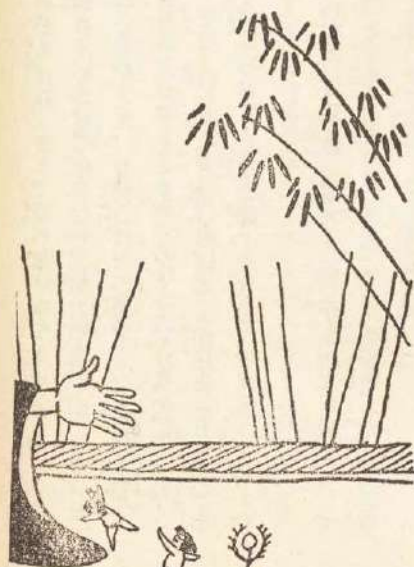
「どうか、そんな意地の悪いことを仰有らずに、王様を返へして下さい。その代りには、どんなお禮でも致します。」

と、小人は坊さんの足へ取り縋つて、尙一生懸命に頼みました。

「お禮をするつてね。お前方のお禮といふのは一體何だね。」

「和尚さんの欲しいとお思ひになるもの、何なりと仰つて下さい。お望み次第持つて来て差し上げます。寶石黄金はもとより、着物でも持ち物でも、又は召し上りものでも……。」

「お前方にそんな事が出来るのかね。」



「それはわけのない事で御座います。疑はしく思召すなら早速に御目にかけませう。」

小人の一人が、高く手をあげて一振り大きく振つたかと思ふと、一同の者は、即座にもとの疊の間へ消を込んで了ひました。

しばらくすると、一枚の小判が十人餘りの手で支へられて、坊さんの前へ運ばれて來ました。ついで



て一枚、又一枚、といった具合に見る／＼うちに、坊さんの前には、五十枚ばかりの小判がピカ／＼と一列にずらりと並べられました。

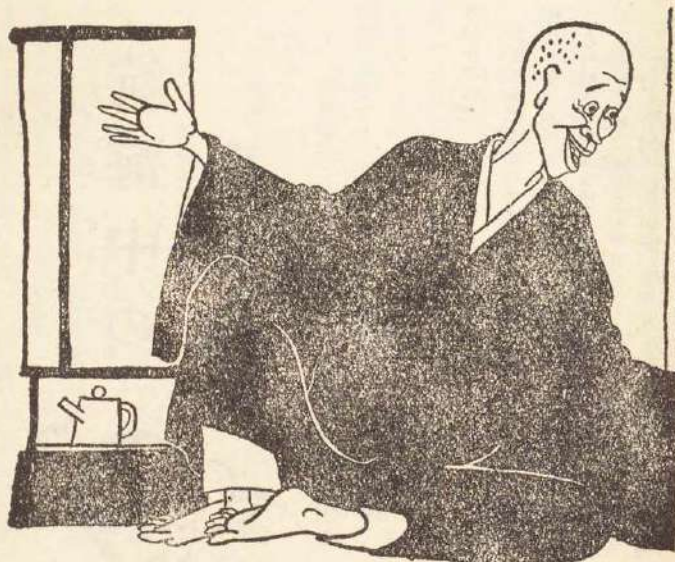
「いや、これは辱けない。折角のお志ぢやから、これは頂戴するとして、では起き上り小法師の王様はお前達に返へすしよう。」

と、坊さんはそこで起き上り小法師を掴んで、もとの奥の中へ入れてやりました。

翌る朝になると、母屋では、上下引くりかへすやうな大騒ぎがはじまりました。昨夜泥棒が這入つて宿の主人をはじめ、泊つた客様の全部が、揃つて小判を盗まれたといふのでありました。

離れの化物達が、王様の起き上り小法師を助ける爲めにした坊さんへの貢ものは、みんな母屋の人々の懐ろから持つて來たものでありました。無論、坊さんはそれぞれもとの主へ返へしてやつた事であります。

(をはり)



航海中の 出来事

犬田 卯
岩岡とも枝 畫

一
アフリカの北部にアルジェリーといふフランスの殖民地があります。そのアルジェリーと本國フランスとの間を走つてゐる汽船にシレエヌ號といふのがありました。
一八九五年の秋のことでした。シレエヌ號はアルジェリーから澤山の荷物やお客を積んで、あの地中海をフランスへ向けて走つて居りました。



一四

シレエヌ號の船長室には、船長の子息のジャン少年が、いつも樂しうに戯れて居りました。彼は父につれられて珍らしい殖民地の旅をつとけ、今、本國に待つてゐるお母さまの膝下へ歸るところなのであります。

澤山のお土産——お母さまのお好きな果物や、寶石や、熱帯地の植物や、土人の使つてゐた器具や……さうしたものに交つて一匹の人真似猿が居りました。これは蠻地の方で土人からもらつたもので、もうジャン少年によく馴れて居り、毎日遊び仲間になつてゐてくれるのでした。

この人真似猿に、彼は「キツク」といふ名をつけました。

「キツクや、ダンスをして御覽！」

すると相巧なお猿は眞面目な手つき足つきで見事に踊り出します。

「キツクや、御本をよんで御覽！」

するとキツクは机の上からジャン少年の御本を持つて來て、さも何んでも讀めるといふ様に振舞います。

ジャン少年は退屈な海の上の幾日間を、かうしてお猿さんと遊びくらしました。従つて日毎にキツクが可愛ゆくなり、今ではもうお猿さんだといふ考へは通り越してしまひ、自分

の小さい弟としか思へないのであります。

「キツクや、もう遅いからねんねしよう。」

「キツクや、さあ、朝飯をいたさかう。」

「キツクや、お寢には何を食ふようね。」

寢るにも起きるにも、ジャン少年は、すべてキツクと共にするのであります。

「ね、キツクや、フランスのお母さまのところへ歸つたら一しよに學校へ行かう。」

「キツクや、それから一しよに遠足に行かう、ね、そしてお前の好きな本讀りをやらう。」

シレエヌ號はかうした楽しい團樂を乗せてだん／＼と本國へ近づきます。ところがこゝに思はぬ事件が起つて可愛いキツクに悲しい運命が迫つて來たのであります。

二

ある朝のことでした。

船員達は勤務についてゐるものを除いて全部甲板に整列させられ、副長のきびしいせんぎを受けて居りました。

聞けば昨夜から今朝のうちに掛けて、ジャン少年がお母様

へお土産に買つて来たダイヤの指輪が一個紛失したといふのです。

「指輪は用簾笥の上に隠へ納めたまゝ置いてあつたんだ。誰か間違つてそれを持つて来てしまつたものはないか。人間には誰しも間違ひといふものがある。間違ひをしでかしたらさう正直に今のうちに申出でるがいゝ。」

副長はつゞいて云ひました。

「今のうち正直に申出れば勿論罪にはならない。が、もう十分間おくれゝば、船の規則だから仕方がない、銃殺に處してしまふのだ。銃殺なんかされるのは誰しも厭にきまつてゐる。何かほかのつまらぬものだと思つて間違つて持つて来たものがあつたら、さあ、早くさう云ふがいゝ！」

然し船員達は誰一人として私が間違つて持つて来ました」といつて出るものがありませんでした。

副長はいきり立つて、威めしい聲でどなりました。

「この中の誰か盗んだに違ひないのだ。お客の方は荷物から何から何まですつかり檢べたのだ。それに船長室へ出入りするのはお客の中には一人もないのだから、船員の中の誰かがきつと盗つたに相違ないのだ。いさぎよく白狀しなければ

一人々々榜間にかけても調べ出して見せるからさう思へ！」船の中といふものは、私達が陸上で想像してゐる以上に苛酷なものです。ましてこの事件のあつた一八九五年前後は、陸上の法律は船の上では實際には通用しませんでした。だから船の上では船の上特別のむごい規則が行はれてゐたのであります。つまり副長が先ほど申しましたやうに、規則を犯したものは銃殺され、海の中へ棄て去られなければならないのであります。

また犯人があつてもそれを仲間であくし合ふか、或は有る筈の犯人がどうしても出ない場合には、船員みんなが罰せられなければならないこともありました。

だから船員達も氣が氣であります。副長がいきり出して榜間にかけて申しますと、一同はふるへ上つてしまひました。が、それに拘らず、私が犯人です！と云つて出るものがあります。

「ちや、仕方がない。一人々々白狀するまで、調べ上げてやる！」

副長は最後の決心をしたやうに云ひました。するとその時一人の年老つた船員が申しました。

「副長殿、しばらくお待ちを願ひます。」

「何だ！待てとは……」

「副長殿の中される通り、船長室へ出入りするのには船員のかにはないのですから、ダイヤの指輪はきつと私達の中の誰か盗つたに相違ないのです。ですから私達がお互ひに、ぐづぐづばらんにしらべ合つて見たいのです。副長殿に云はれて出しづらくなつてしまつてゐるのかも分りませんから、友人同志でしらべ出して見たいのです。」

「宜しい！」と副長は云ひました。そして姿を副長室へかくしました。

あとに残つた船員達は、お互ひに打解で調べ合ひました。他の勤務についてゐる者をも調べました。

が、いくら探しても調べても、寶石は見つかりません。

「どうだ、犯人は上つたか？」

副長はもどかしくなつて一同の前に、その遍ましい姿を現しました。

「副長殿、どうしても犯人が上りません！」

老船員は打ちしはれて申しました。

「ちや仕方がない、一人々々榜間にかけるまでだ！」



いよく構間ときいて、一同はもうふるへ上つてしまひました。

ところがその時です！

「犯人が分りました！」

いきせき切つて梯子を登つて来たものがあります。見れば今まで機関室にゐた一人の火夫でした。

「犯人が分つた？」

「え、分りました！」

「誰だ、犯人は？ 貴様か！」

「いえ、あの船長殿の坊ちやんの可愛がつてゐる猿の野郎です！」

三

人面似猿が指輪泥棒の犯人！

あんまり調べが激しいので、火夫の奴氣でも違つたのではあるまいかと思つて、副長はよく落付いて猿が犯人であることを述べろと申しました。

火夫の云ふところによると、ふと石炭を運びに行つて炭敷棄場の方を見ると、そこに何かしら振き散したあとがある。

船員の一人がさう云ひました。

「宜しい、ためして見よう」

そこで一同はつとして、火夫が持つて来た寶石の函をもとのところへ戻して置き、何氣ない風で猿の行動を見守つてゐました。

正直なキツクは、最初は何んだかそは／＼してゐましたがやがていつの間にか、その函を持つて行つて炭敷の中へ埋めました。

そこで眞犯人は疑もなく可哀さうなキツクであることが分りました。

「此奴、どうしてくれよう！」

船員達は今にも構間にかかれようとした原因が、この猿でもない一匹の猿だつたと思ふと、可笑しいは可笑しいし、悔やしいには悔やしい。

「此奴、銃殺の刑に處しちまへ！」

「さうだ、それがいい、それがいい！」

といふ結論に到達しました。

「だが、これは坊ちやんが、死ぬほど可愛がつてゐるお猿さんだ！」

よく見ると指輪の函がそこに埋められてゐる。最初は船員の誰かが盗つたは盗つたが、しらべがやかましいので置場に困り、あわてゝこんなところへかくしたのだと考へた。が、更によく見ると、どうも人間の仕業にしてはあまりに智慧がなさ過ぎる。些くともつと巧く分らないやうに隠せる筈だ。さう思つて尙もよく見ると、どうやら猿の足あとらしいものがある。引振きさらしたのも、どうもさう云へば人間でなくて猿である！

「猿の奴、船長室から盗んで来てこんなことをしやがつたのだ！」

さう夢中で叫んで、火夫は副長のところへ飛んで来たのでありました。

「然し、果して猿かどうか、まだそれだけでは證據が不十分だ！」

副長は申しました。

「それぢや副長殿、猿は一度したことはまた忘れずにやると申すことですから、あの寶石の函を船長室へ戻して置いて見たら如何なものでせう。奴、きつともと通り埋めて来るに違ひありません！」

「だからさ、銃殺といつても空砲でやるのさ。」

「銃殺のまねか。」

「さうだ。こいつよく人まねをするから、こつちでもまねをしてやるのだ。」

「それがいい、それがいい。」

四

「お猿さんが銃殺の刑に處せられるさうだ。」

かういふ評判は忽ちのうちに全船中にひろまりました。

「本當にやるんだらうか？」

「本當にやるんださうだ、實彈で！」

噂といふものは變なもので、直ぐにさういふ風に姿をかへてしまひます。何しろ可哀さうにはちがひないが、畜生の分際で怪しからぬ泥棒などをやらかして全船中のものへ只ならぬ迷惑をかけたのですから、みんなよろこんで見物にやつて來ました。

飼主であるジャン少年は最初、とにかくにも自分の愛してゐるキツクを銃先に立たせるには忍びないと思ひましたが然し船員達に非常な怖い目を見せたのですから、これも止む

を得ないことだとあきらめました。

それに本當をきけば、たゞなくさみに銃殺のまねをするのだとのこと、そこで、もう一切の事情を感じてぶる／＼ふるへてゐるキツクをはけまし、甲板へ連れて出しました。

甲板には十人の武裝した船員が、銃を立てゝ待つてゐました。

哀れなキツクは、彼等から二十歩のところへ立たされました。悲しげに泣いて逃げようとするので細い鎖でつながれました。

「構へ銃！」

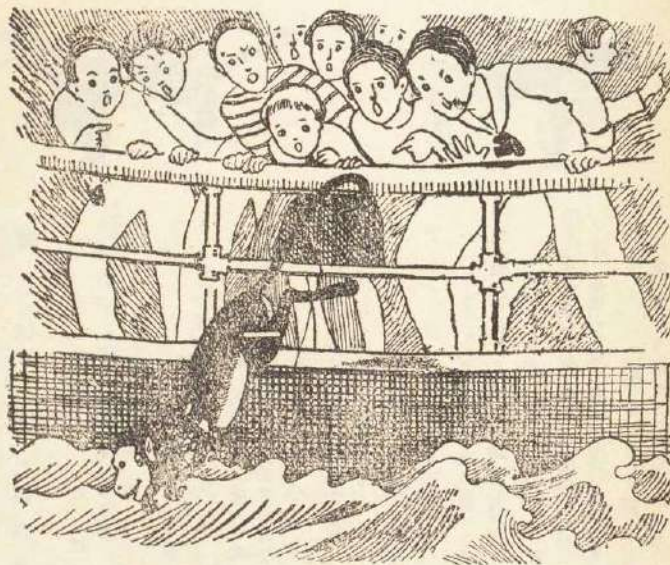
命令一下、十人の船員は一齊にお猿の方へ銃先を向けました。

すると哀れなキツクは、もう本當に打たれてしまふのだと思ひ込み、もがいて逃げようとする代りに、ちよこんとそこへ坐つて十人の船員達の方へ向き直り、両手を合せて許して下さいと拜みました。

が、その甲斐もなく、

「打て！」

鐵のやうな號令です。



と同時に轟然たる銃音！

が、その銃音より一秒間早く、わがキツクは満身の力をこめて鎖を引き切り、秒のやうに空中へ躍り上つて、そのまゝ遠く渦巻く荒海の中へ飛込んでしまひました。

あつけにとられたのは見物人です。

が、それどころではありませんでした。キツクが海中へ躍り込むと同時に、舷側の一艘のボートがきり／＼きり／＼と巻き下され、あれあれといふ間もなく、そのボートは荒波の中へへき出されたのです。

五

中には誰が乗つてゐたでせうか？

疑ひもなくジャン少年です！

ジャン少年はオールを取つて、荒波を乗り切り乗り切り、波間に見えなくなつた愛するキツクをたづねて、漕いで行きます。

しかし、波はあらく、それにキツクはその荒波に吞まれて海中ふかく沈んでしまつたものか、どこにも姿が見えないのです。

だがジャン少年は何か自信のあるものゝ如く漕いで行きます。やがて彼は、ざんぶと荒波の中へ身をおどらせました。そして暫し姿を消してゐたと思ふと、何かしら腕に抱いて浮び上りました。

抱いてゐたのは勿論愛するキツクです。

ちようどそこへ屈強の水夫が二人、別のボートを下ろしてジャン少年を救ひに行きました。

やがてその二人の水夫に扶けられてジャン少年は船へ上つて來ました。腕には潮水に濡れたキツクが、しつかと抱かれて居ります。

見てゐたあらゆる人達は、思はず「萬歳」を叫びました。

x x x

かうして哀れむべき人まね猿のキツクは、危い運命をのがれて再びもとの愛すべきキツクになりました。

そして今はなつかしいフランスのお母さまのもとへ歸つたジャン少年の無二の遊び友達となつてゐるといふことです。

(をばり)

童心句

野口雨情隠

○夏の月とんびの笛でねむつてる
評、うさぎの子供の夢みてる
朝鮮 河野 祇吉

夕立に蜚蝶の蝶々が驚いた
埼玉 岡田 落木

でんでん虫さん草鞋おはきよすべらない
青森 小林 安子

○花の宿蜂もつかれてねんねした
山梨 乙置 とく
評、みんなもつかれて睡つてく

でん／＼虫早く引越せ雨がやむ
山梨 伊藤たま江

釜登提灯つけて釜買ひに
東京 福島 正夫

○小雀が焼けたお蔵の屋根にゐた
評、小雀『わたしのお家も焼けちゃった。』
群馬 青柳 花明

お風呂から出たほやほやの丸裸
お風呂から出たほやほやの丸裸

夏の空つばめがスーッとすじ書いた
熊本 山村 カエ

青蛙柿の小枝でお月見だ
千葉 鈴木香五郎

親馬が仔馬に留守居たのんでた
名古屋 島本 夫二

ブランコに雀がチヨツと乗つてみた
東京 山本すゞ吉

○お日様のおともしてゐる日廻草
評、水い一日いつ日が暮れる
三重 伊藤 正之

芋虫にこわごわ仔犬よつて見る
神奈川 滝谷 正彦

めだかとりめだかにすいとにけられた
埼玉 新井 東一

草ゆれて水の底でもゆれてゐる
埼玉 關口 竹子

電話口おじぎと一緒にさようなら
東京 稲垣 秀坊

朝早くとび出して行く親つばめ
東京 宮内 清二

日が沈む蝙蝠ホツホツの穂
東京 小林 一路

カナカナが鳴いて夜があけ日がくれる
東京 板谷 令子

○ほうづきよのぞいてみないか月が出た
評、おかあさまのような月が出た
東京 河邊すみ子

夏の夜にぎやかだなあ橋の上
埼玉 高野 房一

おひる寝かトンボもベンチの板の上
東京 狩野 忠信

○お星さん花火のまねして飛びました
評、きつこお月さんが揚げた花火だろ
福岡 武田 幸一

竹やぶにこがらしからんでザワザワ
神奈川 池田 又雄

池の中赤い金魚の尾が見へた
東京 後藤 賢三

評、と思つたらすぐ消えた
東京 山田 次郎

両側のス、キが仲良くおじぎした

威阜 土屋 静文

大だらひ坊やは月と湯をあびた
長野 戸部 良夫

アンテナのさなの頭で蟬が鳴き
朝鮮 山本 力

大波が小波におんぶされちやつた
東京 河合英太郎

蝸牛誰もゐないよ角出しな
兵庫 大島知恵子

夜の塀二階のかけがうつつてゐる
東京 山本 忠三

○おかし屋の中へつばめが入つてた
評、子供は金魚が泳いだろ
東京 高木 実

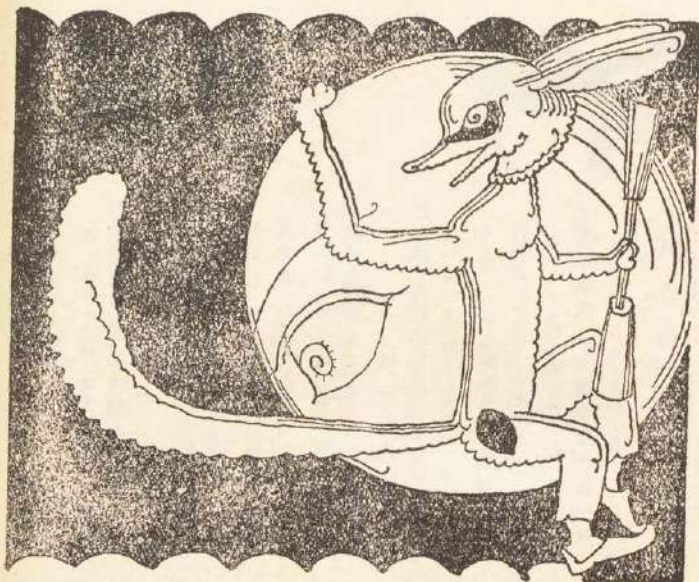
夕立だとんぼはお羽をぬらすなよ
不明 佐藤 喬平

さわがにのよこ／＼歩き日が暮れた
大阪 松 文

母さんよい月夜だと見てました
風の子は風鈴ほしいとゆすつてた
蝶々は教室ぬけて行きました

お月様に叱られた狐

新井 紀一
初山 滋登



雲の無い、よく晴れた晩にお月さまを見ると、そこには始終一匹の兎が杵を持つてお餅を搗いて居ります。が、その兎も、むかしむかしのずつと大昔からあゝやつてお月さまのところにゐるので、今では段段年を取つて白髪が増へ、腰が曲り、もうお餅を搗くのが骨が折れ、苦しいやうになりました。で或る日、その年寄りの皺くちゃ兎はお月さまに申しました。

「お月さま、私もかう年を取つてはお役目が大儀でなりません。どうか他の若い、元氣のある兎と代つ

て隠居させて頂きたうございます」

それをお聞きになつたお月さまは如何にも尤もの事と思はれました。で、早速下界の兎たちにその事を申し傳へられ、若い元氣のある兎を選ばれることになりました。

すると、下界では大騒ぎが始まりました。澤山の兎達は吾れ勝ちに、お月さまの前にびよこびよこ顔を突き出して、めい／＼に、大きな聲で叫び立てました。

「お月さま、どうか私を連れてつて下さい。私はこの通り元氣があつて、腰なんか少しも曲つてゐません、白髪だつて一本もありはしません」

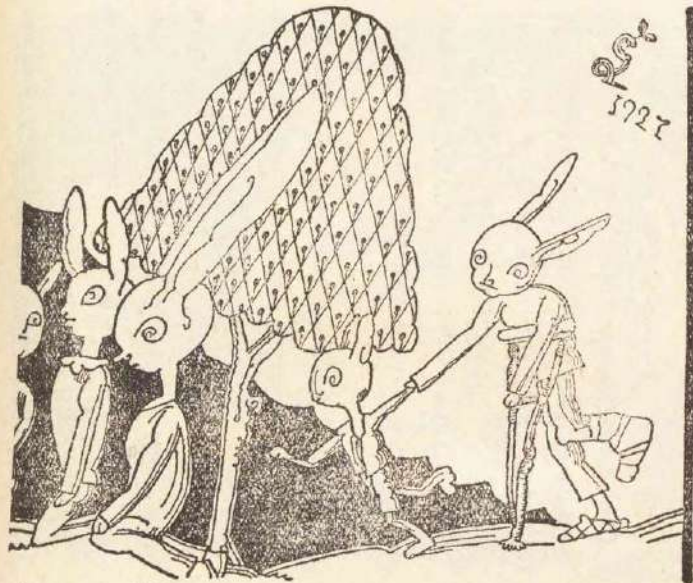
「いゝえ、お月さま、ぼくこそ去年生れたばかりで若いのです。この通り毛に艶があつて、幾らお餅を搗いたつてちつとも疲れることなんかありません」

「いゝえ、いゝえ、ぼくこそ……」

「どうかお月さま、あたしを……」

と、それはそれは耳も割れるばかりの大騒ぎです。

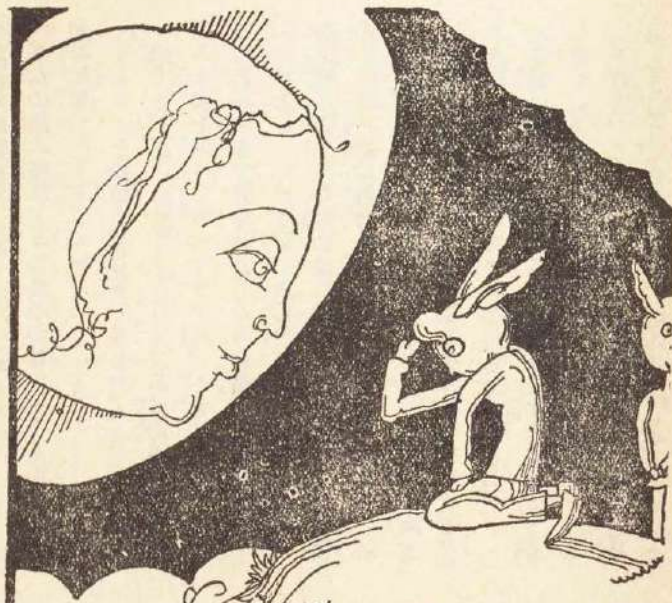
が、それも無理ではありません。何しろお月さまの兎と云へば、昔から詩人だの、繪描だの、學者だのそれから多勢の子供たちからわい／＼云つて持てはやされてゐる人氣のものでするもの。兎の身としてこれ程の名譽があるものではありません。だから兎たちは吾れ勝ちにお月さまの前に押しかけて行つたわけです。流石のお月さまもこれには面くらつてしまひました。この澤山の中から、たつたひとりだけを撰み出さなければならぬといふ事はどんなにむづかしいことか知れません。が、お月様の餅搗き兎にはどんなものでもがなれるといふ譯ではないのです。第一に、からだ中の毛が銀色に光つてゐなくてはなりません。それから、からだの大きさがきちんとお月さまの中に這入れるものでなくてはなりません。餘り小さ過ぎたり、また大き過ぎてお尻がはみし出たり、耳がによきと飛び出したりしたのではいけ



二六

ません。それからまた、百年や千年でよぼ／＼の爺さんになつて丁ふやうな兎でもいけません。何しろ今度隠居しようといふ餅搗き兎の如きも、何百萬年といふ前の大昔から續いてやつて來たのですからで、お月さまはぐるつとそこに集まつて來た兎たちを見廻されました。澤山の兎たちは、自分こそはお月さまの餅搗き兎の資格があるぞと云はんばかりの顔をして、簾の中から跳んで來るものもあれば山の上から轉がつて來るものもあり、また、野原の方から走つて來るものもあり、それはそれは世界中の兎が集まつて參りました。お月さまは、いつものやうににこやかな顔ばかりもしてゐられませんが、この日ばかりは裁判官のやうな厳しい顔をされて、端の方から順ぐりに検査をされて行きました。

「お前、お尻の毛が禿げてるけれど、それはどうしたのだね？」お月さまは、第一番に出て來た兎にさう云つて訊かれました。



「はい、これは先達つて友達と喧嘩をして咬まれた傷の痕でございます。が、その他はどこも何んともございません。お月さま、どうか私を……」

「いゝえ、傷のある者はいけません。それに友達と喧嘩するやうな者は、到底連れて行くわけに參りません！」さう云つて、第一番の兎は落第しました。直ぐ次ぎのが出ました。今度のは頭に瘤がありました。お月さまは暫くその瘤を見てゐられましたが、

やがて云ひました。

「お前の頭の瘤はどうしたのかね、一つその謂はれを私に聞かして下さい」

すると、その瘤の兎は答へました。

「他でもございませぬ。これは二三日前の晩に煙にある大根を掘つて喰べてます時、不意に出て来た百姓の爲めに棒で打たれました時の瘤でございませぬ」

「いけない、いけない、人の骨打つて作つた畑のものを喰べるやうな者は連れてゆくわけにはいませぬ」

「お月様は機械を悪くしてさう云ひました。これも落第でした。と、又直ぐ三番目の兎が出て来ました。これはまた恐ろしく耳の長い兎でした。で、お月様は氣の毒さうに笑ひながら云ひました。

「お前の耳は私の顔からはみ出して丁ふよ。もう少し短かいといふのがね」

それで、この兎も落第でした。と、また後から後からと出て来ました。が、皆んなどこかしら悪いと

ころがあつて落第でした。或る者は鐵砲で打たれて足が跛だつたり、また或る者は手の色が黒くてダメだつたり、また、お尻が大きく過ぎてダメだつたり、ひとりもお月さまの氣に入る満足なのはありませんでした。と、この時一匹の狐が岩の蔭に隠れてゐました。見てゐると、出て来る兎のどれもこれもが皆んな落第するのを見て、ずるい考へを起しました。狐はやがて、銀色に光る毛をもつた立派な兎にばけて出て来ました。

「お月さま、私はこの通り銀色の毛をもつてゐるしどこにも缺點がございませぬ。どうか私を連れてつて餅搗きの役を仰せつけて下さいまし」

狐はさう云つて、お月さまの前に丁寧に頭を下げました。お月さまは、今まで出る兎も出る兎もろくなものが無くてがっかりしてゐられた時なので、すつかり悦んで了ひました。で、早速その狐を連れて高い高い空の彼方に上つて行かれました。

お月さまは、兎にばけた狐にお餅を搗かして、毎晩毎晩高い空から下界を照らしてゐるでになりました。下界ではまた、今までも増して綺麗なお月さまと、餅搗き兎を見て、やんやとはやし立てました。

が、それも暫くでした。下界の人達はやがて、お月さまと餅搗き兎を振り向かなくなりました。その上、時には雲に包まれてさるきり外の見えないこともあるし、また時には、眞つ暗な晩もありました。

餅搗き兎の狐はそろ／＼退屈をし始めました。退屈の餘り大きな口を明けて欠伸びすることもありました。お月さまはその度びに苦い顔をされて、小言を云はれました。

狐はそろ／＼後悔し始めました。こんな窮屈な思ひをして餅を搗いてゐるより、下界にゐて鶏でも捕つて喰べてる方がどんなにいいだらう。こんなところにゐては人をばかすことも出来ないし、ちつとも面白くなんかありません。狐は欠伸びにさう云

つて愚痴をこぼしました。が、とうとう或る日、狐は居眠りをしながら大きな尻尾を出して了ひました。そして、ハッと思ふ暇もなくお月さまに見られて了ひました。隠すひまもありません。流石の狐も眞つ赤な顔をして下を向いて了ひました。

が、それと見たお月さまは嚇つと腹を立て、了ひ

れました。で、いきなりその尻尾を掴まれると、ぼんと下界目がけて投げ飛ばされました。尻尾を出した狐はくる／＼舞ひながら落ちて来ました。そして、或る山の岩角にぶつかつてぎやツと叫んだまゝ、目を廻して了ひました。

が、その事があつてからと云ふもの、お月さまのある晩には狐はどうしても外に出ることが出来なくなりしました。で、その時にはいつも暗い穴の中に引つ込んで、お月さまから顔を見られないやうにしてゐます。その代り、兎と云ふ兎、皆んな穴から出て、びよこびよこ跳ね廻るといふことです。(をばり)

秋の歌

達崎龍

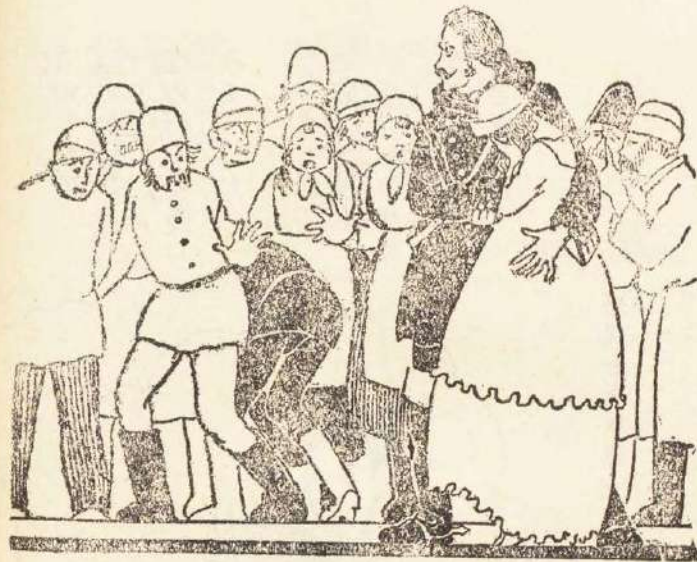
水のなかの
蘭草の花は
星より小さく
咲きました
橋を渡れば
雲は白いし
木苺とりに
行きました



草のなかの
遠い野馬は
雁の行くみち
みてました
こほろぎ虫は
かりかりりと
竹をかんで
啼きました



岩岡とも枝畫



一王國を争ふ

小島政二郎

岡本歸一畫

七

三三

と云ふのは、——いや——初めから話さなければ分らない。——そこへ、宿屋の亭主が酒と鶏肉を持って来た。僕は忽ちにそれを平けて、お代りを命じた。あの激しい道中に空き切つた僕のお腹には、この時の食事がどんなに旨かつたらう。盛んに食べた飲んだりした。

その時、ふと気が附くと、僕のうしろの扉の外で、何だかしきりに小聲で争つてゐるらしい氣はひがした。百姓の奴等、また酒機嫌でブツクサ云ひ争ひをしてゐるな。うるさい奴等だ。初めのうちは、そのくらゐに思つて別段氣にも止めずにゐた。ところが、ふいに、たとひこのエチエン・デューラールが死に掛けてゐる時でも、思はず

寢床から跳び上らずにはゐられないやうな聲が聞えて來たのだ。

耳を澄ますまでもなく、それは女の、締め付けられるやうな切ない苦しさうな悲鳴だつた。僕はナイフとフォークをガチャンと放り出すが早いか、次の隣間には、もう扉の外の群集の中に突ッ立つてゐた。

そこには、目の下の肉のダブ／＼たるんだ亭主と、赤茶色の毛をした、肥ツちよの女房と、二人の既婚の男と、女中とそれに付の男達も四五人ゐた。彼等は、男も女もみんな眞赤になつて怒つてゐた。その眞中に、一目見るから美しい貴婦人が、恐ろしさを目に現し、蒼白な顔をして立つてゐた。彼女は女王のやうな氣高い顔を高く擧げて、輕蔑と恐れとの混ざり合つた態度で、ぐるりの下卑た人間達を、人種の違つた者のやうに見廻してゐた。だから、僕の姿を一目見るが否や彼女は、喜びと勝利に青い臍を耀しながら、いきなり跳んで來て僕の腕へ掴まつた。

『紳士よ、あなたは佛蘭西の軍人ですね。妾もう安全ですわ。』彼女は自分自身に云ふやうに云つて、ほつとしたらしい風情だつた。

『さうですとも、奥さん、もうあなたは安全です。』僕はかう云ひながら、彼女を安心させるために、彼女の手をぐつと力を入れて握り締めずにはゐられなかつた。何でもお命じ下さい。』

すると、彼女は、

『妾は佛蘭士人ですの。バロツタ伯爵といふ者の夫人です。この人達が、妾が佛蘭西の最良をすると云つて辱しめるんです。若し貴方が入らして下さらなかつたら、妾どんな目に合はされたか分りませんわ。』

僕は、もう一席僕が彼女の味方であることを現すために、彼女の手を援吻をした。それから、皆の奴等の方を、キツとなつて睨み付けてやつた。すると、彼等はこそ／＼と一人去り二人去りして、いつの間にか一人もゐなくなつてしまつた。

『伯爵夫人。僕は改めて彼女に話し掛けた。もう御安心なさい、僕が附いてゐますから。——お見受けしたところ、神經をおつかひ過ぎになつたやうですね。葡萄酒でもお飲みになつて、元氣をお附けにならなければいけません。』

僕は、靜かに彼女に腕を貸して、僕の部屋へ連れて來た。彼女は、僕と並んで食卓に向ひ、僕の差し出す葡萄酒を飲み

干した。

僕の貧しい食卓も、急に明るくなったやうな気がした。彼女は、丁度朝陽に照らし出された花のやうに美しかった。僕は思はず彼女に見惚れた。その心持が通じたのであらう、彼女の目の中にも、優しい好意のある微笑が浮んだ。諸君、僕だつて三十ぐらゐの時には、そんなに捨てた男振ではなかつたのだ。全騎兵聯隊中を探し廻つても、當時僕のやうな立派な頼頼を持った將校は二人とは見出し得なかつた。ミラの鬚は、僕のよりも稍長かつたけれど、少し長過ぎると云ふのが定評だつた。そこへ行くと、僕は何と云つても形がよかつた。ハハハ、いゝ。そんなことはまあ別として、僕はこの一人ほつちの夫人の保護者となつて、どんな恐ろしい奴が出て来ようとも、相手になつてやらうと決心をしてゐたのである。ところで、彼女の話ツぶりと云ふのがまた、その妻のやうに僕の心を捉へずには置かなかつた。極く手短に語つたところによると、彼女は今波蘭土へ歸國するための旅行をしてゐるのであつた。弟と一緒に附き添つて来てくれたのだつたが、途中で病氣になつてしまつた……。もうこれまでも、一度ならず、竊に心を佛蘭西に寄せてゐると云ふ癖で、百姓

達に虐められて来た……。そこまで語つて来て、彼女は急に身の上話から話を逸して、僕の手柄話を聞かせてくれと云つた。

ところが、いざ話してみると、僕の手柄話なら、彼女は既にボニヤトスキーの士官達から聞いて、あら方知つてゐた。それにも拘はらず、同じ話をもう一度僕自身の口から直接に聞きたがつた。この時ぐらゐ、僕は手柄話をするのに張り合ふを感じたことはない。女といふものは、大抵自分の話ばかりしたがつて、相手の話を聞かうとしない缺點を持つてゐるがこの夫人に限つて、實によく僕の話を耳を傾けてくれた。その熱心な有様は、丁度今夜こゝに集つて僕の話聞いてゐてくれる諸君にも負けないくらゐだ。さうして、それからそれへと、いろ／＼質問をして行くのだつた。

時間はドン／＼経つて行つた。村の時計が十一時を打つのを聞いた時、僕は思はずギョツとした。と云ふのは、大切な陛下の御用を、まる四時間忘れてゐたことに氣が附いたからである。

「私の尊敬する夫人よ、御無禮をお許し下さい。」云ひながら僕はつと立ち上つた。「私はこれからすぐ、ホフ城へ向つて出

發致さなければなりません。」

すると、夫人も同じやうに立ち上つたが、蒼ざめた顔に答めるやうな表情を浮べながら、

『まあ、妾は……。あなたに行かれてしまつたら、妾はどうなるのでございませう。』



「しかし奥さん、私はナポレオン陛下の御用です。私は既にこゝに永く居過ぎました。私の務めが、私を呼んでをります。私は行かなければなりません。」

「入らつしやらなければならぬですツて、妾をこの野蠻人共の間に置き去りにしたまふで……。ああ、妾はなぜ怒ひに、あなたに助けて戴いたりしたのだらう。あなたもなげまた、自分を力にしてゐよなどとさつき仰しやつたのでせう。」

彼女の目は涙で濡れて来た。と思ふ間もなく、僕の胸に身を投げかけたまゝ、よゝと泣き出した。保護者を以つて任じてゐる者にとつて

は、この時は實に辛い瞬間だった。同時に、若い生意氣盛りの將校にとつては、細心な警戒を必要とした時であつた。しかし、不幸にして、僕は保護者であると同時に、若い將校でもあつたのだ。で、僕は片手で彼女の豊かな狐色の髪を撫でながら、一方では耳へ一生懸命に慰めの言葉を囁いた。いやそればかりではない、氣を失つて倒れてはならぬと思つたので、片手で彼女を抱きかへてゐたのである。その時、女は涙は濡れた顔を振り仰いで僕を見た。さうして

「水を……。後生ですから、水を下さい。」と云つた。

うच्चちやつて置いたら、次の瞬間に彼女が氣絶をするのは分り切つてゐた。で、僕は長椅子の上へ、グツタリとした頭を横たへさせるが早いか、慌てゝ部屋を飛び出した。さうして部屋から部屋へと、水さしを探して廻つた。やつと探し當てゝ引返すまでには、どうしても四五分はかゝつたらう、部屋が空っぽで、女の姿がどこにも見えなくなつてゐるのを發見した時の僕の驚きを、諸君は想像することが出来るだらう。

ところが、更に驚いたことには、女の姿が見えないばかり

でなく、彼女の帽子も、テーブルの上に載せて置いた、銀筋りの附いた乗馬靴も、みんな無くなつてゐるのだ。僕はすぐ部屋の外へ飛び出して、大聲を擧げて、宿の主を呼んだ。しかし、主はなんにも知らなかつた。あんな女は、前に一度も見たことがないと言つた。

僕がヤキモキしてゐるのに、主の奴あんな女には用はないと云つた様子をしてゐた。では、宿の入口に二三人ゐる百姓のうち、誰かこゝから馬に乗つて逃げ出して行つた者を見はしなかつたかと尋ねても、いゝえ、誰も見ませんでしたといふ返事だつた。

僕は仕方なしに、一人であつちこつちと夢中になつて探し廻つた。

と、仕舞に、何の氣もなく鏡に映つてゐる自分自身の前に立ちどまつた。一目見るが否や、僕の目は丸く見開かれ、額はグラリと垂れ下つてしまつた。

諸君、僕の外套のボタンが、四つ外されてゐるのである。内隠しに仕舞つて置いたあの貴重な文書が盗み去られたことは、慌てて手の中へ突ッ込んで見るまでもなく分つてゐた。女の心の奥深く潜む悪賢さめ。あの女は、僕の胸に、よと



の下で仕事をして行きやアがつたのだ。將に目的地に着かうとしてゐる今、僕は肝腎の使命を果すことが出来なくなつたのだ。この使命を果すために、既に立派な一人の男子が、命を落してゐる。その男子から信用されて、更にその使命を託された僕の命までも奪はうとしてゐるのかも知れない。

若し陛下が、僕が陛下の急書を失つたといふことをお聞きになつたら、何と仰しやるであらう。

エチエン・デ・ラールがさういふ失策をしたといふことを、軍隊の人達は信じるだらうか。殊に、デ・ラールが女に囁かれたといふことが分つた時、陣中の共同食卓や、夜營の焚火のまはりで、どんな嘲笑が起ることであらう。

それと思ふと、僕は絶望のあまり、大地の上を轉がり廻りたかつた。(つづく)

泣き沈むと見せて、畜生の、僕から盗んで行つたのだ。僕が頭を撫でてやりながら、親切な言葉を囁いてゐる間に、外套



大石主税

三島霜川

羽鳥古山 畫

拾一、義士切腹

(前號までの梗概は)
一三〇頁にあります

三八

日が暮れると間もなく、公儀(おかみ)から、石川彌一右衛門、市野新八郎、松永小八郎の三人の役人が、泉岳寺へやつて來ました。そして、「一同、仙石伯耆守の役宅(官邸)に参れ。」と、云渡しました。その頃、幕府の老中(内閣員)たちは、「四十七士敵討」のことを、將軍綱吉の耳にも入れて、その處分について、いろ／＼相談をしました。そして、取あへず、肥後熊本の城主、細川越中守へ十七人。伊豫松山の城主、松平隠岐守へ十人。長門長府の城主、毛利甲斐守へ十人。三河岡崎の城主、水野監物へ十人。と、かう、四組に分けて、四人の大名に預けることにしました。さうして、「四十七士」は、「天下の罪人」にはなりませんが、しかし、その取扱は、格別でした。

初め、細川等四人の大名は、泉岳寺から、ちきちきに、「四十七士」を受取る筈でした。それが相談が變つて、「一ツたん、仙石伯耆守の役宅に集めてから、四人の大名に引渡すことになりました。さうして、吉田忠左衛門と富森助右衛門とは、朝から、ブツと、伯耆守の役宅にゐたのでした。

公儀では、老人と、そして、痾を受けてゐる者の爲に、二十挺の駕籠を用意しました。しかし、駕籠に乗った者は、十一人しかありませんでした。

「四十七士」は、討入の時の姿のまゝで、泉岳寺を出ました。夜の七時過ぎのことでした。

まづ眞ッ先に、二張の提灯。次に堀部安兵衛が、槍を突いて、勇氣、りん／＼と進みました。その少し後に退がつて、左に千崎與五郎、右に早見藤左衛門、どちらも、槍を持つて、つゝましました。その後、内藏助と主税——さうして、二列になつて、元氣な者は、十一挺の駕籠の兩側を護つて進みました。

他に、公儀の役人が、前後を警衛しました。「ひよつとすると、上杉家の者が斬込むで来るかも知れぬ。」

公儀の方でも、その心ばいがありました。で、横町横町や、橋のあるところへ來ると、提灯を停めて、とくと其處らを見廻つてから、行列を進めました。

「四十七士」が、無事に、伯耆守の役宅についたのは、夜の十時頃のことでした。めい／＼、槍やなどは、表門の外に立てかけて置いて、門内に入りました。兜頭巾も脱ぎました。門番は、一人々々、姓名をたづねました。

玄関にかゝると、そこで、また、一人々々、姓名をたづねられました。そして、式臺に、大小をぬぎ、兜頭巾や懷中物を置いて、廣間に導かれました。そこには、伯耆守の他に、お目付の鈴木源五右衛門と、水野小左衛門とが扣へてゐました。

やがて、内藏助、忠左衛門等十七人は、ヅラリと、

一列に並んで坐せられました。次に主税、安兵衛等十人を一列に、その次に、岡島八十右衛門、吉田澤右衛門等十人を一列に、そして、第四列目に間瀬孫九郎、間十次郎等九人が、一列に坐せられました。寺坂吉右衛門だけは、「引上」の途中で、内蔵助に命令的に頼まれて、南部坂の内匠頭の後室のところや、安藝の大學頭のところへ「使」に出かけて、この席に居ませんでした。

「その方ども……。」

と、伯耆守は、厳に一同に呼びかけました。内蔵助を始め、一同、ハツと頭を下げました。「討入」の大將も、こゝでは、人民が、えらいお役人の前に出たと同様でした。

「四十七士」は、こゝでまた、伯耆守から改めて、「四人の大名に、分けて預ける。神妙にして、後ちの御沙汰を待て。」

と、云渡されました。内蔵助等は、たゞ、謹むで、

「かしこまつてございます。」

と、「おこたへ」するばかりでした。そして、伯耆守等お役人たちも、その他に、格別、深い「あたづね」も、「お叱り」もしませんでした。

「内蔵助、これへ、進め。」

と、伯耆守は、急に、言葉を穩にして、いかにも、「親しみ」のあるやうに呼びました。

「はッ。」

と、内蔵助は、少しく前へ出ました。

「この度は、まことに落ちついた致方。年來の本望を遂げて、さぞ、満足であらう。一應は、吉田、富森兩人から聞取ったが、改めて、その方から聞きたい……いや、これは、お上みのお訊ねではないぞ。われ〴〵が、只、その方の「物語」として聞くのぢやぞ。」

内蔵助は、辯舌が爽といふ方ではありませんでしたが、い〴〵、追らず、ハツキリ、ハツキリと、



「討入」の有様を物語りました。さうして、忠左衛門が傍から、その足りないところを附足しました。

この物語のうちに、磯貝十郎左衛門が、討入と間もなく、上野介の家來に、百目蠟燭を、うんと出させて、それを、座敷や廊下に灯しつらねた話もありました。伯耆守も、鈴木、水野のお目付も、それを、非常に感心しました。そして、「その蠟燭を出させたのは、誰か。」

と、云って、特に其の名を訊ねました。

「あれに居ります磯貝十郎左衛門でございます。」

と、内蔵助は、前列、十七人のうちにゐる十郎左衛門の方を指して、こたへました。

「フム」と、云って、伯耆守等三人は、十郎左衛門の方を見ました。そして、「年は、若いやうぢやが、よくも、そこへ氣がついた。感づく至極ぢや。」

と、云って、大に其の、落ちついた「はたらき」を讃めました。

そのうちにも、水野小左衛門は、その「役目」も忘れたやうに、熱心に、いろ／＼のことを聞いては、いく度となく、四十六士の列を見回してゐました。ふいと、「大石主税は、どこに居るな。」

と、たづねました。

「私でございます。」

と、二列目にゐた主税は、物静に云つて、少し、前の方に出ました。

「ア、お前か。幾歳になるな。」

「十五歳に相成りまする。」

と、主税は、ハッキリと、こたえました。

「十五歳か、ム……成程、聲を聞くと、いかにも、まだ子どもぢやが、しかし、體から云ふと、どうしても、廿三ぢやな。また、それだから、今度の大義に加はつたのでもあらうが、ア、……。」

と、感歎して、ツクトと、主税の様子を見てゐました。そして、内藏助の方を振向いて、「あんたは、

實に良い子を持つたな。」

と、心から、さう云ひました。さうして、伯耆守やなど、「内匠頭は、何んとして、かうも、良い家來を、たくさんに持たれたのでしょうか。國家の干城といふものは、實に、かういふ家來をさして云ふのです。」

と、云合つたりして、只、感ぜられてゐました。

しかし、内藏助も、主税も、また他の四十四士も、今や、「天下の罪人」として、四人の大名に預けられる身の上でした。伯耆守や水野小左衛門が、いくら感ぜきして、内藏助等に同情しても、それは、どうすることも出来ませんでした。

間もなく、この同情ある罪人を預かる四人の大名の「使者」が、伯耆守等の前に呼出されました。まづ、第一に、細川越中守の使者、三宅藤兵衛と鎌田軍之助と堀内平八との三人が呼出されました。三人は、七百人からの人数を引きつれて、内藏助等の組、

十七人を受取りに來てゐました。

「申すまでもなく、これは、尋常の罪人とは違ふ。出來るだけ大切にしなければならんぞ。もし、駕籠の窓など、明けたいと申したら、心まかせにして遣はすが可いぞ。」

と、伯耆守は、きつと、云渡しました。

三宅藤兵衛等も、「實は、こちらも、然うしたくてならなかつたのです。」と、云ふやうに、悦んで、お受けしました。

次に、伊豫松山、松平隠岐守の使者、奥平次郎太夫と、佃又兵衛とが呼出されて、同じやうに云渡されました。これは、三百餘人の人数を引きつれて、主税等の組、十人を受取りに來てゐたのでした。それから、岡島八十右衛門等の組を預かる毛利甲斐守の使者、岡瀬孫九郎等の組を預かる水野監物の使者が、順に呼出されて、それ／＼、同じやうな云渡を受けました。

「今、別れたら、この世では、もう、逢ふことが出来ないので。」

と、四十六士には、誰にも、さういふ悲しい覺悟がありました。そして、誰の心も、シンミリとしてゐました。

内藏助は、伯耆守と、二人のお目付に向つて、「何から何まで、御懇に仰せ下さいまして、千萬、かたじけなく存じます。かへす／＼も、厚くお禮を申し上げます。」

と、ていねいに、お禮を述べました。そして、主税を傍近く招きました。

「わしは、細川越中守様のお屋敷へ参るやうになつた。この世で逢ふのも、これ限であらう。今となつて、別に申すこともない。只、かね／＼、申し置いて置いたこと……あの、覺悟だけは、忘れてはならんぞ。」

と、小聲に云つて聞かせました。

主税は、いつもの通り、氣さくに、うなづきました。そして、少しの未練な様子もなく、

「大丈夫でございます。あの事は、決して忘れは致しません……では、御機嫌よう。いづれ、あの世でお目にかゝります。」

と、いさぎよく云ひました。

「ム……」

と、内藏助は、心から満足したやうに、うなづきました。そして、ブツと立つて、玄關の方に出て行きました——他の者には、父子が、何に云つたか解りませんが、内藏助は、かねて、主税に、



「もし、公儀から、われ／＼に助命の御沙汰があつても、わしとお前だけは、切腹するのだぞ」と、云聞かせてゐました。さうして、主税は、よく、その事を承知してゐたのでした。

主税は、俛れ氣味になつて、じつと、父の後姿を見送りました。その、落ちついた、物靜な様子を見て、そこに居並んだ人等は、皆な、眼をしばた、いて、暗い心もちになりました。

内藏助は、駕籠に乗りました。他の十六人の義士も、順々に、駕籠に乗りました。そして、十七挺の駕籠は、伯耆守の役宅の門を出て、芝、白金の細川家の中屋敷（今の高輪御殿）に向ひました。細川家の定紋、九曜の星のついた大提灯が、眞ッ先に進みました。そして、駕籠一挺毎に、騎馬の侍が一人と、徒歩の侍が一人づゝ附添つて、めい／＼の供に、提灯を持たせました。そして、大勢の足輕が、その前後を護りました。

堀内平八は、内藏助のところへ、やつて来て、「何か御用がございませんか。何んなりと、御遠慮なく有仰つて下さい。お寒ければ、駕籠の戸を閉めましようか。」

と、いろ／＼、氣をつけました。

この行列が、ゾロ／＼と、白金の中屋敷についたのは、もう、眞夜中過でした。内藏助等は、討入装束のまゝで、内玄關から上がりました。そして、二間、ぶち抜いた廣間に、ヅラリと居並びました。

肥後熊本、五十萬石の太守、細川綱利は、日の暮前に、大名小路の屋敷を出て、中屋敷に來てゐました。そして、内藏助等の來るのを、今か今かと待ちかねてゐました。

で、内藏助等の座が定まるのを待つて、しづ／＼と、それへ、入つて來ました。内藏助等は、驚いて、はつと、平伏しました。

越中守綱利は、あうように、「お前たちの今度の致

方には、實に感心した。かうして、大勢の者を附けて置くのは、心苦しいが、これも、公儀へ對する「おつとめ」であれば、止むを得んと思ふてくれ。その代り、心置なく、くつろいでゐてくれ。また、何か用事があれば、遠慮なく云ふが可いぞ。」

と、親切に、いたはりました。そして、「寒い折からではあり、殊に夜更ぢや。さッそく、料理を遣はすが可い。」

と、家來に云ひつけました。

内藏助等は、何か云ふのは、反つて失禮に當りますから、たゞ、うや／＼しく頭を下げて、お禮を申上げて居りました。

挨拶が終ると、細川越中守は奥へ入りました。やがて、新しい小袖と帯とが與へられました。十七士は、それ／＼に、着換をして、それから、非常に上等のお料理で、御飯の御馳走になりました。さうして、いづれも、細川越中守のすてきな「優遇」に

感泣しました。

その頃、大石主税等十人も、やはり、一人々々獨籠に乗せられて、芝、愛宕町の松平隠岐守の上屋敷に送られました。そして、こゝでは、東長屋十軒へ、一人々々、分けて入れました。すなはち、一番小屋には、堀部安兵衛。二番小屋には、大石主税。三番小屋には、岡野金右衛門。四番小屋は、貝賀彌左衛門——さういふやうに、一人々々、入れられました。さうして、その一ツの小屋に、侍が四人、お徒士が二人、鐵砲持が二人、足輕が四人、中間が二人といふ大勢で、嚴重に警衛しました。

その時、隠岐守は、風氣をひいて寝てゐました。で、家老が代つて挨拶して、小袖を與へ、行水をつかはし、相應の御馳走で、御飯を御馳走しました。そして、あくる日、三田の中屋敷の方に移されて、五人づゝに分けて置かれました。その日、上野介の首は、泉岳寺から、吉良の屋敷に送届けられました。



狐の負け

お百姓が山へ薪なとりに行きますと、狐の穴がありました。よく見ると、丁度一疋の狐が穴の外にゐて、穴の中の狐と何か話をしてゐます。

お百姓は、面白く思つて、そつとかくれてきてゐると、こんな話も聞えます。

『おれは、巧い事を考へたよ。』

『何んな事だい。』

『おれが人間に化けて、お前馬に化けるのだ。さうして、その馬をおれが曳いて行つて、人間の腹に高く賣りつけるのだ。その後で、お前が逃げ出してくれるのだ。』

『それは面白い。やつて見よう。』

狐の話を聞いてしまつたお百姓は、「しめたい」と思ひました。そこで、翌日になるのを待ちかねて、昨日の穴のところへ行つて、『おい、約束の通り人間に化けて来たよ。お前も早く馬に化けるよ。』といひました。

すると、中から狐が出て来て、『成程、巧く人間に化けたな。それなら、どう見たつて人間に見える。よし／＼今すぐ馬に化けるよ。』といつたかと思ふと、忽ち馬に化けてしまひました。

そこでお百姓は、狐の化けた馬を曳いて、お金持の處へ行きました。

『如何です。すばらしい馬です。お買ひになりませんか。』といふとお金持は馬を眺めたり、なでたりしてゐましたが、

『なるほど、馬だ。買つて置か』



う。といつて、澤山のお金を拂つてくれました。

お百姓はお金をもちつたので、大喜びで歸つて行つてしまひました。

それられて月を閉められて了つたので出ることも出来ません。『もうぢき、仲間が来て助けてくれるだらう。さう思つて待つてゐましたが、いつまで待つても助けに來てくれません。仕方なくやつとのことで急なこゝして外へ飛び出し、大急ぎで山へ逃げて歸りました。』

逃げ歸つた狐は、さつそく友達の狐のところへ行つて、

『おい、ひどいぢやないか。おれが困つてゐるのに、なぜ助けに來てくれなかつたのだ。』と、怒めしさうにいふと、

『ひどいとはお前の事だ。折角おれが人間に化けて行つたのに、お前は何處かへ行つてゐなかつたぢやないか。』

『おや、では、おれが賣り飛ばしてお金儲けをしたのは、お前ではなかつたのか。』

おたまじやくし (推薦)

東京 林 宵 雨

おたまじやくし
まめじやくし
首つこ振れよ



おたまのしやくし

尾を振れよ
どん／＼山(やま)のてんべんは
いつもいつも眞青(まろ)だ
ほうたる (推薦)

大阪 古村 徹 三

ほうれ ふたあつ
消えまいぞ
ひかつた ひかつた
ほうたるよ
月(つき)が かげつて
ちようどい、



ちんがり ちんがり
ほうたるよ
ちかくて とほくて
たんぼみち
ながれの音(おと)は
ほうたるよ

南瓜(かぼ)買(か)ひ (推薦)

東京 大島 清正

びちよ びちよ 水落(みづお)ち
おちぐさ
お乳(ち)くれましよ
ほうたるよ
かぼちや コロコロ
コロコロ かぼちや
八百屋(や)にコロコロ
コロコロ ひるね

美^みいちゃん コロコロ
コロコロ 足^{あし}駄^だ

一^{ひと}つ 抱^かへて
コロコロ 駆^かけて



轉^まべば コロコロ
コロコロ かぼちゃ
權^{ごん}現^{げん}さん

名古屋 太田 貞夫

お山^{やま}の上^{うへ}の
權^{ごん}現^{げん}さんは
晝^{ひる}見^みりや
しきみの
花^{はな}盛^{さか}り
アレ花^{はな}盛^{さか}り
お山^{やま}の上^{うへ}の

夏^{なつ}のお月^{つき}さん

福岡 武田 幸一



權^{ごん}現^{げん}さんは
夜^よ見^みりや
お目^めが
細^{こま}い事^{こと}
アレ細^{こま}い事^{こと}

夏^{なつ}のお月^{つき}さん
おひとりで
天^{あま}の河^か原^{はら}へ
水^{みづ}あびに
水^{みづ}あびに
天^{あま}の河^か原^{はら}で
雨^{あめ}が降^ふり
お星^{ほし}さん
からかさ
かりました
かりました

山雀の行方

鳴海 要吉

岩岡 とも枝 監



爲吉君は、大地震前に、初めて東京に出た頃に、お父さんに伴われて二度ばかり、浅草の花屋敷に見に行ったことがあります。

それからもう四五年もなります。それからといふもの、どういふものか、一度も花屋敷には這入ったことがありません。

今日は日曜で、朝から日本晴れの上天気です。爲吉君は、ふと花屋敷のことが思ひ出されました。

吉君は、自分ももう高等小學一年にもなつてゐるのだから、駒込からひとりで浅草へ行くぐらゐのことは差支へなからうと考へまして、お父さんとお母さんに、そのことをおねがひしました。お父さんもお母さんも笑ひながらゆるして呉れました。そして、お小遣ひを一圓呉れました。

爲吉君は飛立つばかりに喜んで、駒込の終點から電車に乗りました。

二

どういふものか、其日はたゞひやみに花屋敷に這入つて見たくなりませんでした。地震の火事焼けてしまつてから、どんな工合に變つたらうと思はれると、何だか懐かしい夢の中へ這入つて行くやうな氣がされるのでした。

なるほど中の模様はすつかり變つてゐましたがやはり似た事ばかりが澤山ありました。獅子もなれば虎もをる。木馬もあり、ぶらんこもある。芝居も活動も、犬や山雀の藝當もある。その外、地震前にあつたやうなことは大概ありました。それでも、爲吉君には、なんだか夢の中を歩いてる氣がされました。

爲吉君は流石に少年です。まづ山雀の藝當を見ることにしました。それは一つは爲吉君に、山雀には

わすれがたい思ひ出があるからでもあります。爲吉君の家は、まだ東京に出ない時分は、青森縣の在の林檎園の中にあつた。その林檎園は、村

からは四五町離れたところで、すぐ側には、大きな溜池があつて、周囲の山はいつも水に影を寫して居り、向ひ岸の家も畫のやうに見えて大層景色のいいところでした。

爲吉君のお祖父さんは、山雀が大層好きでいつも背の高い籠に入れて、二階の櫓に吊して飼つて居りました。

或年の冬、お祖父さんは、其年にとつた林檎を澤山持つて東京に出かけました。その時お祖父さんは分家した叔父さんと一緒だつたといふことでした。けれども、爲吉君にはその叔父さんがどんな人か、はつきり覚えはありませんでした。

お祖父さんの不在中は、おもにお祖母さんとお母さんが山雀の世話をして居りました。

詳しいことは、爲吉君にわかりませんでした。林檎が東京でうまく捌けないので、お祖父さんと叔父さんとは浦鹽斯德に渡つたとかいふことで、中々

五十四
歸りませんでした。その冬は特別に雪の深い年で、林檎園の爲吉君の家は、中にも人里離れた淋しい一軒屋の心地がされました。それに、西比利亞にはいろいろ騒がしいことがあるといふ噂が新聞で傳へられるし、東京さへも初めて見た位のお祖父さん等が、旅費も十分持たず、凍みかけた林檎幾箱かを頼みの綱に、馴れない他國の宿でどんなに不自由されてるだらうと、家中の心配は大層なものでした。

寒氣のはげしいせいか、または手入れのまづかつたせいか、とにかくお祖父さんの可愛がられた一羽の山雀は、丁度その不在中にとろ／＼籠の中で凍え死んでしまひました。その時のみんなの驚ろきつたらありませんでした。何とはなしに、お祖父さん等に變つたことでもある兆では無いかといふやうな氣が、みんなの胸から胸につたはつたのでした。爲吉君も、まだ六つか七つの子供ながらにさういふ氣のされたことは、今に記憶されてゐるのでした。

お祖父さんはしかし、二月頃にやうやく歸つて來ました。みんなは胸を撫であろした筈でしたが、何だか空氣がうちしめつてゐたやうでした。爲吉くんは、お祖父さんが歸つて來ても、その割合にみんなの心配顔なのは、あの山雀が死んだためだとばかり考へられました。

三

さういふことが爲吉君に今思ひ出されて、山雀の藝當を見るのが、一層の興味を覺えるのでした。

すると、傍にすわつてゐた洋服を着て髯を生やした一人の男が、づつと爲吉君の近くへすりよつて來ました。そして言ひました。

「君は、山雀の藝當を見るのが初めてですか。」

これには爲吉君もびつくりしてしまひました。見ず知らずの男が、頭からこんなことをたづねるので、すもの。ですけれども、返辭をしない譯にも行かず、「いや、前にも見たことがあります。」

と、軽く答へました。するとまた男が、

「君はいま何か考へてゐたでせう。」と、又尋ねました。

仕方が無いから爲吉君も「はあ」と返辭をしました。

「君の心には今、赤い實のなる廣い／＼野原がうつつたでせう。緑の山に囲まれた綺麗な池が思ひ出されたでせう。」

いよ／＼もつて、爲吉君はまるで夢の國で魔物に見込まれたやうな氣がしてしまひました。自分が今心に思つたことを少しも違はずしかも、今日偶然に出て來



五十五
た此の花屋敷の山雀の藝當の前で、こんな不思議なことがまたとあらうかといふ氣がされてしまひました。

爲吉君は、眼をきよろきよろするより外、どうすることも、出來ませんでした。男の言葉はまたつゞきました。

「私はね、今さういふ赤い實のなる廣い林の中のさういふ綺麗な大きな湖の岸に住んでるのですよ。どうだ、一つ行つて見たいと思はないかね？」これを聞いた時、爲吉

君はなんだか恐くなつてしまひました。

あゝこんな魔法使ひのやうな人にだまされまい、だまされまい、と心に力んでゐますと、不思議に段段に睡氣を催してきました。何だか、その男の顔もずつと遠く見えるやうな氣がしてききました。すると、その男は急に「ね、ね、僕と一緒に往かう。僕のとまつてるところと一緒に往かう。」

と言つて爲吉君を急ぎ立てるやうに言ひました。爲吉君は、お父さんやお母さんに心配をかけてはならないからと、充分に用心してゐたのですが、どういふものか、その男の言葉には反かれない何かの約束でもあるやうな氣がして、ふら／＼と其の男に付いて立ち上つて、歩き出しました。

四

二人で花屋敷を出て、そして、仲見世の入口のところで、自動車に乗りました。そこまでは覺えて居ります。

「まあ、かけたまへ。こゝは私の宿なのだ。私はここに長く居る譯ではない。そのうち、その大きな池のそばの家へ歸つて行くのですよ。君と一緒に往て往かうか。」

男は言ひましたので、爲吉君は、それではやつぱりこの額のことでは無かつたのだと解りました。

男はまた、君のお祖父さんはどうした、とか、お祖母さんはどうした、とか、お父さん、お母さんはどうしたとか、色々家のことを訊ね、おしまひに、住ひはどこだといふことを詳しくききました。

『どうぞ僕の家へ早くかへして下さい。お父さんとお母さんが心配してゐますから。』

と、やう／＼爲吉君が、その男に願つてみました。その男は笑ひながら、

「まあ、少しも心配することは無いさ。今自動車で送つてあげるから。」

と言ひ乍ら、さま／＼な御馳走をして呉れました。

自動車から降りると、前に四角な池があつて睡蓮が咲いて居り、向ふに見えるのは、これこそ夢のやうな、子供が積木をしたやうな細かい凸凹のある、不思議な家です。二人は吸はれるやうに、その家の中に這入つて行きました。

家の中で幾曲りかしました。美々しい服装をした男や女のいろんな人にも、廊下の途中で逢ひました。積木で造つた籠のやうなものの中から、電氣の薄明りが洩れてるところもありました。

爲吉君は夜が晝か、まつたく見當がつかない氣がして來ました。

ドアを開けて室に這入ると、電氣でもつて案外に明るく、腰掛や洋卓もさらびやかで、かけてある額の洋畫は、今男が話した様な廣い野原に沼か湖水があつて、岸に家もあり、牛も遊んでるものでした。爲吉君は、すぐにさっきあゝ言つたのは、此の額の事と冗談に言つたのだな、と思ひました。

それからまた、先の夢のやうな廊下を通り、夢のやうな家の入口のところで、二人で自動車に乗り、しばらく經ちますと、自動車は駒込の肴町の處に停りました。

「こゝは、駒込の肴町ですよ。もう獨りで歸られるでせう。皆さんに宜しく言つて下さい。さやうなら。」と、その男は爲吉君を自動車から出しながら言ひました。

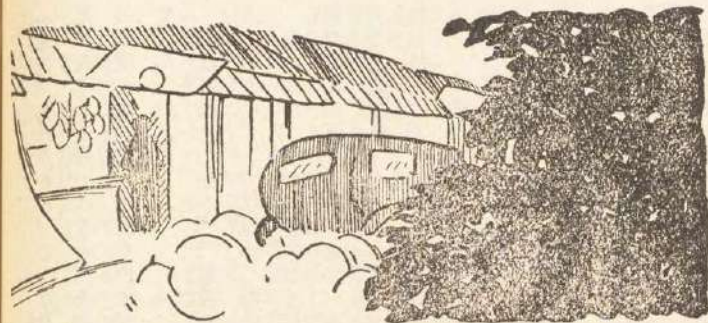
五

爲吉君は全く夢に夢見る心地して、さつき御馳走になつた菓子餘りだと言つてよこした土産の包みも、何だか龍宮様の玉手箱では無いかとも考へられました。

肴町からは電車に乘らずに一直線の道を、考へ考へ、家へ急ぎました。

もう日の暮れ時分でした。

お父さんやお母さんや、妹達も爲吉君の歸りの



遅いのを心配顔に待つてゐました。

『山雀の雛當を見てゐたらね、こんな事があつたんだよ。驚ろいちやつた。』

と、それから、爲吉くんは今日のあつた事を詳しくみんなに、話してきかせました。

初めのうちは、『それは爲ちやんは夢を見てゐたんだよ。』とか『人さらいに逢つたんだ

ね。』とか言つて、不思議にしてみんなは聞いてゐました。

だんく話が進みますと、お父さんは、ハタと手を打ちました。

『いや、それは夢でも何でも無い。その宿といふのは帝國ホテルに違ひない。爲ちやんは東京にゐて、まだ帝國ホテルも見なかつたんだね。……いや、それよりも大變なことだ。』

と、お父さんは、驚ろいたやうな、喜ばしいやうな、淋しいやうな顔をして、一寸、口をつくみました。

『大變だとは何ですか？』

と、お母さんは口をはさみました。

『自動車を仕度しなさい。早く。早く。』

と、お父さんは、譯も話さずにかうお母さんを急かさしました。

『どうしたといふのですか。』

といひながら、お母さんは自動車屋に立ちかけま



した。

『それは、先年、浦鹽で行方知れなくなつた弟なのだ。弟はその後アラスカに暮し

てゐることを聞いてゐたが、それでは歸つて來たんだ遅くなると、また今夜のうちに立つてしまふといけな

いから……』
と、お父さんは、お母さんの後について立つて行き、そのまゝ自動車で

帝國ホテルの方へ行つてしまひました。

お母さんが自動車屋から歸つて來たので、爲吉君は、その叔父さんの詳しいことをききました。

そのお母さんの話によると、お祖父さんと一緒に浦鹽に行つた時に、お祖父さんを宿屋に残して、その儘叔父さんは行方知れなくなつたのださうです。そして、お祖父さんをすゝめて林檎をわざ／＼浦鹽まで持つて行つたのは、叔父さんが、あつちの國へ渡る目論見だつたらしいといふのです。

叔父さんは中々氣の強い人だから、歸國しても家に立寄らないで、あちらへ歸つてしまふ積りであつたかも知れないとお母さんは語りました。

『今夜、お父さんと一緒に家に來て呉れ、はい、なあ。』

と爲吉君は頻りに思ひました。妹達も亦『叔父さんを早く見たいなあ。』

と言つて家の中をはしやぎ廻りました。(をはり)

『吉衛門』頓智ばなし

佐藤 猛 夫

抜いたぞ 抜いたぞ

廣い野原に、細い畦道がありま
した。
右の方から
盲が杖をつい
てやつて來ま
した。
左の方から
も盲が杖をつ
いてやつて來



ました。さうして道の真ん中ほどで、二人の盲はいやと言ふ程猛烈な鉢合せをやりました。
右の方の盲は見えぬ目をクワツとむき出し、「誰れだい、盲に突さあたるやつがあるかい」と怒鳴りますと、

「何だと手前こそ盲に突さあたりやがつて」
と左の方の盲は言ひました
「なに此の野郎、人の真似をしやがつて太い奴だッ」
「なにを此や

つ、それはこ
つちの言ふこ
とだ」
「何をッ！」
「うぬッ！」
「何をッ！」

さあ大變で
す。二人の盲
同志は自分の
杖でもつて盲
滅法叩き合ひ
を始めました。



ツ方は抜いたぞ、あぶない、さあ皆な退け退け。」
これを聞いた二人の盲は刀を抜いたものと早合點し命あつての物種と、ほうほうの態で逃げて行きました

これを横の畑で眺めてゐました吉衛門は、可笑しくて堪りませんでした。
今にも吹き出しそらになるのを、やつところまで、早速、

「ヤッ！ ヤッ！ そら抜いたぞ、抜いたぞ、片

（附記）『吉衛門』のお話は、豊後地方に傳へられてゐるお話で、その地方では『吉衛門ばなし』と呼び、この吉衛門を主人公にした様々な面白いお話があります。その数は驚くばかりに澤山ありますので、今や盛んに研究されるやうになりました。佐藤猛夫氏はその研究家であり、中で滑稽な部に属するお話を、本誌で紹介させていただく事になりました。（記者）



大發明家エディン

廣瀬龍太郎

平澤文吉畫

六二

(前編までのあらすじ) 大發明家のエディンは、小さい時、お家や貧乏だったで、ろく／＼學校へも行けませんでした。そこで、新聞配達や、電信の技手などをして、傍ら化學や物理などの勉強をしてゐました。ある時、ニューヨークの『金價通信所』の前を通りかゝりますと大勢人集りがして、ワイ／＼騒いでゐます。エディンは、傍にゐたお爺さんに何事か起きたのかと訊いてみると、この電信機に故障があつて、どうしても通じないものだから、人々が怒つて騒いでゐるのだ、と云ふ事でした。

一、幸運のはじまり

『電信機が壊れたんなら、誰れか直してあげればいゝのに……』と、エディンが云ひました。するとお爺さんは、

『え、もう先刻から六人の技師が来てやつてゐるんですよ。だが、一體どこが悪いんだか、それさへ分らないんです。』

なるほど、電信機の傍には、五六人の立派な装をした人々が集まつて、何か切りと喋りあつてゐました。

エディンは、人々を押し分けて、電信機の傍へ行きました。そして所長のローさんに向つて、

『私なら多分直せると思ひますから、やらせて見て呉れませんか。』と云ひました。

ローさんは、驚いたやうな顔をして、この汚れた少年の姿を見ました。六人の技師も、『この青二才めが何を云ふか。』と云ふやうな顔をしてゐました。

『君はなにかい、これまで電信機をいぢつた事があるのかい。』と、ローさんは訊きました。

『え、何度もあります。鐵道の電信係りをやつた事もあるんです。』

そこで、ローさんは、兎も角も、やらせて見る事になりました。

『さア、一寸そこを御免なさい。』と、エディンは、六人の技師達に向つて云ひました。技師達は、苦笑しながら、場所をあげました。

エディンは、いかにも物馴れた手附きで、機械をばら／＼に解しました。と、直ぐに悪い所が見つかりました。一本の彈簧が、ゆるんでゐたのです。エディンは、そのスプリングを取りかへ、更に各部分を丁寧に調べて油を差しました。

エディンは、機械をすつかり元通り組み立て、相手方の局を呼び出しました。

直ぐに返事がありました。電信機は元通り『カタ／＼カタ／＼』と氣持のいい音をたて、動きはじめたのです。

六人の技師達は、互ひに顔を見合はせました。そこへ集まつた大勢の商人達も、皆んな口々にこの少年を褒めそやしました。中でもローさんの喜びは非常なものでした。

『君、一寸此方へ来てくれたまへ。』

ローさんは、かう云つて、エディンを奥の

所長室へ連れて行きました。

十五分の後、エディンにはこゝしなげら出て來ました。エディンは、この時から、『ロー金價通信所』の電信係りとなつて、月收三百圓の身分となつたのです。

二、電信機の改良

エディンは、この通信所に勤めてゐる内に、エディン式の電信機を發明しました。これは今までのよりも一層優れたものでしたから、約四萬圓の價で、ある會社へ賣る事が出來ました。

エディンは、お金が手に入ると、今まで勤めを已めて、ニューヨークと云ふ所に工場兼實驗所を建て、思ひのまゝに電信機の研究をしました。間もなくエディンは『二重電信線』で『四重電信』を發明しました。

『四重電信』と云ふのは、同じ電線を使つて、反對の方向から同時に二つの通信を送る事の出来るものです。エディンのこの發明に

六三

よつて、どれだけ無駄な手数や費用を省くことが出来たか知れません。

『青年』發明家エダソン^{エダソン}の名前は、俄かにアメリカ中に響き渡りました。

間もなくエダソンは、メンロパークと云ふ所に大きな實驗所を建て、ひたすら發明に従事する事となりました。エダソンの有名な「白熱電燈」その他の大發明は、主にこの實驗所で成し遂げられました。

永い間の苦しい生活は、今、立派に實を結ぶ時が来たのです。皆さんは、蟬の幼蟲を知つていらつしやいますか。夏の始めの頃、鉛色の殻を被つた蟬の幼蟲が、ゴソ／＼と地面の上を匍つてゐる所を御覧になつた事があるでせう。ちよつと、蓋を大きくしたやうな格好をしてゐます。あの幼蟲は、地面の中に約四十年の間、潜つてゐるのださうです。併し、幼蟲は、この永い／＼の間、決して眠つてゐるではありません。大きくなつてから羽根を生やして、空中を自由自在に飛び廻る準備をしてゐるのです。

ですから、この幼蟲が、一度地面の上に出たとなると、タツタ一晚の内に、立派な羽根を生やして、空へ飛んで行きます。私は小さい時、蟬の幼蟲を描いて来て、箱の中に入れて置いた事がありました。その時は、あの醜い鉛色の蟲でしたのに、翌朝、箱をあけて見て驚きました。蟬は、タツタ一晚の内に、翡翠のやうな美しい羽根を着けて、ちよつと私の顔を見てゐたのですもの！

その翡翠のやうな羽根の色も、見る／＼内に色が變つて来て、茶色をした、丈夫さうな羽根になりました。そして、その日の夕方には、もう羽叩きをして、遠い松の木の方へと飛んで行つたのです。

エダソンの生涯も、これと同じやうなものでした。エダソンも、蟬の幼蟲と同じやうに、永い間、地面の中に潜つてゐました。そして、一度地上に出たとなると、自分の持つてゐるあらゆる「い／＼所」を伸ばして、驚くやうな大きな仕事をしたのでした。

電燈、蓄音機、電動機、發電機、蓄電池、

活動寫眞、電氣送電法、氣球、次から次へと不思議な發明をして、世界の人人を驚かせました。エダソンが、あまり不思議な事ばかり發明するので、のちに、

『メンロパークの魔術師』と云ふ綽名を附けられたさうです。

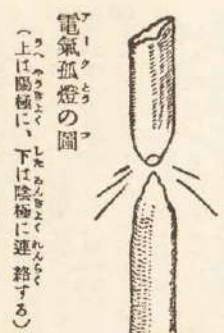
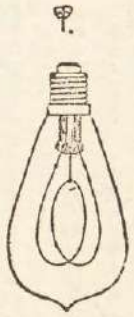
三、全世界を明るくした電燈の發明

まづ第一に有名なのは白熱電燈の發明です。皆様の家で、現在使つてゐられるタングステン電燈の前に、炭素球と云ふのがありました。

この炭素球は、エダソンが發明したものです。エダソンが、一つ物を發明するのには、どんなに苦心するかと云ふ事は、この炭素球のお話だけでもお分りになること、思ひます。

エダソンが、電燈を發明したのは、一八七八年の事でありました。その時まで、この世界には電燈と云ふ物はありませんでした。ただ僅かに、ランプとか、瓦斯燈とかの如く、

甲 炭の線を使ったもの
乙 タングステン線を使ったもの



電氣弧燈の圖
(上は陽極に、下は陰極に連絡する)

夜の闇を照してゐたのです。もつとも、電燈を利用したもので「白熱電燈」と云ふものがありません。これは、圓で御覽の通り、二つの炭の棒をくっつけたもので、これに強い電流を通すると、炭のくっつき合つた所がひどく熱せらるゝ爲めに、明るい光りを發するのです。これは、今、軍艦の探照燈などに使はれてゐます。

併し、この弧光燈は、あまりに光りが強過ぎるためと、費用が多くなるので、一般の家庭に用ひると云ふわけには行きません。そこでエダソンは、なんとかしてもツと簡單などんな家にも取りつけられるやうな電燈を發明したいと思ひ立ちました。

エダソンは、先づ、ガラスの球の中を眞空にして、その中に針金を入れ、電流を通じて見たらよからうと思ひました。併し、困つたのは、この球の中へ入れる針金のことです。電流を通すると、大抵のものは焼き切れてしまふのです。

エダソンは最初、白金線を使ひました。併し

し直ぐに熱のために熔けてしまひました。こんどは、イリウウムと白金の合金を使つて見ました。これも同じやうに熔けてしまひました。エダソンは、次いで、硅素、硼素など、いろいろな物を試みて見ました。併し、皆んな不成功に終つてしまつたのです。

はじめエダソンは、炭素だけを使つて見ませんでした。炭素などは、直ぐに酸化してしまふだらうと思つてゐたのです。併し、他の物がどうも思ひやうに行かないので、たうとう最後に、炭素を使つて見る事になりました。

エダソンは、非常な苦心の結果、やつとの事で、木綿の糸を炭化する事が出来ました。それは、一八七八年の、十月二十一日の事であります。

『こんどは、何んとかして行くつてくれるといふが……』

エダソンは、引續つた、若い顔をしてゐました。木綿の糸を炭化したものを、球の中へ入れ、電流を通じると、バツと明るく照りました。それは、今までの何よりも、サツと

光りの強いものでありました。

エザソンは、机に両手を突いて、眼を輝やかしながら、ぢいッと電球を見つめてゐました。またいつものやうに、五六分経つと焼き切れてしまふのではないかと、エザソンは気が配っていました。

私共は、いつもながら、エザソンの精力の強さに驚かされます。エザソンは、ぢいッとして電球を見つめたまま、四十五時間のあひだ一眠りもしなかつたのです。その間、食事と云つても、ホンの牛乳を一二杯飲んだだけでした。助手も心配して、

『ちと、お寝みになつては如何ですか。私共代つて番をしますから……』

と云つても、エザソンは、
『あゝいゝゝ。今直ぐ寝るから……』
と云ふばかりで、矢張り一歩も机の傍を離れませんでした。

たうとう最後に、球の中の針金は、熱の爲めに崩れてしまひました。

自分が進んでゐる道が正しいと云ふ事を知りました。球の中へ入れる針金は、炭素が最もいゝと云ふ事を知りました。

『では、何を炭化したらよいのか？』
これが次に起つた問題でした。

エザソンは、手當り次第、あらゆる物を炭化して見ました。そして最後に、ふと思ひついで、日本製の扇の骨を炭化して見ました。竹、最もいい成績を得ることが出来ました。竹には、御承知の通り、強い繊維があります。この繊維を炭化して、針金を造らへるのでした。

『では、どんな竹の種類が一番いゝのか？』
これが、第三に起つた問題でした。

エザソンは、新しく竹に就いての研究を始めました。そして、一日に竹と云つても、それには、一萬二千から八種の異なるものを知りました。エザソンは、その内、約六千種の竹に就いて、實驗しました。

このやうな苦心をして、エザソンはやつとの手で、最も適當な竹を見出すことが出来た。

した。この竹から取つた繊維は、いつまで経つても燃き切れず、製法も簡単で、しかも光度の強いものでありました。

これが『炭素球』と云はれてゐるものです。エザソンは、この發明のために、十萬兩を費やしました。併し、エザソンはかうして銀々の溜み通し、全世界を明るくする事が出来たのです。

今、私共が使つてゐる『タンクスタン球』と云ふ電燈は、炭素の代りに、タンクスタンと云ふ金属の細い線を使つたものです。『瓦斯入りタンクスタン』と云ふものもありますが、あれは、球の中へ空素を入れたものです。

最後に、實驗室に於けるエザソンの生活の有様をお話して、この稿を終りたいと思ひます。かう云ふ日常の小さな出来事の中に却つてエザソンの『人となり』が窺はれるやうに思ひますから……。

四、ちよツと失禮

エザソンと云ふ人は、一寸想像して見ると、何時でも机の前へ坐りこんで、肩の間に八の字をよせながら、何かぢいッとおへこんでゐる人のやうな氣がします。『大發明家エザソン』とでも云へば、生れてから一度も笑つた事のないやうな、六ヶしい顔をした人のやうな氣がします。

併し、ほんとうは決してさうではなく、エザソンはその少年時代と同じやうに、何時も明るい、快活な心を持つてゐました。ある新聞記者は、エザソンの顔を見て、『氏の眉目は、氣力と温情に満ちてゐる』と、云つたさうです。

エザソンは、何か一つの仕事に熱中したずと、もう我を忘れてしまつて、誰れが實驗室に進入つて來ようが、ちつとも氣が附きません。奥さんから『お食事が出来ました……』と云はれて、『うん、うん』と返事するばかりで、何時までたつても席を離れません。し

まひには、奥さんも腹がツツになつてしまつて、仕事最中は、あんまりヤイ／＼云はない事にしました。

エザソンは、こんな仕事に對して熱心でなければ、又、人とお話したりする事が大好きで、誰れか訪れてくると、仕事に差支へない限り、喜んで會ひました。

エザソンは、發明の事ばかりではなく、世の中の日常の出来事に就いても、彼自身の見方を持つてゐて、元氣に溢れた、愉快な口調で話しました。ところが、話最中に、エザソンは、ふと、自分が今やりかけの發明の事を思ひ浮べる事があります。するとエザソンは、忽ちその發明の方へ氣を取られてしまつて、お客さんがそこに居るのも忘れてしまつたやうに、

『ちよツと失禮……』と云つたまま、實驗室の方へ歸つて行きます。そして、二時間経つても三時間経つても姿を見えないのですから、流石のお客さんも呆れかへつてしまふ事がありました。

五、追ひかへされた奥さん

ある時、こんな事がありました。

エザソンの少年時代のお友達で、ジョンと云ふ男がありました。ジョンは、田舎でお百姓をしてゐましたが、この頃人の噂を聞くと、自分の友達のエザソンが、大へんな出世をして、アメリカばかりでなく、世界で有名な男になつたと云ふ事です。さア、ジョンは、一度會つてみたくなりました。さういふ行つたら、エザソンもどんなにか喜ぶだらうと思ひました。

或る日の事、ジョンは、自分の島に出来た果物や野菜を持つて、はる／＼とエザソンのゐる町へやつて來ました。通りがかりのお内儀さんに、『發明家のエザソンの家は何處でせうか。』と訊けると、お内儀さんは直ぐに教へてくれました。

來て見ると、大それた立派な門が建つてゐます。木立に包まれた住居の横には、大きな工場があつて、何本もの煙突から黒い煙があ

『なんだと、もう一通云つてみる！ 俺を誰れだと思つてんだ。察するところ貴様は、俺の来た事をエザソンに取りつけないんだな。エザソンは、俺の名前さへ聞けば、一週に飛んでくるんだ。こお、門番。着物の汚いと思つて馬鹿にするな！ さア、直ぐ取り次げ。取り次がないと承知しないぞ！』と、真赤になつて咆吼りつけました。

すると、門番は、暫くの間黙つてジョンの顔を見詰めてゐましたが、やがて静かに云ひました。

『まあさう怒んなさんな、みつともない。お前さんは、今此處にゐた女の人が誰れだか知つてゐるか？』

『知るもんか、あんな奴。』

『あれは、エザソンの奥さんなんだよ。奥さんは、今朝九時頃此處へいらして、旦那さんの御用の済むのを待つていらしたんだ。さうさ。二時間もお待ちになつたらうかれ。だが、とうとう運へずにお歸りになつてしまつた。お前さんは、内の日那さんに取つて、ど

んなに大事な人か、俺は知らない。だが、まさか、奥さんほど大事な人ではあるまい。この門番の言葉には、流石のジョンも返す言葉がありませんでした。河豚が怒つたやうに頬を膨らめて、青くなつたり、赤くなつたりしてゐました。

エザソンはこのやうに、毎朝自分の家から實驗所へ通つてゐるのです。そして、やりかけの仕事が済むまでは、たとひ奥さんであらうが、一時間でも二時間でも、待たせられてゐたのです。エザソンの仕事に對する熱心さは、萬事がこの通りでした。

エザソンは、常々人に向つて、『人間は、氣分を愉快に持つて仕事をしたい。決して疲れるものではない。これと反對に、いや／＼ながら仕事をすると、身體を疲らせるものはない。仕事をすると愉快な氣持でやり給へ。若し、どうしても愉快になれないのなら、そんな仕事は已めてしまひたまへ。』と、話してゐるさうです。

エザソンの生活を見る時、私達はよくこの道理を呑み込む事が出来ます。エザソンは、四十五時間もぶつづけに仕事をして、疲れた顔も見せませんでした。エザソンにとつては、仕事そのものが、自分の趣味であり、娯樂であり、休養であつたのです。

『自分が夢中になつてやれる仕事』これは、誰れにもあると云ふわけには行きません。

又此に面白いお話もありますが、次の機会に譲ります。

(をはり)

山門の仁王



西川 喜平
水島福保布畫

村で一番古いのは、觀音寺の仁王さま、今年九十になるお婆さんのちいさい時にその又前のお婆さんから、『大昔からある、觀音寺の仁王さまが』

と、毎晩お話をきかせてもらつたのでも、この仁王さまは、少くとも五六百年はたつてゐられることと思はれます。

この間東京から、エライ學者や、立派な役人が大勢見に来て、この仁王さまが日本に二つとない珍らしいもので、國寶になるとかの話があつたと云

ふので、

『そんな、エライ仁王さまであつたのか。』

と、この寺の和尚さんを始め、村中の人は驚きました。

それから、急に仁王さまのお住居になつてゐる、山門を綺麗に掃除をして線香を上げるやら、花を供へるやら、村中總出で大切に仕だしました。それでも、これまで子供の遊び場所になつてゐた山門、いたづらツ子のそさうで仁王さまにキズでもつけては大變と、番人をつけることになりました。

仁王さまの番人には誰がよからうと村中で相談をして、しちうノラクラ遊んでゐる、五郎作がよからうと極めました。

五郎作と云ふのは、村中での意者でそれで悠揚りのウス馬鹿と評判の男で

した。五郎作は仁王さまの番人を云ひつけられてから、毎日仁王さまの見張り番に出かけました。

ところが仁王さまの評判が、方々へひろまつてから、毎日遠方から、見物がてらの参詣人が集つてくるので、この田舎の古寺も、大層賑やかになりました。それを見た、この寺の和尚さんは、村の世話人と相談をして、大きな賽銭箱を、仁王さまの前へドツカリと据ゑました。

するとその日から、参詣人も見物人も、皆んな賽銭箱へバラ／＼と錢を投げ入れました。これを見た五郎作は、『ア、仁王さまはエライもんだな、賽銭箱へ皆んな錢を投げ込んで行くが、さつきの人は五十錢玉を投げていつたもうヨツボドたまつたらうな』と云つてゐる所へ來たのは、和尚さんと世話

人でした。和尚さんは五郎作を見て、『御苦勞／＼』と云ひながら、世話人に賽銭箱の錠を開けさせ、引出しを抜いて、持つて



來た麻の袋へ、

ザラ／＼と錢を入れました。

『アツ、エラク入つてゐた、一日でこれでは一年もたつたら本堂の再建が出

來ますよ。』と世話人が云ひますと、和尚さんは、ニコ／＼とうれしさうな顔をしなから、

『南無阿彌陀佛／＼／＼』と小聲で唱へました。

和尚さんと世話人が、重さうに袋を



持つて行く、後影を見送りながら、

『ナンダつまらない、御苦勞／＼』と云ふから、お賽銭の中からいくらかくれるのかと思つたら、なんのこつた……一體あの錢をどうするのだらう、ブラ／＼遊んでゐる和尚さんや世話人にや

つてしまふのはつまらない、毎日掃除や、いろ／＼のお世話をする、己にくれるのがあたりまへだ、ヨシヨシこれからあの賽銭の中から、少しづつ先へもらはう、』と勝手なことを思ひつきました。

あくる日になると、前の日にも増した参詣人や見物人で、澤山に賽銭が入りました。

五郎作は、日暮れになつて、和尚さんや、世話人の來ない間にと、参詣人の絶へたのを見て、ソツト賽銭箱の上から手を入れましたが、中途まで手が入つても底まではとどきません。これではいけないと、ガチ／＼錠を動かしましたが、錠がなくては何きません。五郎作は、感心した顔で

『ナルホド賽銭箱といふ物は、よく出來てゐるものだ、これでは少しづつ

かみ出すことは出来ない、いつそ箱ぐるみ持つて行つてやらうか、和尚さんの驚く顔はどんなだらう。』と、馬鹿だけに大へんなことを考へ出しました。

五郎作は四邊を見廻しながら、賽銭箱へ兩手をかけて、持ち上げやうとしましたが、中々動きませんので、手拭で鉢巻をし、シャツ一枚になつて、

『ウントコリヤ／＼』とかけ聲をして動かさうとしてゐる所へ、後から

『五郎作ツ、なにをしてゐる、』と、怒鳴られて、びつくりした五郎作は、後を見たと和尚さんなので、

『アツ和尚さん、エヘ、／＼、』と、鉢巻の手拭を取り、汗をふきました。

『なんて馬鹿なことをしてゐるのだ、賽銭箱をどうするのだ。』

『エヘ、／＼、これはそのなんで、和尚さんが、昨日袋を重さうにお持ち

になつたので、今日は賽銭箱をおとどけしやうと思つたので。と、五郎作が云ひますと、和尚さんは笑ひながら、『馬鹿なことをするな、仁王さまが笑つてゐらつしやる。』

五郎作は仁王さまの顔を見ましたが『ナニちつとも笑つてゐません。』

『お前の目にはわからないが、わしが見ると、笑つてゐるか、怒つてゐらつしやるか、ちやんとわかる。』と、和尚さんは直面目な顔になりました。

『へーこんな木でこしらへた仁王さまが。』と、五郎作は不思議さうに云つたので、和尚さんは、

『そんなことを云ふと罰があたるぞ、この仁王さまの、不思議にあつたかの御靈現は、昔この村から相撲取が出たその男がこの仁王さまへ願つて、大力をさづかり、それから名を二王山とつ

けて、江戸へ出て大關になつたと云ふことだ。』

『ア、そんな話を聞きました。』

『それだから、仁王さまへ一心をこめて願へば、なんでもきいて下さる。』と云ひながら、和尚さんは昨日の通り、袋へ賽銭を入れて行きました。

アトにボンヤリと立つてゐた五郎作は、

『今の和尚さんの話をきくと、エライ仁王さまだ、ヨシ／＼己も一心にお願ひをして、力をさづかり、この賽銭箱をかつぎ出してやらう。』と、仁王さまの前へお辭儀をして、

『どうぞ仁王さま、私にお力をおさづけ下さい、一生懸命にお願ひをいたします、願ひをおき／＼下されば、お禮にはなんでも好きな物を持つて参ります。お酒でもお肴でもさし上げます、

仁王さま／＼。』と、夢中になつてお願ひをしました。

それから五郎作は、毎日／＼、仁王さまの見張りをしては、和尚さんの賽銭箱を開けて、ザラ／＼と袋へ入れて行くのを、美しうにながめながら夜になると、仁王さまへお力をおさづけ下さいとお願ひをして、今に和尚さんを驚かしてやらうと楽しみに思つてゐました。

すると七日目になつて、和尚さんの賽銭を持つて行くのを待ちかねて、仁王さまへお願ひをして、家へ歸りました。

五郎作は家へ歸つてから『今に仁王さまから、お力をさづかつて、賽銭箱をかつぎ出してやらう。さうしたら、和尚さんはさぞ驚くだらうな、面白い／＼。』と、喜びながら床へ

入つて眠つてしまひました。

すると眠つてゐる枕元で、

『五郎作／＼、力をさづけてやるぞ』と太い聲で呼ばれたので飛び起きて

見ると、誰もゐないので、

『ア、今のは夢か……しかし今のお聲はたしかに仁王さまに違ひない、有がたい／＼。』と家を飛び出して、仁王さまの山門へ駆けつけました。

五郎作は息をきりながら

『仁王さま、只今はわざ／＼力をさづけて下さるとのお知らせ、有がたうございます。』と、ヒョコ／＼お辭儀をして、やがて兩腕へウント力をこめて、賽銭箱を抱へるやうに持ち上げると、不思議にも膝まで上つたので、

『有がたい／＼、仁王さま／＼。』と云ひながら、胸から上へと、だん／＼とゆすり上げ、やうやく肩へ乗せました

『もうこつちの物だぞ、和尚さんだらうが、誰だらうが、コツチには仁王さまがついてゐるぞ。』と威張つて、歩き

出しましたが、コレはまた不思議、腰はフラ／＼として、力が入らず、足はヒョロ／＼して、膝が折れさうなので

『コレは情ない、お力をさづかつたのは有がたいが、腕と肩だけではなんにもならない、仁王さま／＼、腰と足へ

もお力をおさづけ下さい、ア、痛い痛い。』と、五郎作は泣き出しさうになると、賽銭箱にかけた手が、ツルリとむしんと落ちました。

五郎作も投げ出されたやうに、ゴロ／＼と転びましたが、もう起き上る力も抜けて、

『ア、／＼なんのことだ、仁王さまも腰と足へお力を入れて下さつてもよさ

さうなものだ、まてよ、……なる程仁王さまも無理もないな、お腕は毎日あの通り力こぶを入れておいでになるが、足の方は永年お立ちになつたきりで、

一と足もお歩きにならないから、お力が抜けたのかも知れない。』と云ひながら、ふと見ると、賽銭箱の錠がこわれたのか、下の引出しが抜け出しているのだ。

『アッ有がたい、ヤッバリ仁王さまのお恵みで、錠をあけて下さつた、有がたい／＼。』と、賽銭箱の引出しの中をのぞいて見るなり、ビックリして、また尻持ちをつきました。

やがて五郎作は、ガツカリした顔で『ア、骨折り損のくたびれまうけど、中のお賽銭は、さつき和尚さんが、袋へ入れて持つて行つたのだつて。』

栗鼠の仔

八重樫草笛 (東京)

栗鼠の仔ちよろちよろ

可愛のね

あれあれお家へ

逃げてくよ

小栗鼠のお家は

木の上ね

枝に胡桃がなつてるよ

栗鼠の仔おめしが

くりくりね

泣く子

兼松 竹夫 (大阪)

泣く子をあやして

歸つてく

子守がひとり

ねんねした

細路

笠原 枡火 (東京)

提灯草なら

提灯お付けな

こうこの細路

草の路

支那の人形

大塚 一仁 (大分)

ほろり こかせば

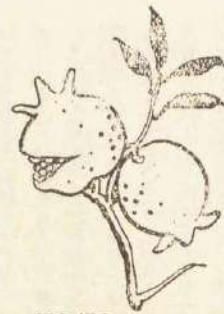
泣くやうな

支那の人形

木の人形

雨の上りの

おえん側



童謡

野口雨情選

田圃の月

吉川 行雄 (山梨)

ほろい ほろい

田圃の月は

案山子のおせなに

田圃道 田圃道

泣く子はどこの子

鬼の子か

お山のお山の

鬼の子か 鬼の子か

泣く子をあやして

さびしさう

子守がひとり

歸つてく 歸つてく

哇路

幹 葉津子 (神奈川)

哇路 ほッそり

細い路

露にぬれぬれ

哇の草

足にこぼれて

夕顔のつる

山本 静子 (香川)

つるはどこまで

のびるだらう

真竹にからむ夕がほの

御脊戸のくいちやくも

青い南瓜ももう熟れた

御屋根に遊ぶ雀の子

つるはそこ迄行くか知ら



田圃の月

小雨にみんなぬれた晩
白い花でもひらくだらう

雨の降る夜

中村 武男 (東京)

雨の降る夜に
ぼつちりこ
灯がついてる
ぼんやりこ
坊やもぬむいな
ぼんやりこ
お乳をのみく
ねんねしな

雨上り

村山俊太郎 (山形)

燕は燕は

はりがねで

びしよびしよ

着物をほしてゐる

でで虫でで虫

葉のかげで

こん／＼小川を
見てゐます
麦の穂麦の穂
青い空
すく／＼背伸び
してゐます
子供は子供は
ジャンケンボン
かけ／＼鬼ごと
してゐます

山の雀

佐藤 喬平 (不明)

白くかはいた
さ／＼の畑で
山の雀は
砂ぼこさ

さ／＼の影で
砂ぼこさ
雀三匹
親子でさ
親子の雀は
砂ぼこさ
さ／＼の影で
砂ぼこさ

馬の鈴

西岡 水朗 (長崎)

あの音 あの鈴
ちり ちり しやん
日暮れの萱路
鈴がなる
あの山 あの雲
あかね空

お馬がのぼつて
くるのでせう
あの路曲つて
ちり ちり しやん
かやかり時の
鈴がなる

コスモス

東 信次郎 (千葉)

コスモス
さいたな
さいたな
さいたな

野原

高橋 謙三 (青森)

ばつたを追へば
子供が追へば

ばつたと子供で
日が暮れる
す／＼を刈れば
大人が刈れば
す／＼と大人で
日が暮れる

夕方

竹里 土雄 (埼玉)

かろ／＼なくのは
田の蛙
子供が呼んでる
手をあげて
赤いは夕やけ
川染めて
こだまも呼んでる
遠くから

麦の中から
出て来たは
父さだ兄さだ
ほれ笑うた

烏瓜

大島 秀夫 (愛知)

烏のてうちん
烏瓜
霜夜にいたちが
灯をつける

あんぶして
いたちが
こちや／＼
せんたくしてる

大雨やんだ

森 ぼたる (愛知)

大雨やんだ
おもてで遊べ
おもては川だ
はだして遊べ
かみなり
やんだ
わんわも
ぬれろ
日ぐれの風だ
びつちや／＼はぬろ

どこの子

西浦 孝一 (京都)

泣く子



徳利さげて
どこの子だ
尻切ざうりで
どこの子だ
さむそに／＼
どこの子だ

桃畑

原田小太郎 (神奈川)

桃の畑の
赤い桃
私がいで行きました
白い袋も
涼風と
一所に飛んで
行きました

或る日の池

岩井信實

岩岡とも枝 監



あや子の手には、もう、なんにも残つてをりません。

あや子は、さびしくなつて終ひました。

お池の鯉、真鯉の、大きいあぐち、小さいあぐちが、橋のらんくわんから、半身をのり出してゐるあや子の、お手手からは、今度は、どんな變つたあや子の、お手が落ちてくるかなあと、待つてゐます。ばく、ばく。

あの雲までは、随分遠いことだらうなあ。雲にのつて、天にのぼつたといふ話を思ひ出しをした。

鯉は水の面に、あくちから上を出して、ゆつくり、ばく、してをります。人間なみに空氣を吸つてゐるのせうか。

お池をとりまいてゐる、青葉の、すが／＼しい匂が、こゝろもちよく流れて來ます。うつとり、夢みるこゝろに、ひきずつてゆきます。

ほがらかな、天氣であります。

あい、ほんとうに、いい心持だなあ。

お空つて、まあ、なんといふ廣いところだらう。

この雲はいつたい、どこまで飛んで行くのだらう。

どつちをみても、めにうつるものは、たゞ、藍、

ひとりの世界です。

なんの變化もありません。

たゞ、藍、ひとりの世界を、流れてあるくので

なんといふ可愛らしい、鯉さんたちでせう。體こそ、大きいのですが、あや子の姿をみて、ねつしんに待つてゐるやうです。

うよ、うよ、ばち、ばち、はねまわります。

晴れた、くつきり晴れたお空には、でも、白い大鳥が、翼をひろげて、飛んでゐるやうに、夏の雲はしづかに、しづかに動いてをります。

すから、ちつとも、面白いこともなければ、愉快なこともありません。鯉はこの、變りのないのに、だんだん、あきて來ました。

お空つて變なところだなあ。

疲れて來ました。

子供のことを思ひ出してゐました。あ、今度は、

どんなに、私を探し廻つてゐることだらう。突然、

ほんとうに突然、ひなくなつたので、どんなに心配

してゐることか、きつと、誰かに、とられたのかも

知れない、とてもあきらめてゐるかも知れない。

さうおもふと、急に、たまたまなくなりました。子

供たちの顔が見えます。子供たちが、元氣よく遊

まわつたり、岩の上を飛び越えたりしてゐる姿が、

はつきり見えます。

それと一緒に、長い年月、供に暮して來た友達のこと、あの静かな、のび／＼したお池の岩や、あぜ路、青葉、若葉の匂が、ほの／＼するお池いつも、

いろ／＼の御馳走を、たれか彼れか呉れる、たのしい自分のお池の様子が、頭のすみつこから、擴がつてきて、頭いっぱいになり、はては、ぼんやり消えて、また別の、思ひに變つてゆくのでした。

こんなことでは仕様がな。

どこまで行つたら、お空の岸があるのだらう。

ちつと、がまんをしてゐろ、今に、きつと、うつ

くしい、お空の岸につくに違ひない。

自分のこゝろをひきしめてみました。けれど、直

ぐあとから、もうだめだ。とてもたもたらない。とい

ふこゝろが湧いて來ます。

雲は流れます。

突然、すばしくて、早いものが、落ちて來て、おちから上を、水の上に出して、ぱく、ぱく、やつてゐる鯉の、はなつさきへ、コッソンとあたりました。

あゝ、びつくりした。

白い大鳥が、はねを擴げたやうな雲にのつて、お空の果てから、果てへ飛行してゐたのだとばかり思つたのは、夏の白雲が、お池に姿を落して、静かにはしつてゐたのでした。

自分にかへつた鯉は、今あちて來たものは、なんだか、あいしさうな匂ひがしてゐたので、それについて、底の方へと沈んで行きました。

あや子のポケットには、鯉にやるものは、なんにもありません。

あや子は、小走りに行つて、草花を三つ四つ摘んで來て、池の面に投げました。

鯉たちは、どんなおいしいものだらう。前にたべたものよりも、きつとおいしいものに相違ない、だつて、今までのものよりか、美しい色だつたし、いい匂ひが、ぶんと鼻をついたものですから、われさきに、ひち／＼はねて、カブツと、ひとくちに、口

や。

ふう、とはき出します。すると、

そこは、すこし水が濁をまいてか

ら、花は水面に、ふわりと浮んで

きます。

あや子は、なんだか濟まない事

をしたやうに思ひました。

鯉を馬鹿にして、からかつて遊

んでゐるのだ、とも思ひました。

鯉たちは、おこつてゐるのぢや

あるまいか。

あや子は、お池をのぞくのも、

はづかしい、やうな氣になりました。

た。

はあ、あの子だな。

可愛らしい顔をして、ゐるくせ

に、たべられもしない草の花なん



に含んで、
底の方へ、
深く沈んで
行きます。
多分、一
人しづかに
おいしいと
ころを、味
はうつもり
で、もあり
ませう。け
れど、いつ
こう、あい
しくはあり
ません。
なんだ、
つまらない

か、投げ込んで、あんな子は、いい子になれないんだ。

いまだ、ひどい目に合ふんだらう。
とでも、言つてゐるやうに見えます。鯉の言葉が、はつきり、あや子の耳に聞える様な気がしました。

あゝ、あつた、あつた。

たつたひとつ、残つてゐた、ポケットの角のキャメル。

早速、紙をむいて、

さあ、ごめん、こんどは食べられるのだよ。

と、こゝろの中で、つぶやきながら、鯉の澤山むれ遊んでゐる中へ、手のひらから、かるく、ほりました。けれど、キャメルはパンや駄のやうには、ふわりと水の面に浮んで呉れません。

流れ星のやうに、飛んで行つて、大きい鯉のお顔にあたつて、直ぐ、水の底ふかく沈んでゆきました。

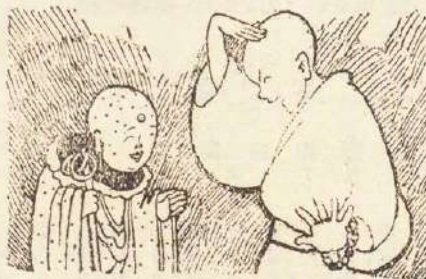


和尙さんと

鼻かけ地藏

山寺に和尙さんがおりました。和尙さんはある晩お酒に酔つて、佛様に、お経を上げること忘れて寝てしまいました。夜中にふと目を覚ました和尙さんはお経を上げずに寝てしまった事を思ひ出して、あはて、佛様の前へ行きました。しかし、あんまりあはてたものですから、お酒くさい口をそぐことも、けさなけることも忘れて、その儘お経を讀み出しました。和尙さんか漸くお経を讀み終つて、さて立上らうとすると、お堂の外で大きな音がしました。和尙

さんは驚いて、『誰だ！』と、改鳴りますと、『私は遠端の鼻かけ地藏です。』としやがれた聲が聞えました。和尙さんは不思議に思つて外へ出て見ると、



といふと、お地藏さんは、ふかふかの音を出して、『それはよく知つてゐます。です。』と、私に置きに来たくとも来られませんでした。と、いひました。『それは又どういふわけですか。』と、和尙さんが尋ねると、

八四
青葉にかこまれた、すが／＼しいお池の中の島には、辨財天を祭つてあります。お鳥居の影が小波にさや／＼してをります。
そこには、あや子と同じ年ぐらゐの、女の子が、お母さんと来て、お菓子を投げては、さやつ、さやつと言つて、手をたいてをります。
あれだけ、う／＼、あや子の前に遊んでゐた鯉は、もういつびきもをりません。みんな勢よく、すう／＼、島の方へ行くのです。
どうも仕方のないことながら、廣い、廣い野に、ひとりぼつちり、おいてさぼりにされたやうに、さびしくなつて、まぶたが熱くなつて來たのに気がつきました。
お空は、ほがらかに晴れて、白い雲が、ゆう／＼と飛んでゐるのを見ては、まぶたの熱さもすぐ、消へて終ひました。

(をはり)

(をはり)



王四天の光頼

《時金田坂。力怪の山柄足》

二 春 崎 川

盤 山 古 鳥 羽

八六

一 (前巻までの梗概は)
一三〇頁にあります)

主君頼光をうやうやしく慕ひかへることが出来たト部六郎や片瀬小次郎らは、もしかして、吉秀の残黨や國府の軍兵どもが追つて来るやうなこともあらうかと、箱根の西の登り口で、縣爲平に峠の荒太郎をはじめ三島宿の壯士たちの半数をつけ、足場のよい坂路に陣どらして見張らせる事にしました。頼光の奥はそのまゝ、六郎や小次郎や秩父十郎等が守護して箱根の山奥へと走つて行くのでした。峠の荒太郎は初陣の働きに人々の目をあどろかしましたが、またこゝで力かぎり暴れ戦ふことが出来ると、手ぐすねひいて待ちかま

へましたけれど、たゞの一騎さへ敵の姿を見ませんでした。

その中に、三島宿にのこつてゐた壯士たちが、次から次と、好ましい知らせを持つて來ました。

「主人吉秀を討たれた馬入川の武士たちは、宿の人たちに顔を見られるのも恥かしいやうすで、五人三人とこそ、姿を消してしまひました——」

「國府の役所では、はじめから頼光公に對して敵意はないので、追手どころか、さうした騒動のあつたことさへ知らぬ顔に、今はまつたく静まりかへつてゐます。もう何にも心配なことはありません——それでも爲平や荒太郎らは、翌くる日になるまでそこを動きませ

んでした。

二

頼光の奥は、足柄谷の觀音寺にかつぎ込まれたのでした。その住職の松雲禪師といふは、片瀬小次郎の叔父にあたる人だつたので、且つは驚き、且つは喜んで、大それた丁寧に迎へて呉れました。

その上都合よく、松雲禪師は醫術のことや藥草のことにもくはしかつたので、頼光の病氣治療のことまで引きうけて呉れました。

家來たちや松雲禪師の心をこめた看病の甲斐があつて、氣を失つてゐた程の頼光の病が、一日々々と快くなつて行きました。

頼光は正氣にかへると、六郎や

小次郎、縣、秩父などからいろいろな事件を聞かされ、夢かとおぼし打驚き、また家來たちの誠忠をどんなに頼母しく、嬉しく思つたか知れませんでした。

ある日、頼光は大そう氣持がよいとて床の上に起きなほり、峠の荒太郎をはじめ三島宿の壯士たちを側近く招き寄せて、篤く禮を言ひ、あらためて源氏の家人の中に加へました。

そして、峠の荒太郎には自分の名の一字を與へて、『碓井荒太郎貞光』と名乗らせることにしました。

『それにしても平三郎は氣の毒なことをいたしました。彼は本當に氣質のやさしい賢い武士であつたが』

頼光はまたかう言つて、親兄弟

八七

にそむいてまで盡して呉れた平三郎の忠節を大そう憐れんだのであらした。

三

足柄谷に来て五十日ばかり経つと、頼光の病氣は殆ど全快した。今では、都の様子をさぐりに出して置いた問者たちの便りを待たたり、二つの谷の入口と、三つの峯とを守つてゐる家來達から、いろ／＼山の珍らしい話を聞いたりして、もどかしい毎日を暮してゐるといつた有様でした。

ある夜のこと、東の峯の守りに出てゐた家來達が、不思議な話を持つて來ました。

「——今日は珍らしい童子を見て

参りました——何時ものやうに、街道の方に續く谷向ひの山裾の細道を見張つてをりますと、不思議な恰好をした一人の童子が肩をいからして通りかゝりました。奇妙な歩きぶりをする人間もあつたものだと笑ひ合つてゐますと、その後には大きな熊が一匹のそり／＼と追いて來るではありませんか。そればかりではありません。狸、兎、猿、狼などが十四ばかりも行列をつくつてまゐりました。私どもはその不思議な童子が肩をいからして歩く譯を「成る程!」となづき合ふことが出來ました。その中に童子が後をふり向いて何か聲をかけ、その岩の上にどツかと腰を下ろして、背負つてゐた大

八八
鉞をとり外すと、獸たちはもうぐるりと童子の前に輪を描いて集つてゐます。間もなく狸と狼を残して、外の獸たちはバラ／＼と四方へ散れて云つて了ひました。狼は童子の側にうづくまつて、度主君をお守りする侍のやうに守り、狸めは木の枝をとつて來て世にも滑稽な身ぶりをしながら、しきりに童子を扇ぎ立てゝゐました。しばらく経つと、熊が谷川の方から大きな鯉を捕つて歸りました。猿や兎たちに山蓐のやうなものをめい／＼ひつか／＼へて歸つて來ました。童子はそれを皆に分けてやり、自分もさう甘さうにむしや／＼食べてゐましたが、やがて獸たちに角力をはじめさせ、自分

は軍配のやうなものを持つて行司をするのです。そのをかしさ、おもしろさと言つたらありませんでした。とう／＼しまひには、童子と大熊とが取り組みました。熊の足といふものは非常に強いものですが、その童子は大熊を三度の中

二度までねじ伏せて了ひました。その時は、こちらから見物してゐる私どもまで、うん／＼拳を固め足をふん張らずにはゐられませんでした。それ程にも、それは力の入つた勝負でござりました。そして、また歸つて行く時のをかしさ

と申したらござりません。家への土産でせう。今度は熊が大鯉、變な腰つきでかつぎ、先頭に立ち、童子は大勢をしたがへて、肩をそびやかしながら元の道をねつて行きました——」

「まことに珍らしい話を聞くものぢや、吾等も、一度その童子を見たいものである——」

頼光が大そう興味を感じてかう言ひ出すと、觀音寺の住職は、

「その童子なら、私も二三度逢つてことがござります。一度は、南の方の谷間で、恰度今、ご家來がたが申されたやうな工合に、寄集つて何か木の實を食べてゐる最中でした。そこへ、嶮しい山の常として大石が、四つ五つ、急にござう



ッといつて轉げ落ちてまゐりました。その一つは、端の方にゐた獸たちの眞上に飛んで来て、あはや一二匹のものが粉みぢんに押しつぶされたかと思ふ間に、彼の童子はすさまじい勢で降つて來た大石にヤッ！とばかり飛び付いて無事に受け止めてしまひました。その燕のやうな早業、その獅子王のやうな武者振、いやはや、驚き入つた怪力でござります。そのやうに獸どもを愛しとする故、山の獸たちがあのやうに懐いてゐるのでござりませう……」

「さればでござります樵夫たちの話によりますと、この足柄の奥谷に年久しく棲む山姥の一人子とのことでござります。亡き父親といふものは、もとは一かどの武家だつたさうでござります。」
「然らば子が申受けて、源氏の家人に取立て見たいものぢやが、如何であらう——」
頼光がかう言出すと、片瀬、秩父などの家臣達も、
「御家のために、誠に結構なこととござります。」と賛成しました。
「それ程の者を、このやうな山奥で埋れさせてしまふのは残念でござります。拙者が御使者をうけたまはつて、明日にもその棲家をた

づね、山姥ともぐ、童子を連れて参りませう。」
ト部季武が、自分から迎ひに行かうと言ひ出せば、松雲禪師はまた、
「では、愚僧が道案内をすることにしたませう——」と、案内役を引きうけました。
と、縣爲平、秩父十郎らはじめ鎌倉武士のめん／＼は、
「明日、その怪力童子が來たなら碓井荒太郎と力くらべをさせて見たら面白からう。」
「それは必と面白い、是非させて見たい。」
「それにしても眞正面に力比べをさせるといふのでは、面白味が薄い。山の童子を本當に怒らせて見



たなら、一層興味が深いだらう。」
「それはまた、一段とおもしろい思ひつきでござる——」
「殿の思召は如何でござりませう。」
頼光がそれに賛成しない譯はありません。

「それは結構である。面白い勝負が見られることであらう。」
碓井峠が勝つか、足柄山が勝つか、一同の者はどんなに望める日を楽しみに待ちましたらう。

四

あくる朝、季武と禪師とは早くから山姥の棲家をさして出かけた。午すこし過ぎる頃、二人は怪しげな風體をした山姥と童子とを伴れて來ました。季武と禪師とは、母子のものを門の外に残して這入つてしまひました。間もなく、一人の武士が來て山姥だけを門内に入れ、童子をば何時までも中に入れようとはしませんでした。
童子はだん／＼心配になりました。
「人をわざ／＼伴れて來て、何時までも門外に立たせて置くとは何といふことだ！ もう歸つてしまふから、母親を伴れて來て貰ひたい——母親を展して下され」

童子は、とう／＼怒つてしまひました。しかし、中からは何の答へもありません。

「母を戻して下され——母を戻せ——戻さぬと、この門を押破つてしまふぞ——」

童子は、われ鐘のやうな聲を張りあげて喚鳴り立てました。

「無禮者め！ 静かにいたせ！ こゝを何處と心得る？ 源頼光公がゐられるのであるぞ！」

それは碓井荒太郎が聲でした。

「頼光公であらうと誰であらうと吾らにとつては怖い者でも、有難いものでもない。母を早く戻さぬと振りつぶしてしまふぞよ！」

「たわけたことを申すな！ 振りつぶせるものならつぶして見ろ！」

碓井荒太郎が向ふの谷底に放り込んで呉れる！」

門の中からう言ひながらも、くぐり戸を開いて童子を内に入れようとすると、童子はもう満身の力をこめて門柱を外から、みしみしとばかり押し倒しにかゝりました。随分丈夫な門でしたが、怪力童子にあつてはたまりません。

「えい／＼………」と、三四度つづけて押されると、門全體が七分通り傾きかけてしまひました。

門内の荒太郎は不意を喰つたので、しばらくは呆れ顔で眺めてゐましたが、門を倒されては自分の負けと氣がつき、今度は荒太郎が武者振ひをしなから、

「やつ！」とばかり兩手を倒され

やつて來たのでした。

五

渡邊綱が來たのを見ては、力比べや腕だめしのなぐらみどころではありません。寺の中は、煮えくりかへるやうな騒ぎでした。

「——はやく渡邊殿から都の様子を聞かう——よい知らせを持つて來られたか——悪い知らせを持つて來はせぬか——いや、必とよいたよりを持參したに相違ない」

とやかうする中に、寺の大廣間に頼光の坐席がまうけられ、多くの家臣達が源五を中央にして下坐到着き、鳴りを静めて綱の晴れやかな物語りに耳を傾けるのでした。

「——お喜び下され。大殿、満仲

かけた門にかけ、難なく元のやうに揃ふりかへしてしまひました。さうして門は眞直になりましたが、二人の力があなじくらゐであつたと見えて、それから内へも外へも傾けることが出來ず、お互に「えい——やあ——」といふ掛聲ばかり足柄谷に響きわたるだけでした。

この時、門の外から雷のやうな大音聲が喚鳴り出しました。

「控へろ！ 門内の者も門外のものも、しばらく控へてよからう。」眞赤になつて門柱にしがみついてゐた二人も、この聲を耳に入れない譯にはいきませんでした。二人は、門を元のやうに直立させたまゝ、同時に一二歩づつ後にさが

りました。

「先程からの様子をうかがふと、門衛の者が何か門外の客を故意と怒らせてゐるやうにも見える。寺内には頼光公もゐられる筈であるのに如何いたしたのぢや。仔細は渡邊綱が聞かう——」

寺の玄關前には、頼光をはじめ家來達が見物してゐたものと見えこの聲を聞くと、

「渡邊殿ぢや——」

「渡邊——が歸られたのぢや」

「門を開け——」

「あ、源五が歸つたか——」

忽ち、門は開けられました。源五綱は、足柄谷から出して置いた問者を二人伴れて、京都から遙々主君の病を氣づかひながら、

公には謀反の疑ひ今はあつたが、暗れてもとのやうに京都の守護をいたされることになりました。藤原仲光どの、並に藤原保昌どのが申すことには、満仲公の家人三葉五郎俊貞であるといつて、縫殿陣に火をかけようとした曲者を探し出すことが出來れば、大殿の疑ひは直に明白にならうといふことなので、長い問苦心をかさねて探した甲斐あつて、此のほど彼の曲者が奈良にかくれてゐるのを突きとめ拙者と保昌どのとで引き捕へましたところ、案のじやう彼はまぎれもなく悪少納言秋忠の家人、園田藤六といふ者でござりました。早速檢非違使の役所に引き渡しましたので、大殿らは元の官につくこ

とが出来ました。そして、惡少納言は佐渡ヶ島に流され、水瀬行春、園田藤六等は皆斬罪に行はれました。その上、若殿には直に都に上つて大殿に代つて京都守護の職にあつきになるやうにとの、朝廷からの内意でござります。」

「それを聞いて安堵いたしました。其方たちが何時もながらの忠節、かたじけなく思ふぞ——」

頼光は、かう言つて嬉し涙にむせびました。

「お目出たうござります——」

「源氏は萬々歳にござります——」

總て、そこには盛んな祝ひの酒宴が開かれることになりました。

そして、新しく源氏の家人に加へられた碓井貞光や三島宿の壯

士達が、渡邊綱に引き合はされました。

また、そこには先程から忘れられてゐた山姥と怪力童子とが、大勢の家来たちと一緒に祝宴につらなつてをりましたが、その場で母子の者に頼光が手づから盃を與へ源氏の家人の中に加へることにいたしました。

「御覽の通り、山奥で獸どもを相手に育ちましたが、人間としての道はよく教へ込んで置きました。必ず、人並みのお役に立つと存じます——」

山姥はかう言つて、悴の出世の門出を別れの涙さへ忘れて喜ぶのでした。

「——今日は吾等にとつては非常

に嬉しい日である。今日、その方を更めて家人にいたすといふは、まことに時機がよろしい。物にたとへるなら金よりもよい時であるそれに酒は田の水候どもにもたくさんある。其方を酒田金時と名乗せることにいたす。」

頼光は上々の機嫌でした。

「有難き仕合せにござります——」

もう足柄山の怪力童子も、衣服大小を與へられて見違へる程立派やかになつてゐました。

この時、片瀬小次郎は「數多い家人たちの中、縣殿、秩父殿、拙者やその他、東國に領地を有つてゐる者は、殿が都にのぼつてしまへば年に一度か二年に一度ほか、お目にかゝることさへ出



来ない。まして、主君の御身を守ることなどは合戦の場合でもなくては出来ない。しかし、渡邊殿、ト部殿、碓井殿、酒田殿などといふ剛勇無双の士が四人までも、若殿の身の守りをいたして下さればこれより安心なことはない。吾々はこれから先、この四人を主君の四天王と呼ぶことにいたしたいと思ふ。」と、一同にはかりました。

「それはおもしろい事でござる。目出たいことござる。四天王、四天王……」

満坐の者は、幸福な四天王の人人をほめそやし頼光の武運をいのちました。——やがて、酒田金時は、坂田金時とかくやうになりました。

(つづく)

（日本童話選）

かみなり 聾

立石 美和
川上 四郎 畫



の若者になりました。

そこで、お母さんは、太郎にお百姓をさせようと思つて、

「これ／＼太郎、うちの畑は三反あるが、あれをお前にあげるから、今年から一人で畑作りをして

ごらん。」

と、いひました。

のんき坊主の太郎は、そんな事を、今までちつとも考へてゐなかつたので、

「困つたな。いつたい何を作ればいゝの？」

とき、すと、お母さんは、

「まづ茄子でも造つてごらん。これだけの金を、みんなお前にあげるから、市へ行つて、三反分の茄子の苗を買つておいで。」

と教へて、きんちやくをやりました。

太郎が市へ行つて見ますと、一人の苗うりが、大聲をはりあげて、

「さあ／＼買った／＼！ 茄子苗だ、茄子苗だ！ 上等の茄子の苗だ！ 一本で、千本の代りをするぞ！ さあ／＼、同じ買ふなら、こんな苗を買つてみる！ 一本うゑれば千本の實になるぞ！」

と、唄をうたふやうな調子をつけて、一生けんめいに、どなつてゐます。

太郎は、すつかりかんしんして終ひました。

そして、苗賣爺に、

「おぢさん、その茄子の苗は、一本で三反分の價うちがあるのかい？」

と、たづねました。

苗屋の爺さんは、笑ひ乍ら、

「あるとも／＼、三反どころか、一町分の價値もある。」

と云ひました。

太郎は、お母さんからもらつたお金を、すつかり爺にやつて、大事さうに茄子苗を一本かゝてて歸りました。

お母さんは、がつかりして、

「あゝあ、この子には困つたものだ！」

と、ためいきをついて悲しみました。

けれど、太郎は平氣なもので、あくる日から、ひろい／＼畑の真中へ、たつた一本うゑた茄子の木を、大事にして育て始めました。

太郎は、朝から晩まで、真くろになつて、一生けんめいに働きました。

何をそんなに働いたと、笑ふものではありませ

ん。木はたつた一本ですが、太郎は正直に、千本分の水をやり、三反分のこやしをやつて、その茄子一本のために、廣い三反の畑を、きれいに草取りまでしなければならなかつたのですから。

さあその評ばんといつたらありません。悲しが
つて、ふさぎ込んでゐるのはお母さんだけで、物
好きな人は、面白がつて、

遠くの方から、わざ／＼見物に
きて、ワイ／＼囃し立て、わら
ひました。

太郎はそれでも平氣です。そし
て、茄子の木は、みる／＼中に、
ずん／＼、ずん／＼と大きくなつ
て來ました。

あまり木が、大きくなるので、
初めに笑つた人達が、今度は驚い
て、終ひには、毎日、黒山のやう
な見物が押し寄せて來ました。

その間にも、茄子はどん／＼太つて、ずん／
とのびて行きます。
あれ！あれ！どこまで大きくなるのでせう！



高いお寺の大屋根は、二十日も前におひこしまし
た。お宮の公孫樹の木よりも高くなつたのは、も
う十日も前の事。高くて、高くて、四五日前から、

先の方は見えなくなつた！

あれ／＼！雲の中へのびて行
く！空を突きとらして行くやう
だ！

ある朝、太郎が畑へ行つて見る
と、ちやうど、紫の雲が、たなび
いたやうに、大きな茄子の木に、
一ぱい花が咲いてゐました。

「咲いたぞ／＼！千本分の花が
咲いたぞ！」

太郎は、飛び上つてよろこびま
した。
手を拍いて、木のまわりを踊りまわりました。
次のある朝、太郎が畑へ行つて見ると、なつた

わ、なつたわ、いく萬といふ茄子の實が、
ぶどうの實のやうに、天から鈴なりになつて
ゐました。

太郎は、うれしくて、うれしく
て、何うしていいかわからなくな
つて終ひました。

家へかけ込むなり、

「なつた！なつた！」

と、いつてお母さんに抱きつき
ました。

そのまた次のある朝、その
日はちやうど、七月七日の七夕様
のお祭です。

それで、お母さんは、太郎に、

「お前さんがたんせいした、珍らしいお茄子の初
なりを、七夕様に供へませうよ。畑へ行つて、い
いのを少しとつておろで。」



といひました。

そこで、太郎は、一番長い梯子を納屋からかつ
ぎ出して、茄子の木の幹へかけて、まつちやら、

をつちやらと、木のぼりを初めま
した。

だん／＼、だん／＼登つて行く
と、いやもう高いの、高くないのつ
て、村中が一眼に見えて、自分の
家なんか、足の下に豆つぶ程の、
おもちやの家みたひに見えます。

「これや面白い！オヤ！川が
見えるな！遠くの森も！山の
彼方の野原も見える！オヤ／＼
オヤ／＼！あれは海かしら。雲

かしら？オヤ！あんな低いところに、富士
山が見えたぞ！いや面白い、のぼれ！
ぼれ！」

せつせこ、せつせこ、太郎はいつの間にか、
天へ登つて終ひました。そのしようには、すつ
かり雲の中へ入つて終つて、下の、人間達の世界
では、見る事も出来ない、金とも
銀とも例へやうのない、きれいな
きれいな御殿へと、たどりついて
終ひました。

見ると、美しい御殿のお坐敷に
は、白いひげを生したお爺さまと、
可愛らしいお姫様が二人、きちん
と、行儀よくすわつてゐます。

太郎は、お爺さん達に挨拶をし
て、

「私は、日本といふところから、

茄子の實を取りに参りました。いたゞいて行つて
も、いいでせうか？」
と、尋ねますと、お爺さんは、ニコニコ笑ひな



がら、

「それは、よく來ましたね。この珍らしい茄
子の木は、あなたでしたか。いや、まだお禮も

云はないですみません。實は、あ
まりおいしいので、毎日、娘
達とごちさうになつて居ります。
さあ、まあこちらへ上つて、
ゆつくり遊んでいらつしやい。」
さう云つて、それから三人で、
いろ／＼と、ご馳走をして呉れま
した。

暫らくすると、お爺さんは、

「どれ、失禮をして、一仕事しよ
うかね。」

と、娘さん達に相談をして、奥の間へ入つて行
きました。

やがて、出て來たのを見ると、太郎は、

「キャツ！」

と、驚いて、後ろへ倒れて終ひました。

それもその筈、さつきのやさしい、お爺さんと

は、似てもつかない恐ろしい奴
です。頭には角が二本ニョキツと
生えてゐるし、虎の皮のおふんど
し一つの眞ッばだかで、口は耳の
所まで裂けてゐます。

これは、鬼に異ひないと思つた
ので、太郎は、ガタ／＼震へ乍ら、

「ごめんなさい、どうか食は
ずに助けて下さい！」

と、手を合せると、鬼は笑つて、

「これ／＼日本の息子さん！ 私
はさつきの年寄です。恐がる事なんかちつともな
い。

これからお仕事をするので、ちよつと着物を着



かへたのです。少し、お百姓の手助けに出かけな
ければならない。」

「お爺さんは、何んなお仕事なさるのです？」

太郎が驚いてきくと、

「まあ、面白いからあなたも
一緒に來て手傳つて下さい。私は
雷ですから、これから夕立をふ
らしに行くのです。」
と云つて、大きな太鼓をかつぎ
だしました。

みると、いつの間にか、二人の
お姫さまも、はしつこい姿になつ
て、大きな鏡を一枚づつ抱へてゐ
ます。太郎は急に面白くなつて、
私にも手傳はして下さい。何か、
私に出来る事をさせて下さい。」

と頼みますと、

「それでは、このつぼをあげるから、この口から、雨を降らして下さい。このつぼの中には、雨が一杯つめ込んであるのです。」

と云つて、一つのつぼをかして呉れました。お爺さんは、

「さあ、出かけようか。」といふと、忽ち黒雲を招きよせて、それにのつて、走り出しました。

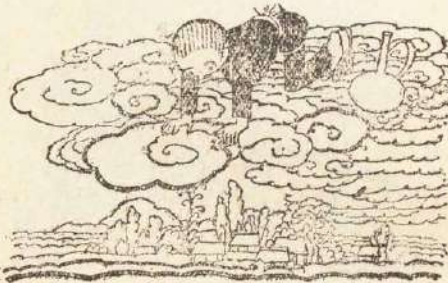
いや、面白い、面白い！

お爺さんが、ドンドロ、ドンドロ、ゴロゴロと太鼓を叩くと、

二人のお姫さまが、ピカリ／＼と、鏡を照らす。そこで太郎は、ザーツ！と雨を降らす。

そしてその間に、走るわ、走るわ！

だん／＼慣れて来ると、うま／＼駒子をとれてきて、



「ピカリ／＼！」

「ゴロゴロ！」

「ザーツ！ ザーツ！」

その面白いこと、その早いこと、みる／＼野をこえ山をこえ、町かと思へば森の上、たちまち世界の空をかけ廻りました。

太郎は面白いが、下では大變です。

眞黒になつて田植をしてゐた百姓の人達は、

「ありがたい！ ありがたい！」と、大よろこびですが、ピカピカめかし込んで、ぞろ／＼町を歩いて居た、大きな町のおしやれ達は、

「夕立だ！ 夕立だ！」と、泣き出しさうな聲を出して、散り／＼ばら／＼に逃げて行きます。

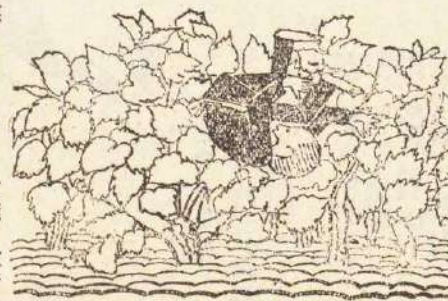
そのうち、太郎は氣がついて、ふと下を見ると、いつの間にかやら、自分の村のすぐ上へ、来てゐました。そして、お母さんが、一生けんめいに、太郎の着物を洗たくしてゐるのが、

「だーめーだー！ 雨がふるよーッ！ おつかさーん！ おつかさーん！」

太郎は、大きな聲を出して教へました。そして、あんまりお母さんの方に氣をとられて、下ばかり見てゐたので、つい黒雲から足を踏みはずして、

「あッ！」

といふ間に、ずどんと、下へ落ちてしまいました。高い／＼、天から落ちたのでは、どんな人だつて堪りません。けれど、よく／＼太郎は遅のい、



人だつたと見えて、うま／＼桑の木のかげへ引つかゝつて、怪我もせずに、自分の家へかへりました。

空では、雷さまの親子は、太郎にわかれたのを、大さう名残りをしく思つて、悲しみました。なかでも、二人のお姫さまは、いつまでも／＼、太郎をなつかしがつて、忘れる事が出来なういひました。

それで、雷様のお父さまは、姫達に、日本の息子の事を、想ひ出させないやうに、それからは、なるたけ桑畑の上は、通らないやうにしました。

さういふわけから、私達日本人達は、雷様が、あまりひどく鳴つて、悪い時には、

「桑原！ 桑原！」といつて、遠くへ行つて貰ふのださうです。

(をしまひ)

魔法くらべ

高橋 里江

岩岡とも枝 畫



一、迷ひ子王様

すつと、すつと大昔一人の王様が居て、毎日の様に、家來達をつれて、狩に出かけました。

王様好きは狩りあそび
山では 男鹿狩り
近い 野原で 兎狩り
野越へ 山越へ 狩り暮す

ある日、いつもの通り、みんなで狩りに出かけましたが、その日、王様は大馬足の早いいい馬に乗って居たので、家來達を後に

残して、たゞ一人、どん／＼先へかけて、行つて、いつの間にか、深い／＼森の中へ迷ひ込んで終ひました。

日が暮れて、深い霧が、すつかり森を包んで終ひました。王様は、仕方なしに、一本の小徑にそつて、馬の歩くまゝに、まかせて居ました。所が、その小徑は、間もなく、廣い沼につき當つて、徑だか田だか分らなくなつて終ひました。

王様の馬は、一歩ごとに、沼に入り込んで行きます。前足をあげれば後足がしつと深く沈むし、後足をあげれば、前足が動かなくなつて

終ひし。……と、ふく／＼と、沈んで終つて、もう一足も歩く事が出来なくなりました。

王様は、馬から飛び下りて、沼地の、石を頼りに、飛び／＼して進みましたが、さう都合のいい石が、順々にある筈もありませんし、行つても／＼沼は際限なく續いて居ます。

その中に、夜も更けて、寒さか身に浸みて來ました。暗みはづしては、太股のあたりまで沈んで終ひました。

もがいても、あせつても、もう死ぬより外に仕方がないと、王様は、観念なして終ひました。

ちやうどその時、彼方の方から、風のやうに輕々と、沼を渡つて來る、小つげな人間が、あり／＼した。

その不思議な男は、小さいくせに、長い長い腰まで廣くあごひげを生じて、ステッキを持つて、まるで、平らな廣場を歩く様に、樂々と走つて來ました。

『助けて下さい！ どうか助けて下さい！』

王様は聲をあげて頼みました。

『よろしい。助けませんね王様。助けませう。併し、私でなければ、とても貴方を助ける事が出来ませんよ。昔から、この沼へ落ちて、助かつた人は一人もないんですから……』

『何うか助けて下さい！ 何んな御禮でもしますから』

『さうですか。では約束をして下さい。貴方が御城へ歸つてから、一番さきに生れた生物が私に下さい。さうすれば、助けてあげます』

『上げます。上げます。そんな事は何んでもありません。どうか助けて下さい。』

『では約束をしましたぞ！』

『よろしい。では、このステッキに、從いてお歸りなさい！ ほーら！』

不思議な男は、さう叫んで、持つて居たステッキを、ほんと、王様に投げつけました。

王様は、ステッキを受け損なつて、『失つた。』

た！』と思ひましたが、何んでもありませんでした。

ステッキも、筒で、勝手に、ピョン／＼と、石から石を傳つて飛んで行きました。その後について行くところ、あら不思議、樂々と足を運ぶ事が出来て、間もなく平地へ出る事が出来ました。

併し、ステッキは、まだ、どん／＼走りつづけて、と／＼、王様のお城の前まで、道案内なしてくれました。

門の所まで來ると、ステッキは、びたりと止つたかと思ふと、つむじ風に吹かれたやうに、空中に舞ひ上つて、それから、元きた道を、矢の様な早さで歸つて行つて終ひました。

それを見送り乍ら、王様は、ちびつこの魔法使に約束した、御禮の事を考へました。

『自分が歸つてから、最初に生れる生物……牛の子か？ 羊か？ 犬か？ それとも、小鳥のひなか知らず？』

云ふまでもなく、お城の中には、大勢の家來も、数知れぬいろ／＼な獸も仕込んで居ます。

「何れ最初に生れるか、仲々考へて居ても分る筈があれませんか。」
 王子は、思ひ切つて、門を入つて、勢よく階段を上がり初めました。が、大膽です！
 その時、「ギヤア！ギヤア！」と、男らしい赤ん坊のなき聲が、女王様の部屋からもれて来ました。
 女王様は、王子を御産みになつたのです。そして、この王子が、王様達の最初の、ただ一人の、男の子だつたのでした。そして、王様も助かつて、お城へ歸つてから、最初に生れた者は、この王子の外にはありません。王子を、あの、ちびつこの魔法使ひにやらなければならぬ。
 「困つた事になつたものだ。飛んでもない約束をしてつた！」
 仕方なしに、王様は、女王様に、けふの事を、すっかり話しました。そして、例へ何んなに高價な物でも代りにやつて、後嗣の王子を助けようと相談しました。
 王子は、間もなく洗禮を受けて、イレガン

といふ名を、つけられました。
 十四日目の晩、お母様の女王様が、イレガン王子の、指が二つに割つて、やさしい子守唄を唄つておいでになりましたと、何處からともなく、風のやうに魔法使が現れて、母王の前につゝたつて云ひました。
 「御存じでせうな。この王子は、私のものなんです。」
 「知つて居ます。知つて居ます。王様からすつかり話を聞きました。けれど、どうか助けて下さい。その代りに、何んなものでもさしあげますから。」
 「いけません！王様は、命の恩人に、約束を守らないといふのですか？」
 「いえ、いえ、さうではありません。でも、今つれて行かれては、あゝ、……」
 女王様は、とうとう泣き出して絶ひました。
 「よろしい。それでは、五年だけ待つてあげませう。」
 「ほんとですか！ありがたう！ありがたう！何んな御慮でもしますわ！」

「いや、何もしりません。牛を百匹だけ頂戴しませう！」
 女王様は、よろこんで、百匹の牡牛を、魔法使に引かせて歸しました。
 二、六百匹の牡牛
 その後、何の疑つた事もなく、イレガン王子はすこやかに育つて、王様の一家には、楽しい平和な日々、過ぎて行きました。
 五年経つたある日の事、突然また魔法使が母王の前に現れて、王子を連れて行かうとしました。
 女王様は、また、いろ／＼と頭んで、五年間待つて貰ふ事にして、その代りに、今度は二百匹の牡牛を、魔法使に贈りました。が、また、夢の間に、五年過ぎて、王子が十歳になつた時、魔法使が、風の聲に現れました。
 女王様は、いゝ五年待つて貰ふ約束をしてその代りに三百匹の牡牛を贈りました。
 斯うして、六百匹の牡牛が、魔法使の手



に渡りました。
 やがて、王子は十五歳になりました。氣質の優しい、賢い、立派な王子になられたので、父王も母王も、一層可愛く思はれて、大事に大事に育てて居られました。
 約束の日が来ました。突然、母王の前に現れた魔法使は、恐ろしい顔をして、
 「私は、私の子連れに來たと噂鳴りました。
 女王様は自分の持つて居る寶物は、何んでもあげるからと云つて、今五年間待つてくれと頼みましたが、魔法使は、今度は、何うしても許しません。
 「私は、私自身のものを取りに來たのだ！王子よ、お前

は私のものだ。夜が明けた。眞すぐに私の所へ來なければならぬ。わかつたか！このステッキを、門の所へ立てかけて置くから。このステッキが、お前の道案内をするだらう！」
 さう、命令するやうに云つて、母王をねめつけ乍ら、云ひ渡りました。
 「若し夜が明けても、この子が來なかつたら、私は、お前達を、すつかり、この城と一緒にやき殺して終ふぞ！そして、四十七尊もある、深い／＼の溝の底へ、さき込んで終ふぞ！考へて見ろ！私が、王様の命を助けながら、満十五年になる。約束を果す時が來たのだ！」
 恐ろしい男は、ステッキを抛して、歸つて行きました。
 父王も母王も、何んなに悲しんだか知れませんが、次の日の朝早く、人々は、涙に濡れて、悲しい悲しい王子の首出を送りました。

三、難題また難題

王子は、思ひ切つて、ステツキを持つて、城門を出ました。
門を出るとすぐ、ステツキは、王子の殿の間へ、はさまりました。すると、何かに乗つて、馳けて居るとも、また、飛んでも居るともつかない、不思議な早さで、忽ち空中に舞ひあつて、森の根の下に、蔭が見えるかと思へば、高い山、廣い野原や、幾すじの川を迎へ、海を横切つて、その日の夕方、いつの間にか、足が地について居た時迄、王子は飛び通しに飛んで行きました。
見ると、すぐ目の前に、大きな山を駆け抜いて造つたやうに、立派なお城が立つて居て長いあひげを生した、ちびつこの老人が迎へに出て居ました。
王子は、すぐに、魔法使だと思ひました。で、丁寧に挨拶をしました。
『今晚は！魔法使の小父さん！』
『今晚は！王子様！』ちやが、私は魔法使

ひぢやない。この城の王様ぢや。この國へ来た者は、私の支配を受けなければならぬ。そこで、私は、早速お前に命令する！
何んでもいいから、すぐ、三つの事を云へ！
すぐだ！尤な事なら許してやる。その中一つでも、間違つた事があつたら、私は、お前の首を、れち切つて終はればならない！さあ云つて見ろ！
會ふと早々、魔法使は、もう恐ろしい難題を持ちかけて來ました。併し、王子は賢い子供でしたから、落ちついて答へました。
『え、すぐ云ひます。お母様の、懐程、温かい寝床はありませんでした。』
『よしその次は？』魔法使は云ひました。
『お母様の御乳程、おいしい物はありませんでした。』
『よし！それから？』魔法使はまた云ひました。
『私は、生れて今日程、お母様に悲しい思ひなされた事はありませんでした。』
『感心だ！お前はかしこい子供だ！』

魔法使は、うれしさに云ひました。
『お前は仲よい子だ。併し、まだ、私に教はらねばならぬ事が澤山あるぞ！これから、うんと仕事をしなければならぬ！まあ、今晚はお休みだ。勝手にそこいらを歩いて見て、眼を樂しませるがよい。明日からは急がしいぞ！』
魔法使のお城には、イレガン王子の、未だ見た事もない、不思議な、異つた物が、数へきれない程ありました。お城は、下から、天邊迄、金と銀とで、飾りつぶしてありました。
併し、そんな事には、王子はなれて居ました。が、生へて居る樹、咲いて居る花、なつて居る木の實は、てんで、見た事も、聞いた事もない、奇妙なもので、夢にも知らない、鳥も居れば、もつと望つた事には、氣味の悪い魔法使の家族が、住んで居る事でした。
魔法使には、十二人の家來が居て、どれもこれも、動物のやうな、荒々しい顔付をして年中さわいで居ます。

二階には、年取つた女の魔法使が居て、この魔法は、魔法王のお母さんださうです。なんでも、何百年といふ位、長命なした女で、世界が初つてから、これ程、むごい悪い魔法はない、いはれてゐました。
悪魔のそばには、一人の、可愛らしい侍女が居て、人々は、この類の事を『侍女ミゼリ』と呼んで居ました。
ミゼリだけは、この國の人間ではなくて、餘程以前、未だほんの赤ん坊の時に、魔法に、さらはれて來た、何處かの國の王女だといふ事でした。
魔法だつて、若し、まともに、二階に住んで居る魔法の顔を見たら、震へ上つて、氣絶して終つてせう。この魔法は、齒が二本しかありません。そして二本の齒は、裏側で、牙のやうに、口の兩側へ突き出て居ます。鼻と云つたら、とても長いとんがり鼻で、あこの所までぶら下つて居ました。
侍女のミゼリは、長い間、この魔法につか



へて、暮して來たので、今では、すっかり魔法を學んで終ひました。併し、元々、やさしい、氣高い王女だつたのですから、二人、異つて居て、美しい、性質の娘だつたのです。ミゼリは、入つて來た、イレガン王子を、一目見て、大變、なつかしかりました。心から好きになつて終ひました。併し、そんな事を、氣づかれない様に、素知らない顔をして居りました。
間もなく、イレガン王子の爲に、ぜいたくな夕御飯が運ばれました。その晩、王子は、立派なベッドへ寝かされました。
夜が明けると、魔法使は、王子を呼び起して、近所の森の中へ連れて行つて、森の樹を切り倒す様に命じました。
『これが、お前の今日の仕事だ。云つて置くが、夕方迄に、この森の樹を、一、二、三、四、五、倒されねばならない。一本でも残したら、私はお前の首をれち切つて終ふから！』
さういつて、魔法使はどん／＼行つてしまひました。(つづく)



童謡

野口雨情選

(子供篇)

ありのお家(食)

埼玉 金子アサ (巻四)

ありのお家は

あなつこ家
ありがどろく
はいつてく

あんなにつづいて
はいつてく
ありのお家は
くらいだろ

ちぎれ雲(食)

熊本 宮本のり美 (巻六)

ちぎれ
ちぎれ雲
ひとりぼち
ひとり
あをい空
大空に

宿なし雀(食)

石川 刀禰元成 (巻二)

とんと雨だれ雨坊主
やどなし雀は冷たかろ
うらの河原のすすき原
やどなし雀のかくればに
つめたい、みぞれの
雨がふる
とんと雨だれ雨坊主
やどなし雀は冷たかろ

とんぼ

栃木 沼尾キクエ (巻四)

とんぼ
とんぼあつて
あてんきに

一一〇

とんぼが
うれしく
あそんでる

ななつ星

埼玉 堀口チ子 (巻三)

くらいお空の
ななつ星
きれいに
きれいに
ならんでる
はよはよ
ねむれよ
ななつ星
ひろいお空も
よがよけた

ゆらく白ゆげ

岩手 平賀藤一 (巻五)

ゆらく白ゆげ
お茶のゆげ
サンタクロースの
ひげのやう
コップの
お家を
旅立つた
ゆらく白ゆげ
お茶のゆげ

ひとしきり

東京 木原繁 (巻五)

松の木

おまつり

秋田 梅田福治 (巻五)

おまつり



みこしを肩に大聲で
村の若い人たちが

夜

(姓名不明)

電燈が
ぼんやりぬれたよだ
人の頭が浮いたり
沈んだり

一一一



宮本武藏に

ほめられた男

小山 勝 清
寺内 萬治 郎 畫

二刀流で名高い宮本武藏が嚴柳島といふ九州小倉の沖の離れ小島で、父の仇佐々木嚴柳を撃つて殺を輝かした話は、皆様よく御存じでせう。併しあの話は作り事で、嚴柳は武藏の爲には決して父の仇

でも何でもなく、いやそんな悪士どころか、未だ二十歳そこ／＼の青年で、九州一圓にその名をうたはれた天晴れの若手劔士だつたのです。武藏はその名を聞いて、是非一度試合をしたいといふので、遂々九州へ出かけたのでした。そして小倉の領主細川忠利侯に願つ

て、試合のお許しを受け、壮烈な勝負をやつたのであります。一體武藏といふ人は、仕合にも生命懸けの真劔勝負をやつたので餘計人から怖がられたのですが、其時も矢張り真劔の果し合ひを求めました。嚴柳も勿論喜んで引受けました。そしてその日になると

嚴柳が約束の場所に早く着いて、待てど待てど武藏は来ません。年若い嚴柳はいら／＼して、さては自分の腕前が怖ろしくなり、逃げて了つたかなどと思つてゐると、二時間程遅れて、ゆつくり小舟で漕ぎつけて來ました。嚴柳は敵の姿を見ると勇氣りん／＼として、「さあ來いッ」とばかり刀を引抜き、鞘を取つて海の中に投げ込みました。再び刀を鞘に収めぬ、決死の覚悟を示したのです。それを小舟の中から眺めた武藏は、

「鞘を捨てたのは、死ぬからもう要らぬといふことだらう。勝つのもりなら、敵を斬つて後又刀をさめねばならぬから、鞘は大切な筈」と、武藏は笑ひ乍ら云ひました。からかはれたと知つ、嚴柳は、「あのれッ」と叫んで、小舟のついた渚に駆け寄り、丁度上陸しようとした武藏の足を、

「ほう」今更の様に皆は呆れたり膽を冷したりして、武藏の顔と、嚴柳の死體を、かはるがはる見比べて、嘆聲を發しました。唯一人其中にまじつて、まじろさもせず武藏の顔をじつと、見つめてゐる男がありました。それは細川家の家來で、都甲太兵衛といふ武士でした。

武藏はこの背の低い、貧相な身装の卑しい男の、烈しい眼つきを直ぐに感じて、きろりと睨み返しました。そして心の中で、

「はあ、こいつ俺の呼吸が亂れてゐるかないか、俺の膽がどれ位据つてゐるか、それを見極め様としてゐるのだな。小僧らしい奴だ」と思ひました。

二

武藏は嚴柳を倒した後、細川侯の強つてのおひきとめを振拂ひ、後年を約束して又旅に出ました。一本の劔を腰に横たへ、凜然として足に任せてさまよふてゆく所、ことごとく武藏の勇名は響いて、「宮本來たる」といへば、その國中

大騒ぎ、必ず殿様から招かれてもてなしを受け、宛ら無縁の大名の様な觀がありました。そして諸々方々から、莫大な高祿で召抱へ様と引張られましたが、何故か武藏はそれをきつぱり斷り、放浪十年ばかりの後に、前の約束通り細川家を訪れました。其頃細川侯は肥後國に移つてゐましたが、武藏は此處に足を止めて、「參政」といふ言はば客分の様な待遇で、日を過ごしてゐました。

或日何かの話の序に、細川侯は、「宮本、御身も此國に來てからもう半年程たつが、わしの家來の中で御身の眼から見て、これは、と思ふ様な奴が見つかつたかな」と尋ねました。

武藏は暫く黙つて考へて居ましたが、やがて

「見つかりました、一人、素晴らしい男が――」

「ほう、それは誰だ――」

「名前は存じません。極く身分の軽い士です。背の低い色の黒い、貧相な恰好の男で、顔はよく知つてゐます。その男は、かつて嚴柳と試合した時、皆が私の技に驚き呆れてゐたのにもかかはらず、私の眼つき、呼吸にばかり氣をつけて、私の度胸を探らうとしました。喰へない奴だと思つて、その儘素知らぬ顔をしてゐましたが、今度此國に來て昨日始めてその男に城中の大廊下で逢ひました。それも唯それだけですが、どうし

て、歩きよりから物腰から、普通の士とは大分違つてゐます。」

細川侯は、自分の家來に、これ程武藏から賞められる男がゐやうとは思はなかつたので、喜んで件の男が誰であるか詮じしました。ついでながら云つて置きますが、武藏はいつも人の批評をしない人で、滅多にそんな風に人をほめたことなどはなかつたのでした。

昨日大廊下で宮本に行會つた人で、背の低い、色の黒い、貧相な恰好の男、それが都甲太兵衛だといふ事は直ぐに知れましたが、これには一寸細川侯も他の使臣達も意外に思ひました。何故なれば太

兵衛は一向に特色のない男で、劔や弓術や體術や其他の武技に秀でた人は、他に澤山ゐるし、力の強い人も別にゐて、誰も太兵衛な

どを問題にする者はなかつたので、強ひて太兵衛の人と異る所を云へば、口數の少い事、飾り氣のない事、まあそれ位のものでした。殿様の前に呼び出された時、太兵衛は平素の通り、平伏して御言葉を待つてゐました。

「呼出したのは外でもない、お前



心當りがあるか。」

殿様がさう言はれると太兵衛は「いいえ、そんなお賞めに預る覚えは一向御座のませぬ。」と平然と云ひました。

すると武藏が横から、

「御身は武士として立つてゆくに日ごろ如何なる心懸けが必要だと思はれるか。」

「はい、何時でも死ねる覺悟が大事だと思つて居ります。」

案の定、太兵衛の答は平凡だったので、皆顔見合はせてニヤ／＼しました。併し太兵衛は相變らず落着いてゐます。

「ではその覺悟を養ふのに、御身はどんな修業してゐる。」と重ねて武藏が尋ねると、

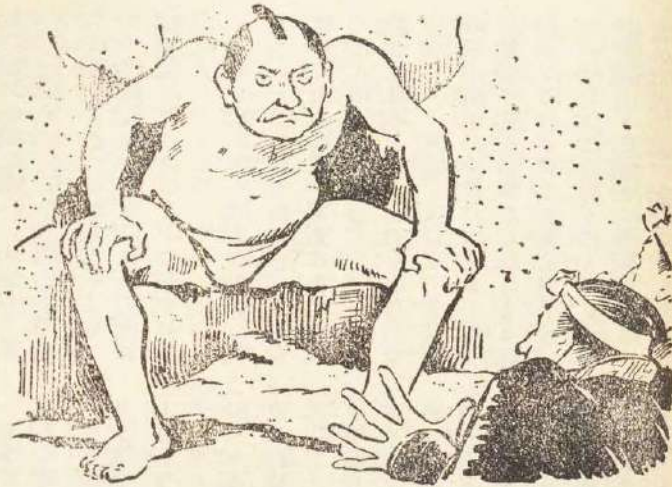
「私は何時も夜寝る時に、梁から紐を垂れ、それに刀を吊るして胸の上に切先を向け、心氣を鍛へて居ります。取づかし乍ら私の修業といへばそれだけです。」

「うーむ」武藏は呻りました。「それで判つた。仲々常人の眞似の出来ぬ心懸けだ。御身は矢張り肥後藩中第一の度胸者だ。」

日本無双の大劍士が睨んだ眼には狂ひはなかつたのです。都甲太兵衛は、殿様から厚い御賞めの言葉を戴き、今迄大して問題にしてゐなかつた連中も、太兵衛を始め尊敬しはじめました。

三

「わーっ、危い。」



押入つてゆけば、入口に待つて居てはた／＼と叩き斬るは必定、厄介なことになつたものです。捕方もわい／＼云ふだけで、一人として戸に近づく者はありません。

丁度其時、のそ／＼と來かかつたのは、城中から歸りの都甲太兵衛です。何事かと、暫くたゝずんで眺めてゐましたが、

「よし、俺が捕へてやらう。」

と言つて、家に近づいてゆきました。

「それ逃げたぞ。」

「今追馳ける。」

「あ、家の中に這入つた。」

客い六月の眞晝のこと、城下の町で、大勢の捕方の役人と、彌次馬共が、口々に喚き罵つて一軒の家を取まいてゐます。それは一人の浪人が、一寸したまちがひから人を斬つたので、役人が取抑へようとするのと物狂ひに暴れ出し、澤山の人を傷つけて、今一軒の空家に逃げこんだ、その騒ぎでした。何でも浪人は、大阪方の落武者らしいといふことで、素晴らしく腕の立つ上に、斬死を覺悟しての奮闘ですから、うかとは手がつけられません。殊に空家に這入つて了つて、中から月をしめたので、

どうするのかと思つて皆片唾をのんで見て居ると、太兵衛は四邊を見廻し、落ちてゐた丸太棒を拾ひ上げ、それでもつてどし／＼と壁を壊し始めました。もとより土壁の事とて直ぐに壊れて、二三尺四方ばかりの穴があきました。中からは浪人が血走つた眼を光らせて、刀を提げつつ、睨みつけてゐます。太兵衛は今度は腰の大小を取つて靜かにそこに置き、丸腰となりました。そして壁の穴に近づくと、くると役人の方へ向き直つてしまつたので、役人はもとより、穴の中から睨んでゐる浪人も面喰ひました。

太兵衛は平素の通りの眞面目な顔で、帯をほどいて着物を脱ぎ、

裸になつて穴に尻をくつつけ、うん／＼云つてゐます。尻から穴の中に這ひこんでゆかうといふのです。皆が呆れてゐる間に太兵衛は到々穴の中に這ひこんでしまひました。

浪人は餘り變な相手の仕事にきよ／＼と見てゐると、穴から離れた太兵衛は、電光の様な速さで浪人の手を叩きました。ハツと思つた瞬間、浪人は刀を取落しました。と、間髪を入れず、太兵衛の手は相手の胸襟に掛りました。「畜生」浪人が叫んだ時はもう運かつたのです。太兵衛は背負投げていやといふ程強く浪人を其場に投げ倒し、片膝でぐつと抑へて、敵の両手を逆に捻上げました。

もうどんなにじたばたしても、浪人は駄目でした。「立てッ」太兵衛は途方もなく大きな聲で叱りつけました。浪人はしほ／＼と起上りました。

ちんちくりんの裸ん坊の太兵衛が、大男の浪人の手を捻じあげて家の外に出て来た時には、皆一時に「あッ」と驚きました。其時だけは貧相な太兵衛の顔が、何だかひどく神々しいものに見えた、と此場に居合はせて親しく見物した田部隼人といふ人が「肥後騎人録」といふ書物の中に書いてゐます。此話が城下一びいに傳つて、都甲太兵衛の名は急に高くなりました。城中の藩士達は、よるとさはると、此話で持ちきりで、太兵衛

の膽男に驚きましたが、どうしても膽に落ちぬのは、太兵衛が何故わざ／＼裸になつたか、そして尻から穴の中に這つて行つたか、といふ事でした。本人の太兵衛に尋ねても「いや大してわけはないがその方が便利と思つたので——」と多くを語りません。

何時しか噂は殿様の耳に入りました。殿様も亦何度首を傾けて見ても、太兵衛がやつたその奇妙な行動の譯が判りません。で一つ呼んで尋ねて見様といふ事になりました。すると側に居た武藏が、「いやお待ちなさい。呼んで尋ねて見るまでもないこと、それ位のことがお解りなくては、太兵衛から笑はれませう。」

とニコ／＼して止めました。

「何故だ。殿様は問返します。」太兵衛が裸になつたのは、敵に油断をさせる爲と、組打になつた時便利な爲で御座います。そして尻から這ひこんだのも矢張り敵を油断させる爲で、又斬られても尻だけなら大したこともないから、といふ考もあつたのでせう。

敵はもう必死の覚悟です。尋常では、たとひ腕前が互角でも、こちらに七分の弱みがあります。それで太兵衛が奇計を用ひて尻からはひこんだもので、敵は飽氣にとられてしまつたのです。それはさうでせう、何しろ殺氣立つた血みどろの戦の最中に、何も武器を持たぬ裸の男が輝一つで尻から穴

へは入つて来るのですから。で敵が、こちらの氣持を計ひかねてまごついた、その心の亂れに乗じたのです。

すべて勝負といふものは、力だけで定まるものでなくして、度胸の大きさ小ささで定まるものです。十年前私が佐々木嚴柳を倒したのも、劍の速さ遅さよりも、もつと大切なことがその前にあつたのです。即ち嚴柳は、私のゆくのが遅かつた爲にいら／＼してゐた。それが第一の敵の敗けです。その次に嚴柳敗けた、と私が聲をかけたら、嚴柳は蒼くなつて怒つた。あの心の亂れが第二の敵の敗けだつたのです。そして劍の勝負は第三の勝負でした。

これもあれも同じ事で、太兵衛はちやうど私の劍法の秘訣を、何時の間にか會得してゐるので御座います。腕だけ出来ても、心が出来なければ、この劍法は死んだも同然、太兵衛は腕こそさして出来ませんが心が出来てゐるから、自分の倍も三倍も強い敵を、易々と敗かせる事が出来ました。

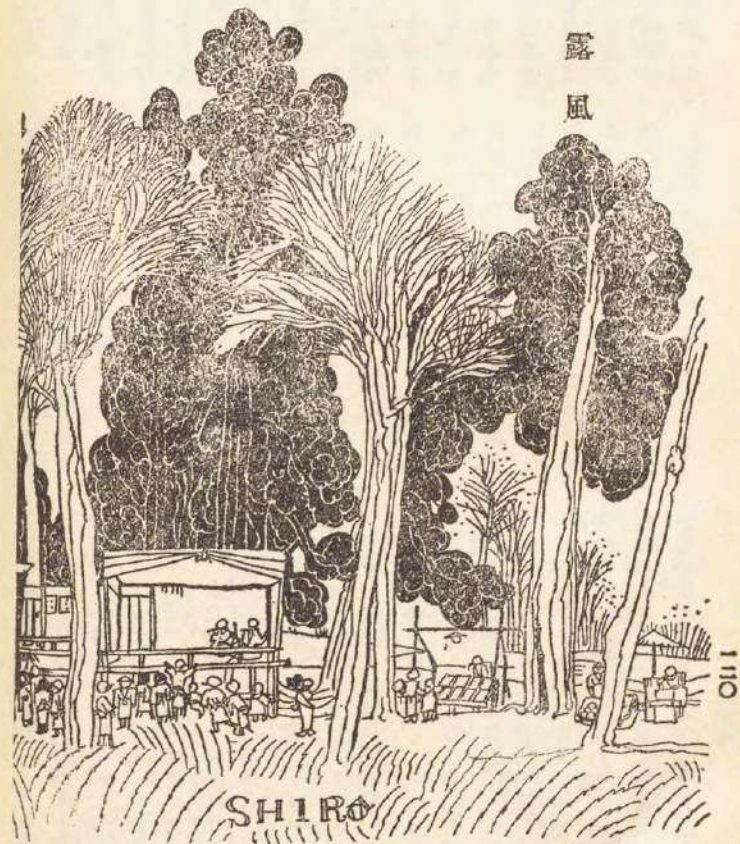
都甲太兵衛こそ實に肥後隨一の劍客で御座いますね。皆は成程とうなづきました。後で太兵衛が武藏に向つて、「先生、私にもどうぞ二刀流を教へて下さい」といつた時、武藏は笑つて「いや御身は生れ乍らの劍術使ひだよ。其上稽古しなくてもいい」と云ひました。(をはり)

秋の祭

三木露風

秋の祭の
太鼓の囃子
森のお宮に
きこえます

うれた粟の穂
雀がとんで
畑の上に
雲が浮く



夜は ちらちら
あかりが ついて
田圃や原で
蟲が鳴く

ぼうやは せなで
風車持ち
母に負はれて
かへります



川上四郎登



蛙かへるの
花嫁はなよめ
(日本)

むかし、ある村にお金持の百
姓がゐました。この家には、一
平、二平、三平といふ三人の息子
がいました。父親は早く死に
ましたので、母親の手一つで育てられ
ました。

しかし、今では三人とも立派な
若者になつてゐて、めいめいお嫁
さんともつて家を持つてゐるこ
ろ

になつてゐました。
 「そこで、ある日のこと、母親は三人の息子^{さん}を呼んで、
 「お前さん^{さん}達は、もう立派な若者^{わかもの}です。お嫁さん^{よめ}をもらつて、家を持つていゝ年ころです。ですが、私を安心させてくれるやうなお嫁さん^{よめ}をみつめてくれないと困ります。君は、お前さん^{さん}達のお嫁になる人が、立派な女かどうかを試すために、こゝに旗を持つて来たから、めい、これを持つて行つてお嫁になる娘がきまつたら、布を

繼ちてごらんさない。一番立派
 に織つた娘のお嫁に探し者に、
 この家の財産をみんな上げるか
 ら。といひました。
 三人の息子は大喜びで、すぐ
 さまお嫁を探しに出かけました。

二
 一平と三平の二人には、お嫁に
 ならうといふ娘がききに目付か
 りました。二人は、世間から受け
 つた麻を出して、娘に布を織つて
 らひました。
 しかし、一番年下の三平には、

どうしてもお嫁さんか目付かりませんでした。その調子で、三平はごく武者で、村の娘たちと一度だつて口をきいた事がないのですから。

三平は村中を歩き廻りました。そして、年ごろの娘にあふたびに「私のお嫁になつて下さい。さうして、この座を譲つて下さい。」といひましたが、娘たちは皆笑つて行つてしまひました。

三平はがっかりして、隣村へ行つて見ました。しかし、尚更めつ

「何れもまたそんなに困つた隙をしてゐるのです。」「蛙こゝろがきいたので三平べいしやうがわけを語つた。
「そんなら私をお嫁さんよめにしたらどうです。」といふので、三平は妙な事をいふのだと思ひながら、
「蛙がどうして人間のお嫁さんになれるのです。」とききました。
「あなは、もう一度私に用を頼みたいと思ふのですか、思はないのですか。」

お駕籠に乗りました。
お駕籠はどん／＼と村の街道を行きました。すると、向うから三人の小伏が来ました。二番目の小伏は暗黒でした。二番目の小伏は暗黒でした。そして、三番目の小伏は暗黒でした。

受者の山伏は急に口がきけるやうになりました。脱者の山伏は足が立つてしまひました。盲目の山伏は、目も開いてしまひました。
三人の山伏は大層喜んで、『これはみんな、蛙のお蔭だ。何ぞお禮をしてやらう』といひました。

この山伏たちは、丁度山人のよこへ行つて、仙人の術を習つた。

三平曰、山伏は、背負つてゐた箱の中にも、金を出して、それに向つて何か喝へますと、袋の中が一ぱいお金になつてしまひました。そして、それを三平にくれました。

三平と花嫁とは、山伏に幾度も幾度もお禮をいって、二人の若者にお駕籠をかつがせながら、母親の家へ急がせました。

母親は、三平の花嫁さんを見て

「頼みたいのは頼みたいのです」と、三平がいふと、蛙はずぐに池の中へ入つてしまひました。

すると間もなく、池の中から小きなうぐいすお鯉が現れました。三平の背に、それながついて、二平のとこまでやつて來たのです。

「お私も乗りますからあなたもお乗りなさい。」と、例の蛙が出て來ていひました。

三平は何かさつぱり分らないながらも、いはれる通り小きなうぐいす

て来たところでした。
そこで、最初の山伏は、蛙の頭
の上へ珠歌をのせて、三過つて山
で廻しました。すると、二正徳帝
が、蛙をふたつとるわと、
蛙は忽ち二人の若者に變つてと
まふし、お駕籠の上の蛙は、きど
いなく、娘に變つて了りました。
二番目の山伏は、金剛杖をもつ
て小さな「お駕籠を七廻たいき
ました。すると小さな「お駕籠
は立派な大きなお駕籠に變つ
て了りました。

いよいよ驚きました。『三平は仕合せだ。家の跡取りだ。』といつて、母親は夢中でした。

三平はとうとう大きなお百姓の跡取りになりました。そして美しい花嫁と一しよに大層仕合せに暮しました。

(なはり)

一二六

ことであらう。この白い象のお母さんは、大へん年をとつてゐて、おまけに、言だつたのです。ですから、息子^{おとこ}の白い象は、いつも、森の中にある、おいしい木の實^みをあつめて来ては、お母さんに食べさせてかりました。けれども、それも、まい日あがるわけには行きませんでした。仲間^{とも}の象たちがさき

A black and white line drawing of two elephants. The elephant on the left is facing forward, with its trunk curled. The elephant on the right is facing right, with its trunk extended towards a large pile of food on the ground. The food pile consists of various items, including what looks like bananas and other fruits. The background is simple, with some vertical lines suggesting a fence or enclosure.

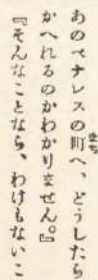
はしてびひいて來たのです。
『おや、』と白い象はいひました。
人間の聲です。きつと何かに災難に會つてゐるにちがひありません行つて助けやりませう。』
『いふや、放つておきなさい。』とお母さんは、きつといひました。

「おふ、やさしい奴さん。これだけば、あなたの力でもだめです。わたしは七日七晩といふもの人ひとり仕んでゐないこの森に迷子になつてゐるのです。自分の家がある

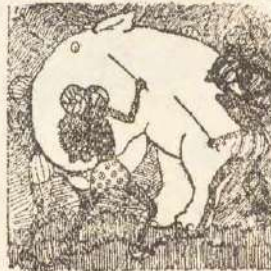
と白い象は木橋を下へ、おろして
いびました。いゝえ、お禮などい
ふには及びません。あなたをお助
けできたと思へば、それで十分で
す。

象の代りなつとめる、すてきな象
を見とめてまわりました。』
木樵は熱心にさういつて、くわ
しく白い象のことを物語つたので
した。すると王さまはかういひま

象の代りなつとめる、すてきな象
な見とどけてまわりました。』
木樵は熱心にさういつて、くわ
しく白い象のことを物語つたので
した。すると王さまはかういひま



した。
 何そんな立派な象が手に入れば、
 どんなに嬉しいかしれない。まつ



一方、お母さんの象は、息子の
かへるのを、待つておりましたと
ころが夜になつても、まだかへつ
て来ませんでした。そこで、白い
象はきつと捕まつてしまつたにち
がひない。さう思つて、嘆いてな
りました。

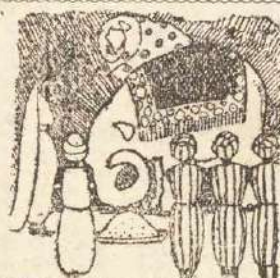
『お母さん、息子がなくなつては
どうしたらいいのでせう。』
誰かおいしい木の實を持つて来て
くれるのでせう。水のみに、運
び来て行つてくれるのでせう。
私はたつた一人、さびしくお

腹をすかして、喉をかはかして
死んでしまはなくてはなりません
こんなことなら、昔のころを放
れなかつた方がどんなによかつた
かしれない。

お母さんの象はさう言つて悲し
んでをりました。けれどもあの白
い象は、ベナレスへ曳かれて行く
途中、もつと／＼悲しんでゐたの
です。

『可哀さうはお母さん。私がゐな
いでは、お母さんに何ができるだ
らう。お母さんのいふことをきい
て、人間を助けさへしなかつたら
十分お世話をすることができたの
だ。だがかうなつては、お母さん
はそれは／＼／＼じめに死んで行か
なくてはならない。』

白い象はさう思つて大へん悲し
んで、沈みきつておりました。そ
れでも王さまは、この象を見ると
すつかり氣に入つてしまつたので
す。そして、これから後は、この



立派な白い象でなければ、決して
乗らないと言つたのです。
あの木樵と象使ひたちは、たく
さんの夜更けをひきました。また
白い象は立派な飾りのついてゐる
家へ入れられました。

それから二三日たつと、王さま
は白い象に乗つて町を歩いて
みたいと思ひました。そして、さ
つそく白い象の支度をするやうに
なりました。

『お母さん、息子がなくなつては
どうしたらいいのでせう。』
誰かおいしい木の實を持つて来て
くれるのでせう。水のみに、運
び来て行つてくれるのでせう。
私はたつた一人、さびしくお

ました。さうしてふた／＼びびり
てゐると、お母さん、有難いことに、
お母さんはまだ生きてゐたので
す。

『お母さん、息子がなくなつては
どうしたらいいのでせう。』
誰かおいしい木の實を持つて来て
くれるのでせう。水のみに、運
び来て行つてくれるのでせう。
私はたつた一人、さびしくお

何でしてやう。

『お母さん、息子がなくなつては
どうしたらいいのでせう。』
誰かおいしい木の實を持つて来て
くれるのでせう。水のみに、運
び来て行つてくれるのでせう。
私はたつた一人、さびしくお



さうして、王さまは正しい情け
深い方でした。そこで、ご自分で
は白い象がほしくて／＼たまりま
せんでしたけれども、この話を

きくと、さつそく、かういひまし
た。

『お母さん、息子がなくなつては
どうしたらいいのでせう。』
誰かおいしい木の實を持つて来て
くれるのでせう。水のみに、運
び来て行つてくれるのでせう。
私はたつた一人、さびしくお

ました。さうしてふた／＼びびり
てゐると、お母さん、有難いことに、
お母さんはまだ生きてゐたので
す。

『お母さん、息子がなくなつては
どうしたらいいのでせう。』
誰かおいしい木の實を持つて来て
くれるのでせう。水のみに、運
び来て行つてくれるのでせう。
私はたつた一人、さびしくお

ました。さうしてふた／＼びびり
てゐると、お母さん、有難いことに、
お母さんはまだ生きてゐたので
す。

『お母さん、息子がなくなつては
どうしたらいいのでせう。』
誰かおいしい木の實を持つて来て
くれるのでせう。水のみに、運
び来て行つてくれるのでせう。
私はたつた一人、さびしくお

編輯部より

『金の星』に「世界の面白い話を
集めたところ、愛読者の方々から
大層な歓迎を受けました。』
そして、この欄をもつと増すや
うにといふ御希望が海山に來てな
りますので、次號からつとこの
欄の頁を増すことにいたしました。
この頁は、世界の面白い童話
を採出して来て、それを皆さんに
御紹介するのが役目でありまして、
それと同時に、此の欄は、幼い人
達がお父さんやお母さんや、兄さ
ん姉さん達から昔話を聞く時の
やうな、親しみの深いものにした
いといふ希望も持つてゐます。
ます／＼この欄を面白くいたし
ますから、どうぞ、御愛読をねが
ひます。



通信

童話の選後に

齋藤 佐次郎

○なかく、源山に集りました。目についた作を挙げますと、「あひの兄」(大島知恵子)「二郎さん」(山本静子)「かすみ草」(阿部和子)「火取り虫」(津田恒)「蝙蝠と光夫の夢」(川口地榮)「二郎が来た」(茶木七郎)「兵隊さん」(宮内清二)「ボンチ」(柳喜美子)「入相の鐘」(新倉しげる)「楊守りの仙吉」(山本静子)「耳をきく」(松本雄一)「各口長樹」(夜間く門)「早田松夫」(大平

登さん(一ノ瀬信夫)以上。
○中で、茶木七郎さんの「二郎が来た」、大島知恵子さんの「あひの兄」、山本静子さんの「二郎さん」、阿部和子さんの「かすみ草」など面白かったです。
○二郎が来たは先頃新聞で報道された久里濱の鯨の話ですが、作者の茶木さんは久里濱に近い人だけに、実際にその光景に接し一つの報道でなく、一つの童話として面白く取扱つてなりました。先づ最初の一匹を捕へる爲めに村人達が滑稽な騒ぎをやる有様を寫したのも面白く讀みましたが、翌日になつて、友達七匹の鯨が居なくなつた友達を助けようとして、七匹とも海淵に乗り上げてしまひ、命を落すあたり鯨の涙ぐましい友情を深く感じさせられます。茶木さんの書き方は、割合のんきですが、題材の良いために非常な糧をしてゐます。
○大島知恵子さんの作は、毎號光つてゐますが、今度の「あひの兄」も、出来です。あひの兄の水谷さんの面影が申分なく現されてゐると思ひます。
○山本静子さんの「二郎さん」といふ作も、大島さんの作に見るやうなしみみりとした味のある作で、少年であり少女である時代に人が感じる人生のはかなさや、追ひつに少年少女の無邪氣な時代の過ぎて行くさびしさなどが感じられました。
○子供篇としては、いつも阿部和子さんの

長篇前號までのあらすじ

大石 主税

元禄十四年三月十四日、浅野内匠頭は、吉良上野介を傷つけた爲め、江戸の御宿下、田村右京太夫の邸で切腹をさせられました。そして、お家はたやされて了ひました。内蔵助は、主税をはじめ、同志の者達とひそかに「復讐」のはかりごとをなすめした。
十二月十四日、討入の日がやつて来ました。主税は、西組の大將として、吉良の邸の裏門に向ひました。そして内蔵助の東組と力を合はせて、刃向ふ敵を殲滅せず、やつつけて了ひ、遂に、目ざす敵、上野介の首をあげました。一同は打ち揃つて高輪の泉岳寺へ引きあげ、内匠頭の墓前に、敵の首を供へました。一同の眼には涙が光つてゐました。それは、いづれも親を捨て、妻子を捨て、望を捨て得た「復讐」の涙でした。――そして、一同は、心算かに、公儀からの御沙汰を待つてゐました。

頼光の四天王

相模入川の住人平吉秀は、鎌倉に下つてゐた源氏の大將頼光が悪人ばらのために御されようとした時、一時はかくまつて免れようとしたが、後には心変わりして、悪病人の頼光を奥に乗せて京都に参上してました。頼光の近臣、卜部六郎季武、片瀬小次郎左衛門伊豆の國府三島宿で、季武が放浪時代の朋輩であつた壯士たちを語つて、吉秀を殺し、頼光を無事に救ひ出しました。この時、頼光を導つて信州碓氷の山中から出て来た、時の荒太郎といふ大いなる若者や、秩父、縣などといふ鎌倉の武士等が偶然一緒にになり大に奮闘したのでした。

金の星誌友募集

金の星の誌友を募集いたします。誌友には色々の特典や便宜がありますからどうか振つて御加入下さい。ハガキで本社へお申し込み次第、誌友規則書をお送り致します。

「金の星社月報」を

差上げます。

このたびは金の星社の月報を發行いたします。御希望の方はお申込み下さい。さつそく差上げます。

編輯室より

△今日で漸く十月號の編輯を終りました。毎月のことながら、一冊の雑誌が隔から隔までまとまるのはなかなかの努力が入ります。先づやつと今日でホッとすることが出

来たわけです。
△まづしてゐる内にいつか夏も過ぎやうとしてゐます。朝夕、ひひやりとした風が吹き、虫が鳴くにつけても、もう夏もはじりか! とさびしい感じがします。今年も編輯、出版、それにつらなる仕事に追はれ、夏も夏と感ぜず、あはたしく送つてしまひました。

△出版界がこれまでにない不景氣時代とはいへ、「金の星」だけは、皆さんの御後援によつて、益々評判よく讀者を増して行くことと、まことに有難いことであります。今後、まづ「發展」したくつてゐます。
△十月號も、出来るだけの努力をこころみて見ましたが、次月號にはもっと目新しい面白い雑誌を作る秘策です。

△岩井信實さんの「或る日の池」を今月號に掲げましたが、この作はもつと早くに掲載される筈のところ、誌面の都合上遅れてなりました。ところが、突然昨日岩井さん御折去の報に接し驚かされました。岩井さんは皆さん御存知の通り、童話作家として源山の著述もあり、京都になられた児童藝術の爲めに大層努力してなられた方でありました。御遺品の九千さんは可愛い童話童話を作られ「つれお馬」の外にも二三の本が出来てゐる事も皆さん御存知のはずです。まことに残念なことでありました。(八月廿五日齋藤生)

童心單純小考

林 宵 雨

童謡の元は童心、究極も童心、童謡は童心より構成され、童心は童謡中に於て躍動する。物を哀れむ心持、物を不思議とする心持、物を受する心持、物を羨しとする心持。皆童謡中に活動する。即ち童心として躍動する。

童謡は單純であらねばならぬ。單純でないものを童謡と云ふ事は出来ない。而しながら長いから複雑、短いから單純と云ふ事は出来ない。長いもの、中にも單純なるものも多く、短いものにも兒々の生活よりかけ離れたものもある。單純必ずしも單純でない。單純と單純は類似し兩立するも、獨立してゐない。幼穉は支流にして、單純は本流とも云ふ事は出来ない。兩者並行して流れるもので、幼穉にして單純、單純にして幼穉とも言はれる譯である。無様に調子にあてはめんとするもの、徒らに美辭麗句をつらねたるもの、如戲的に

理くつづく童謡を片づけるもの、兒童の存在を無視したるものは、單純否童謡と稱する事は出来ない。童謡即ち童心、即ち單純と稱するも差支へなからう。

童謡は單純でありたい。涙ぐましいやうな單純さの籠つた作品こそ、眞に兒童性、童心性に打たれる純心なる童謡であらねばならぬ。

童謡と教育について

後 藤 檜 根

一 童謡と教育の關係的考察

懐かしいものは故郷の土である。土にしみ入る古風な語である。聲である。我々は故郷の土を思ひ、幼き日の子守唄を靜かに呼び起す時、あらゆる現實の醜い姿を忘れて、生れながらの純真な心にかへる。それは動物學上の黒い土でなくとも、自然の中に匂ふ土であつてもいいのだ。大自然に向ひ我々の實體が私言く聲——無聲の子守唄でもあるのだ。

その境地にある時、我々に詩が生れる。形式の上に表現すると否とに關せず、少な

童心藝術

藤山於菟路

こゝ數年來、童心藝術（こゝでは詩藝を指す）の盛衰い發展に伴ひ「童謡」に對して、今日「童謡」が叫ばれ、更に「童心句」の言葉が提唱されてゐる。

「童謡」は童心童謡の歌謡である。「童謡」は唄ふべきものであつて「童詩」は靜かに讀み感ぜざるものである。

これはほんの、大家北原白秋先生が言つてゐられる一端に過ぎないのであるが、此の單なる三行句の言葉の中に、異つて立つた「童謡」「童詩」が象徴されてゐる。「童謡」「童詩」は斯くして生れたものである。

再び、童心童謡の淵源とした表現法として、大家野口雨情先生によつて「童心句」が提唱され、白熱的人氣を持續して來つたことは、童心藝術に關係してゐる人々に近來稀な大きな喜びであらう。——でなければならぬのである。

向日姿を背にして寫眞撮りました。水たまりにお空がうつて深そうだ。

皆、童心童謡の天真らんまんなる美しい表現句である。日常生活に童心が失はれてゐて、童心を模造した「童謡」「童詩」「童心句」から、眞の美しい天真爛漫なるまゝの境地を語つたものがあるだらうか。

興をうながしたではないか。

我々は國民精神の涵養に當るに際し、この點に注意したい。

再び言ふ。懐かしいものは故郷の土の香である。懐想こそ、とりもなほさず愛國の基、人間愛の源ではないか。

國民精神の發達は那邊にあるや？ 故て再言を要しないことであらう。

民族の聲、聲、叫びそれが民衆の聲である。譯である。若きものに戀の唄、老いたるものに思ひ出の唄、幼きものに、童謡、等、各その唄ふ者の觀照の如何により形式は異れ、その民衆の語こそ、やがて吾々民族の子守唄となり、より尊い人間の心を育む民衆詩であらう。

古代に於てこれらの民衆を「童謡」と稱しこれをもつて、世の總ての事件の豫言なりとしたことも、そのよつて來る所以を我々は、此處に置きたい。決して偶然の風説でも、迷信でもないと信ずる。

そこに民衆詩の致さがあり難い、あるものが我々を捕へるのである。

童謡の眞の意義を忘れ過ぎてゐた。吾知らなかつたのだ。それ故、遂には童謡の本質を知るに迷ひ、從つて教育上に大なる「？」を生じたのである。彼らは、如何なるものでも、童謡として、新聞雜誌に發表されたものは、すべて、これを童謡としてとり入れた。これは恐しい事である。これ程危險な事はない。

これは詩人の態度も大いに惡かつたと思ふ。遂に岡田文相の童謡禁止に迄至り、甚だ憂ふべき傾向になつたのである。

今や童謡は漸く忘れられんとし、子供は舊來の、童謡を唄ふにも、それを得るべき樂もなく、又、小學唱歌にも、心は向かず何と言ふことぞ、彼らは童謡の代りに、俗謡を唄ふではないか。我々はさうした事々をたゞ／＼茶間に目撃して、落涙を禁じ得ない。

教育者にも少しの批判力な與へたい。作者にも少し、教育的な方面を考へて頂きたい。これは世の童謡に志ある者の等しく望む所と思ふ。

この時に當り、近時、金の星、赤い鳥、金の船等に於て、各作家が、眞實な態度で童謡の爲、盡力されてゐる事は抑か我々の心を強くし、童謡教育にとつて喜ばしい傾向と思ふ。

益々御座り下されば、以前以上の價值ある童謡教育の出現が見られる事と思ふ。

新しく出た本

○児童動物學(昆蟲の部)

(松平道夫著、池上浩賢編)

金蘭社の『少年少女科學大系』は、巻を追ふに従つて、益々熱狂的歡迎を受けてゐる。第六巻は、動物學の内、少年少女諸君が是非とも知らねばならぬ、昆蟲のお話です。皆さんは野に山に、蟻や蝶などを捕へられますが、それがたゞ無益の殺生であつてはなりません。昆蟲類の習性や生活を観察し、それがいかに人生を暗示してゐるかと云ふ事を知らねばなりません。又そこに限らない興味があつてゐるのです。さう云ふ意味で、是非ともこの本の御一讀をお勧め致します。四六判二〇〇頁、挿畫寫真判多數入り、定價壹圓 東京市外東橋上駒込二八、金蘭社發行)

○日本偉人物語(遠藤早染著)

西洋にばかり偉人があつてと思つてはいけません。日本にも、世界に誇るべき多くの偉人があつてゐる。この本には、日本偉人の内、明治天皇を始めとして、聖徳太子、日蓮聖人、豊臣秀吉、近松門左衛門、徳川齊昭、西郷隆盛、吉田松陰の八人を選んで、少年少女諸君が讀んで面白いうやうに書いてあります。この偉人達の言行が、どれだけ

童話掲載外佳作

鈴木 和東(東京) 石川 雪花(神奈川)
増田 梅吉(東京) 幹 葉津子(神奈川)
岩井 重久(奈良) 山本 恒堂(神奈川)
小川 秀雄(神奈川) 石田福壽郎(神奈川)
池田 又雄(神奈川) 梶田雄太郎(秋田)
宮内 清二(東京) 角倉 正晴(東京)
山下 康明(東京) 小澤嘉美江(東京)
小池 秀雄(東京) 磯貝金之助(東京)
朝倉 卯東(東京) 深澤 武男(山梨)
内藤 とし子(山梨) 田中 喜一(東京)
醍醐 正明(東京) 入江 一雄(東京)
稲垣 秀邦(東京) 戸籍 正(青森)
板谷 令子(東京) 赤羽宗四郎(東京)
狩野 忠信(東京) 石坂 浩一(長野)
鈴木 忠造(山梨) 水 上 安義(山梨)
小林 金次郎(福島) 柴本 七郎(神奈川)

童話掲載外佳作

貝原 昌明(東京) 川野 宣(大分)
池田 又雄(神奈川) 高木 三吉(熊本)
中野 賢一(愛知) 小野 牛三(福島)
伊藤 進(三重) 張 徳(愛知)
藤森 進(静岡) 野村 令樹(愛知)
中川 秀雄(東京) 細谷 林一(神奈川)
石田福壽郎(神奈川) 細松二那(東京)
森田 萬喜大(大阪) 伊藤 喜平(東京)
多島 次郎(秋田) 北本 綾子(宮城)

童話掲載外佳作

屋島とし子(東京) 宮川幸三郎(京都)
松本 秀雄(兵庫) 渡谷 まさ(茨城)
世田谷龍三(長野) 一戸平太郎(青森)
鈴木 正志(和歌山) 内藤 正巳(岡山)
多賀谷利一(東京) 西川長之助(大阪)
小池 桃村(長野) 宗像 康次(福岡)

童話掲載外佳作

梶田雄太郎(秋田) 土屋 静文(岐阜)
石倉 正雄(山梨) 弘 以智(東京)
篠崎 雷聲(東京) 逸見 小鳩(不明)
阪野 潤(大阪) 原田小太郎(神奈川)
山口 一夫(秋田) 柴本 七郎(神奈川)
伊藤きよし(富山) 後藤 英二(岐阜)
土浦あけみ(北海道) 酒井 則(兵庫)
内田みづ枝(茨城) 土屋 武(福島)
小林 秀雄(新潟) 河合英太郎(東京)
松本 文大(大阪) 松枝 二期(愛知)
橋本 暮村(群馬) 西浦 孝一(京都)
佐藤 秀夫(東京) 竹里 士雄(埼玉)
大島知恵子(兵庫) 西野 光兒(熊本)
千葉 仔期(東京) 宮本 てる(熊本)
小林林之助(福岡) 赤羽 秀雄(東京)
河野 牧草(朝鮮) 赤羽 水吉(東京)
阪口 功和(歌山) 許 永 尚(朝鮮)
柴野 民三(群馬) 中野 文榮(京都)
高岡ちひろ(東京) 中野 由文(京都)
藤 葉(東京) 朝比奈 豊兵衛(京都)

金の星社
出版目録を
お送りいたします

金の星社の出版目録の御入用の方は、
はかまで御申込下さい。早速お送り
申上げます。

小林 直次(愛知) 下矢 愛雄(北海道)
三岡 透利(東京) 宮井 彌能(埼玉)
佐藤 秀夫(東京) 竹里 士雄(埼玉)
橋本 暮村(群馬) 刀彌まさた(石川)
山田三津夫(静岡) 森川 健(東京)
細谷 林一(神奈川) 渡邊 正雄(福島)
古川 安房(岩手) 松尾 文展(京都)
畔上 忠司(長野) 中山 喜助(埼玉)
武田 政史(愛知) 内田みづ枝(茨城)

田島 シズ子(埼玉) 池田 又雄(神奈川)
林 賢一郎(兵庫) 原 千代子(東京)
桑名伊一(兵庫) 武内 正千(大分)
渡谷 正彦(神奈川) 中里 繁行(神奈川)
石田福壽郎(神奈川) 板谷 令子(東京)
渡邊 健吉(山形) 新渡 正雄(福島)
伊藤 君江(岐阜) 新田 勝(福島)
矢野 壽子(栃木) 星 光子(栃木)
稲垣 秀邦(東京) 伊藤 正之(三重)
小林 崇文(香川) 伊藤 鈴木(三重)
野田代志夫(静岡) 鈴木 晋五郎(千葉)
岸 金平(埼玉) 小梅 良吉(埼玉)
鈴木 秀雄(静岡) 佐々木忠一(埼玉)
宮本のり美(熊本) 鎌田 々々(埼玉)
山本 力朝(熊本) 小山とし子(埼玉)
萩原 ふた(埼玉) 平林 勝夫(東京)
阿瀬見ハナ(埼玉) 聖 逸(東京)
三上 光義(青森) 岸 秀雄(埼玉)
和氣伊勢雄(東京) 岸 秀雄(埼玉)
小野里不二男(栃木) 早川 松江(東京)

新誌友名鑑

銀松 竹夫(大阪) 朝比奈 豊(兵庫)
吉田 芳雄(岡山) 小川 達三(東京)
伊藤 大吉(朝鮮) 林 幸三(秋田)
松本みどり(東京) 小野重兵衛(盛岡)
伊藤多喜雄(東京) 伊藤守之助(静岡)
加宮龍太郎(埼玉) (以下次號)

○アイサー王騎士物語(金の星)

(大木雄三譯、寺内萬治郎監修)
『騎士』のお話として、これくらゐ男壯な、
幽幻な、真切なお話はありません。アイサ
ー王をめぐる圓卓の騎士、百五十人の生活
が、ながら眼のあたりに見るやうに展開さ
れます。イギリスの武士氣質と云ふものが
どんなものであるか、日本の武士道と比較
して見ると、云ふに云はれぬ面白味があ
ります。(四六判箱入美本二五〇頁、挿畫多
数入り、定價壹圓貳拾錢 金の星社發行)

○少年探險家物語(金の星社版)

世界に名高い探險家の旅行記を集めた
のが本書です。探險家達の機智、アフリカ
の内地を踏破したリビンガストンの偉記など
は、餘に皆さんに興味深く讀まれると思ひま
す。加ふに装幀挿畫の美しき、この本
に一段と光輝を添へました。(四六判箱入美
本二五〇頁、挿畫三色版他十五枚、定價壹
圓貳拾錢 本邦勤王町 金の星社發行)



讀者だより

▼もう暑さも峠を越したと見え、朝晩は快い涼氣を覚えるやうになりましたが、諸先生はお達者ですか。毎も無言で失禮致しましたが、今度は歸友に加へて頂きまして、一寸お挨拶申し上げます。又遠慮もなく、この拙い投書を致させて頂きましたどうか宜しく。もう中學の休暇も残り少なくなりまして、始業までには投書の機努力しませう。次第に人となり行く私の心も、本誌によつて幼い魂、餘りに果敢なく通つた童心時代が、みかへる機です。時は秋、文にいたふシューズン、名もなつかしい金の星によつて、益々増進しやうと存じます。では、どうぞよろしく御指導下さい。

(兵庫縣西宮市 朝比奈豊)

▼照り輝いた太陽の下に、いつしか秋風が吹き初めました。御誌の毎號の御發展と編輯部の諸先生の御奮闘ぶりに、厚く萬喜し、且お祝詞申上げる次第でございます。野口先生にもない旅路を御忙しきお體に在しまして、さぞかしおつかれのこと、お推察申し上げます。昭和の代に至り、童話界に一大改革を興へんとする、編輯部の先生方の熱力の偉大なる奮闘の跡に、ある所賢は、純真な童話道に立つて大いに擁護し、且又抱負を全ふせねばならぬと存じます。我等の秋、十月の空の下に於て健全なお體を保ち童話道にお奮闘の程を祈ります。『コスモス』の咲く代々木の中に、(弘一)

▼秋風が吹くやうな影に僕は驚愕して讀者通信を書いてみました。僕のそばには、萬年筆と原稿紙と金の星八月號が共に隣り合っています。どこかで蟬が鳴いてゐます。蟬も木の高い所に鳴いてゐます。涼しい微風が、どこからともなく流れて来ます。金の星の真がバラ／＼とめくれました。八月號を讀み終つた僕は、讀後の感を書かずに終つてしまいます。岡本錦一先生の繪は

大變よく出来てゐます。少年と夏を發行してあります。少年と夏と云ふ所を表はしてゐます。内容は先月に次ぐ粒揃ひです。加藤先生の童話は始めてですが、面白く讀みました。通俗小説の大家故す／＼書けてゐます。小島先生の『二王國争ひ』は八月號中の好きな一つです。水谷先生の『美しき菓子箱』可愛想な話ですね。異國に彷徨へる若い日本人が、千代子の爲に菓子箱を盗んで、巡査に引かれて行くところは涙をさそひます。最後に『少年輕業師』はやつぱり悲しく終りました。僕の好きな以上四つです。では皆様お夏大切に。――先月の僕の讀者通信は一月月早く出てすみません。八月中旬に『なでしこ』に出ます。交通は下記の番地に願ひます。(東京市外大久保西大久保四七九天野方 稲垣秀坊)

▼この欄に顔出しするのは始めてです。以後私は同人誌への露出、關係を止められてしまひました。反省が、餘りに早くはん難なからでありました。寂しい肯定です。で雑誌を讀いても御禮差出さぬかも知れませぬが、そこを説として私の決意を亂さないで下さい。寄

一 田畑方 藤沼時郎

▼しばらく金の星への投稿を休んでゐましたが、今月より大いに讀み出して行きます。九月號「業」の裏に、岡本先生の表紙うれしく思ひます。岩井九子さんの短編童話、なつかしく讀みました。九子さんとは童心の溢れてゐる可愛さ、九つのお嬢ちゃん。そして童話童話のお父さんお母さんを持たれた九子さん。本當にうらやましいです。その後お父さん信實氏の御病氣はどうです。金の星の研究欄毎月好い資料を得てゐます。野口先生に新聞投稿諸氏に厚く感謝いたします。渡さん阪野さん四阿さん松松さん日高さん川島さん、御健康で何よりです。渡さんの雜誌まだ出ないのですか(京都 藤山於菟路)

▼記者様、貴署の折からお便りも御座いませんか。私はもう女學校の一年生ですが、とは言つて『金の星』を讀んで居ります。四年になつても、五年になつても、卒業しても一生愛する金の星とは別れぬ覺悟です。どうぞ御親切に私を可愛がつて下さいませ。もう女學校の一年生のくせに――なんてぞん／＼横濱市本牧町二五〇番地 土井貞子)

▼研究欄が益々盛になつて行く事は非常に嬉しい事だと思ひます。淡兄の雜文、尤もと拜見いたします。兄の紫陽花も素晴らしい作品だと思ひます。兄の童話小集が京都の藝術社から發行されるさうです。名方兄、近頃御作を拜見いたしませんか。仕事がいそがしいのですか。先日岐阜へ鶴岡見物に友達と行きました。杜先生の御見舞に行かうかしらと思ひました。が突然です。つれも有りませんでしたから中止しました。金入を落したのですが、岐阜藩が拾得通知を下さつたので、又行かばならぬかもしれませぬ。目下私は「砂時計」

を發行してあります。記者先生、誌友諸兄給仕君では左様なら(大阪市天王寺區東平野町三三六 飯松竹夫)

▼「おん」のほどうだらう。『こゝ書いたらいいだらうか』魚を賣りに出る若者の口から、銀をかつて青年から、色々實實――そうしてほんとうの生活から生れた、面白い色々の形が出て来ました。本誌で今月號研究欄で、渡橋や石川棟干葉様の色々々、御研究を導く拜見致しました。『自由』がありたい。私達「灯」のは自由でありすぎないかと、あやぶまれる位です。その自由な内から幾つかを誌上にのせるので若しんで居ます。然し、演説の人達が益々居て居ます。いつか面白い流行歌を口ずさんで居た者が、自然に目を瞞じ、そうして自分の童話を歌はうとして居ます。どうぞ諸兄の御投稿を――

▼私達が年來の思ひで、故郷の濱邊で、騰駕判別の際、やがな雑誌「灯」を出したの、暑い七月の中頃でした。八月の夏休にかけてうんと馬力をかけてみましたが、第二號もあまり香しい成績ではありませんでした。然し濱邊の人達から童話の叫びが、盛んに聞える様になりました。そして三號の童話の買はとも多くて困る程で

を發行してあります。記者先生、誌友諸兄給仕君では左様なら(大阪市天王寺區東平野町三三六 飯松竹夫)

を發行してあります。記者先生、誌友諸兄給仕君では左様なら(大阪市天王寺區東平野町三三六 飯松竹夫)

讀後感募集

金の星社出版の書籍に就いて、皆さんの讀後感を募集致します。誌上に掲載の分には、謝禮を呈します。



金の星社 十月號

出版だより

出版部より

▽前號にも記しましたやうに、八月は一般出版界のお休みの月でありましたが、それでも、本社の「信玄と謙信(川中島の戦い)」と「アーサー王騎士物語」と「少年探検家物語」の三冊をつぎつぎと出版しましたので、むしろ世間からは驚かされた程でありました。

▽今や、東都の出版界は、未曾有の不景氣に出遇ひ、全く鳴りを静めてあります。一國本の出版社は今や破産者が次々〳〵に現れやうとしてゐる有様。實におそろべき時代となつてあります。

▽幸にして、本社の出版物は、何れも精選された良書であるために、さしたる變化もなく、重版また重版と、追ひ〳〵に版を重ねて行くことの出来るのは、まことに有難

いこととあります。

▽八月の最新刊三冊は、何れも大好評を受けました。「信玄と謙信」は有名な川中島の大合戦を中心に、して兩英雄の生ひ立ちから最後までを歴史にもとづいて、一々實跡をさぐつて書かれた三島先生の名著でありましたから、評判の高いのは勿論であります。

▽また「アーサー王騎士物語」は、有名な英國の騎士傳説である「アーサー王」と「アーサー王に仕へた騎士」の物語で、これを讀んだ讀者の方々から、盛んに喜びの書面を寄せられるのを見て、本書が如何に優れた興味深い本であるか、おわかりの事と思ひます。

▽また「少年探検家物語」は、本社の出版としても、自慢の一冊でありました。生命をささげて探検に向つた偉人の苦闘の生涯を、少年諸君の讀物として著した久米健一先生の著述です。最初に有名な「ア

リカの探検家」(リビングストーン)の生ひ立ちから、アフリカの變地で命を落す苦しみに至つた、しかし乍ら輝きに満ちた生涯の物語りから始つてゐます。

▽第二は、最初の世界一周である「マゼランのお話」第三は有名な太平洋の開拓者である「キャプテン・クック」の三人の外にも、二つの探検家のお話も出て来ますが、主に此の三人の人の奮闘の物語を述べたものであります。

▽ですから、この本を讀んで感動しない人はいりません。作者もそのはしに、

「この世の中は限りもなく廣い荒蕪のやうなものです。そこへ乗り出す我々には、やはり、探検者と同じやうな「心構へ」が必要であらうと思はれます。私はこの探検者の精神を、なんとかして皆さんにお傳へしよう、一生懸命にやつて見ます。」

と、述べてをられます。この言葉によつて本書の内容を想像していただくことが出来ます。學校の兒童文庫には勿論のこと、各家庭に是非、一冊を備へ愛する少年少女に與へたい、と出版者のわれ〳〵が

手前味噌でなくさう思ひます。

▽九月號の發行圖書は別に記してあります通り「金の星家庭文庫」の第三巻と三島精川先生の維新史「影義隊と白虎隊」と、少年文學名著選集第六巻の「家なき娘」と、輸入世界童話集「印度の巻」の四冊であります。

▽立石美和先生の著書である「少年天才物語」は各方面から非常な期待を受けてありますが、目下川上先生が挿畫と装幀とをやつてお下さいます、間もなく出来上りますから十月はじめにはおそくも出版になります。この本は非常に美しい本でありまして、一枚々々特別印刷の川上四郎先生の苦心の挿畫が廿枚近くも入つてゐますと期待してゐます。

▽尙十月は、出版の好季節でありますから、良書を澤山に發行するつもりで、目下準備中でありま

【近日發行】

三島精川先生著
維新影義隊と白虎隊
哀史

(羽島古山先生畫)

(定價金貳圓・送料十錢)
この本は、「白虎隊」といふ名で發行する讀りでありましたが、前半には有名な影義隊のお話でありましたので、都合上「影義隊と白虎隊」と改めました。

徳川幕府が倒れた當時の江戸の有様、勝安房守や西郷南洲や徳川慶喜公その外有名な維新の人物が活躍する息もつかない場面が澤山にあり、やがて影義隊が起り官軍との大合戦とな、遂に白虎隊の真れにして勇ましい物語までを細かく書いた維新の哀史であります。

例によつて装幀と挿畫とは、羽島古山先生の筆になつた立派なものであります。

金の星社編

○金の星家庭文庫(3)

(定價金貳圓・送料十錢)
この第三巻には「西遊記」ドン・キホーテ「アリム童話」の三種を収めました。例によつて非常に美しい装幀にかざられ、他に比較

○家なき娘

(定價金貳圓廿錢・送料十錢)
「家なき娘」は本社から三井先生の譯述により先きに出版になり、大好評を受けてをりました。今度少年文學名著選集の第六巻として装幀を改めて發行になります。

御承知の通り、この本はフランスの有名な作家エクトル・マローの作つたもので、「家なき娘」の姉妹篇です。パリンヌと呼ぶ哀れな少女が主人公になつてをります。

「家なき娘」と共に是非皆さんの御愛讀になるべき本であります。

○繪入世界童話集

(定價金貳圓五拾錢・送料十錢)
「印度の巻」

大戸喜一郎先生譯

世界の面白い童話を集めた本は澤山にありまうが、この本ほど面白いお話を精選して集め、美しい挿畫を澤山に入れ、装幀の立派な本は先づ外にないと信じてをります。審判の大きな本であります。ほとんど各頁ごとに挿畫が入り、その外に三色版と二色版が澤山入つてゐますので、お話を讀むと、印度のお話を面白く〳〵讀むことが出来ます。

完全を期してをりましたために、だん〳〵に後れてをりましたが、漸く近日出版出来るやうになりました。

「黒馬物語」(讀後感)

東京市外中瀬谷神山七七〇
永井 派秋

僕は此の間、日光に行くので、汽車の中で讀もうと思つて「黒馬物語」を買ひました。

黒馬(アラブタビエーティ)の一生は、なんと變化のはなはだし

いものだつたでせう。

初めはゴルドン家に、つぎにW伯爵に、つぎからつぎへと變り、或は馬車馬に、または情深き馬車

手前味噌でなくさう思ひます。

▽九月號の發行圖書は別に記してあります通り「金の星家庭文庫」の第三巻と三島精川先生の維新史「影義隊と白虎隊」と、少年文學名著選集第六巻の「家なき娘」と、輸入世界童話集「印度の巻」の四冊であります。

▽立石美和先生の著書である「少年天才物語」は各方面から非常な期待を受けてをりますが、目下川上先生が挿畫と装幀とをやつてお下さいます、間もなく出来上りますから十月はじめにはおそくも出版になります。この本は非常に美しい本でありまして、一枚々々特別印刷の川上四郎先生の苦心の挿畫が廿枚近くも入つてゐますと期待してゐます。

▽尙十月は、出版の好季節でありますから、良書を澤山に發行するつもりで、目下準備中でありま

手前味噌でなくさう思ひます。

▽九月號の發行圖書は別に記してあります通り「金の星家庭文庫」の第三巻と三島精川先生の維新史「影義隊と白虎隊」と、少年文學名著選集第六巻の「家なき娘」と、輸入世界童話集「印度の巻」の四冊であります。

系大著名女少年少界世星の金

錢十金料送・錢十九金冊各價定・本美類入箱判六四

編八第	編七第	編六第	編五第	編四第	編三第	編二第	編一第
神話オデッセー物語	アラビヤン・ナイト	ロビン・フッド物語	大人國小人國めぐりガリバー旅行記	神話イリアッド物語	ドン・キホーテ	ナポレオン物語	ロビンソン漂流記
ギリシア神話オデッセー物語	アラビヤン・ナイト	ロビン・フッド物語	大人國小人國めぐりガリバー旅行記	ギリシア神話イリアッド物語	ドン・キホーテ	ナポレオン物語	ロビンソン漂流記
ギリシア神話オデッセー物語	アラビヤン・ナイト	ロビン・フッド物語	大人國小人國めぐりガリバー旅行記	ギリシア神話イリアッド物語	ドン・キホーテ	ナポレオン物語	ロビンソン漂流記

集募作創賞懸

【意注】童童童

課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君の好きなものを、諸君の好きなやうに句なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は学校や学年（または住所と年齢）とともにとさないやうにして下さい。

用紙は童童童ハガキ、童童童や童童童はなるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號締切は九月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は十二月號、宛名は東京市本郷區駒込町三五九番地金の星社。

（一般讀者の創作）

童童童 野口雨情先生選
童童童 齋藤佐次郎先生選
童童童 野口雨情先生選

定價壹冊金四拾錢 送料壹錢五厘
三ヶ月分三冊（送料共）壹圓貳拾錢
半年分六冊（送料共）貳圓四拾錢
一年分十二冊（送料共）四圓八拾錢

但し新年號は特別號で五十錢ですから、御注文の際は分だけ必ず加へてお振込み下さい。

振替口座東京五九五六番

【意注】金の星

御注文は必ず前金で御振込み下さい
送金は振替が一番便利で御座います
切手代用は（送金切手）一割増しです
第何巻第何號よりと書いてください
住所姓名はつきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

昭和二年九月九日印刷（毎月一回）
昭和二年十月一日發行（一日發行）

編輯兼發行人 齋藤 保
印刷人 林 傳一郎
印刷所 三寶印刷合資會社
東京市本郷區駒込町三五九番地
電話 小石川五五三九番

系大著名女少年少界世 星の金 編 社

銭十金料送・銭十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編四十第	編三十第	編二十第	編一十第	編一第	編二第	編三第	編四第
爲朝一代記	青い鳥	物語 不思議國めぐり	母と尋ねて三千里	小公子	アンデルセン童話	ギリシャ英雄物語	奴隸トム物語
この物語は、朝一代の偉業を、その子孫に伝えるために、著者が一生の心血を注ぎ、完成したものである。朝一代は、その時代の先駆者として、多くの困難を乗り越え、その偉業を成し遂げた。この物語は、朝一代の生涯を、その子孫に伝えるために、著者が一生の心血を注ぎ、完成したものである。	この物語は、青い鳥の探検記である。青い鳥は、世界中を巡り、幸せを見つけるために、多くの困難を乗り越え、最終的に幸せを見つけ出す。この物語は、子供たちに、幸せの大切さを教えるための物語である。	この物語は、不思議國めぐりの探検記である。主人公は、不思議國を訪れ、多くの奇妙な出来事を経験する。この物語は、子供たちに、想像力と探検心を育てるための物語である。	この物語は、母と尋ねて三千里の探検記である。主人公は、母を探し求めて、三千里を旅する。この物語は、子供たちに、母の愛の大切さを教えるための物語である。	この物語は、小公子の冒険記である。小公子は、世界中を巡り、多くの奇妙な出来事を経験する。この物語は、子供たちに、想像力と探検心を育てるための物語である。	この物語は、アンデルセン童話の集りである。アンデルセンは、多くの有名な童話を著した。この物語は、子供たちに、想像力と探検心を育てるための物語である。	この物語は、ギリシャ英雄物語の集りである。ギリシャには、多くの有名な英雄がいる。この物語は、子供たちに、勇気と正義の大切さを教えるための物語である。	この物語は、奴隸トム物語の集りである。トムは、奴隷として、多くの困難を乗り越え、最終的に自由を得る。この物語は、子供たちに、正義と勇気の大切さを教えるための物語である。

系大著名女少年少界世 星の金 編 社

銭十金料送・銭十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編六十第	編五十第	編四十第	編三十第	編二十第	編一十第	編一第
聖書物語	ローマ英雄物語	西遊記	キリスト傳 新約物語	神話本 古事記物語	入繪 イソップ物語	グリム童話
この物語は、聖書の物語である。聖書には、多くの有名な物語がある。この物語は、子供たちに、正義と勇気の大切さを教えるための物語である。	この物語は、ローマ英雄物語の集りである。ローマには、多くの有名な英雄がいる。この物語は、子供たちに、勇気と正義の大切さを教えるための物語である。	この物語は、西遊記の物語である。孫悟空は、世界中を巡り、多くの奇妙な出来事を経験する。この物語は、子供たちに、想像力と探検心を育てるための物語である。	この物語は、キリスト傳 新約物語の集りである。キリストは、多くの有名な物語を著した。この物語は、子供たちに、想像力と探検心を育てるための物語である。	この物語は、神話本 古事記物語の集りである。神話には、多くの有名な物語がある。この物語は、子供たちに、想像力と探検心を育てるための物語である。	この物語は、入繪 イソップ物語の集りである。イソップは、多くの有名な物語を著した。この物語は、子供たちに、想像力と探検心を育てるための物語である。	この物語は、グリム童話の集りである。グリムは、多くの有名な童話を著した。この物語は、子供たちに、想像力と探検心を育てるための物語である。

系大著名女少年少界世 星編の金社

錢十金料送。錢十九金冊各價定。本美頗入箱判六四

[illegible]

しなのもるゐてれさ唱愛ごほ集譜曲の社本
集 譜 曲 謠 童 星 の 金

錢六金料送・錢拾八金下以輯三・錢拾六金各輯二輯一

第十三輯	しやんこくお馬	藤井清水作曲 野口雨情作謠	(目曲)	子供は風の子、因幡の白兔、秋の夜
第十二輯	俵はごろく	本居長世作曲 野口雨情作謠	(目曲)	俵はごろく、歌の中、富の蜚蜚、狐の提灯、つまらない、小石
第十一輯	夢のお國	藤井清水作曲 野口雨情作謠	(目曲)	夢のお國、鬼が来い、赤い櫻ンぼ、猫さんお手まり、櫻の歌、砂の数
第十輯	名所めぐり	本居長世作曲 野口雨情作謠	(目曲)	長柄の橋、柱ぐり、阿彌陀池、宮城野の萩、お乳餅、石山寺の秋の月
第九輯	あの町この町	中山晋平作曲 野口雨情作謠	(目曲)	あの町この町、雀踊り、木の葉のお船、高野山、鼠の小母さん、證誠寺の狸囃
第八輯	べんべん鳥	小松耕輔作曲 遠崎龍作謠	(目曲)	べんべん鳥、螢のお使、仔牛、赤い子馬車、紅殻蛸蛤、さみだれ
第七輯	お人形さんの夢	本居長世作曲 野口雨情作謠	(目曲)	お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雄子、芒の穂、お馬のお耳、草遊び、霜柱
第六輯	子守唄	本居長世作曲 野口雨情作謠	(目曲)	子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、はぐれ鳥、葱坊主、蔵の下道
第五輯	夢ごり	小松耕輔作曲 野口雨情作謠	(目曲)	夢ごり、おしやれ橋、つげ子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機織
第四輯	赤い靴	本居長世作曲 野口雨情作謠	(目曲)	赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、朝下館屋、眠り鼈の子
第三輯	青い空	本居長世作曲 野口雨情作謠	(目曲)	青い空、燕、雨夜の傘、でんぐ蟲、雀の酒盛り、呼子鳥
第二輯	一つお星さん	本居長世作曲 野口雨情作謠	(目曲)	一つお星さん、七つの子、鰐と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬
第一輯	人買船	本居長世作曲 野口雨情作謠	(目曲)	人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、踊る燕、十五夜お月さん

磨齒ンオイラ



うれしいな、うれしいな。
ライオンはみがきの御蔭で、
こんなにきれいに、こんなに
ちやうぶになつたわたしの歯。
うれしいな、うれしいな。

